

第325図 区画AF土壤出土遺物(26)

第80表 区画AF土壤出土遺物観察表(9)(第325図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構	備考	図版
1	硝子製品	笄	[4.5]	0.9	0.6	4.8	SK237	黄色透明 中実	
2	硝子製品	笄	[4.1]	0.1	0.8	5.1	SK263	黄色透明 中実 被熱か	

18は粘板岩製の携帯用硯である。側面にはノコギリ状工具痕に類似する平行する線条痕が遺存している。内面には朱墨が付着する。

第324図19は凝灰岩製硯で、内面に刃物傷が多数みられ、研具へ転用されている。

22は粘板岩製の硯で、黒色塗布物がみられる。表面に削り痕、側面には刃物傷状の線条痕がみられ、研具へ転用されている。

#### ⑦区画AGの土壤

区画AGは第6号杭列より南に位置する。南端は調査区外であり、区画の幅は不明である。『絵図』にみえる「明地・明家/平八持」、『営業便覽』にみえる「菅谷藤二郎」である。

土壤は39基検出され、建物跡との重複はみられない。区画中央から西側にかけて密に分布する。平面形態はおよそ隅丸長方形を呈するものが多く、長軸方向は西側の土壤は日光道中と平行する傾向がある。

第81表には位置・規模等の基本的な情報を示した。

本区画で抽出した土壤は第194・203・261・262・264号土壤である。第326・337図に遺構図、第327~355図に各遺構の出土遺物を示した。

非抽出となった土壤は第356・357・358図に遺構図、第359~371図に各種別ごとの出土遺

物を示した。

#### 第194号土壤(第326・327~329図)

F7-G8グリッドに位置し、第264号土壤より新しい。平面形は隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。長軸方位はN-72°-Eを指す。

第264号土壤の中に掘り込まれており、出土遺物も明確な時期差はみられないが、土層の堆積状況から別遺構と考えられる。短期間の間に廃棄が繰り返されたのであろう。覆土は焼土を含むシルト質土を主体とする。

下層には貝類がみられ、ハマグリとサルボウが出土している。その他の自然遺物ではモモの種子がみられる。遺物は、陶器類が多く出土している。磁器の湯呑形碗を主体とし、瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形そり皿(第327図9)を最新期とする。推定廃絶期は19世紀中葉である。

第327~329図に出土遺物を示した。第327図1・2は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。1は大型で口縁部の反りが弱く、2は小型で口縁部の反りが強い。3は肥前系、4は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗である。3は大型で高台高が低く、内外面に染付がみられる。4は小型で、外面は染付である。

5は瀬戸美濃系磁器の小碗である。高台が「ハ」

字状に開き、外面は染付である。

6は肥前系磁器の卵殻手坏である。輪高台で、内面に赤・黒・緑・黄色で上絵付が施される。

9は瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形そり皿である。内面に型押しの陰刻文がみられる。最新期の陶磁器である。

10は肥前系磁器の大皿である。口縁部は輪花

状で、内面に鯉を描いた染付がみられる。鱗部分は陽刻状である。高台内に釘書き「八」がみえる。第203号土壙出土破片と接合関係にある。

13・14は陶器灯明皿のいわゆる油受皿である。受け口の切込みは「V」字状を呈し、地方窯系と考えられる。胎土は緻密、硬質である。

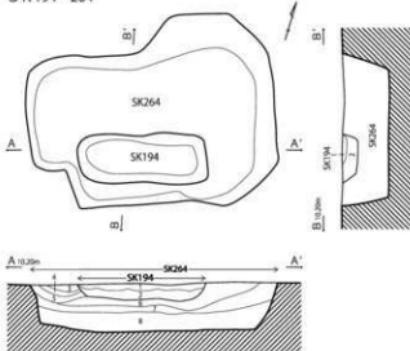
15は地方窯系陶器の香炉である。高台内に白

第81表 第一面区画 AG 土壙一覧表

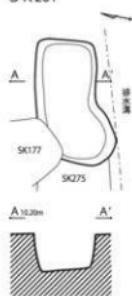
単位: m

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考	挿図
163	F7-G7	隅丸長方形	1.25	0.80	0.15	N-68° -E	SK203と重複	356
168	F7-G7	隅丸長方形	1.05	0.55	0.20	N-11° -W	SK183・203より新	356
174	F7-G7	不明	1.00	(0.65)	0.50	計測不能	SK188・203より新	357
176	F7-G7	円形	0.55	0.50	0.15	N-49° -W	SK331と重複	356
177	F7-G7	楕円形	0.90	0.80	0.40	N-40° -W	SK261・275と重複	356
178	F7-G7	不明	0.80	[0.80]	0.25	計測不能	SK203より新	356
179	F7-G7	隅丸方形	1.10	1.00	0.20	N-21° -W	焼土遺構1・SK203より新 SK208と重複	356
183	F7-G7	隅丸長方形	1.00	0.70	0.05	N-77° -E	SK168より古 SK203より新	356
184	F7-G7	隅丸長方形	0.85	0.60	0.40	N-84° -E	SK185より新 SK262と重複	356
185	F7-G7	楕円形	1.00	(0.40)	0.30	N-57° -E	SK184より古 SK262と重複	356
186	F7-G8	円形	0.65	0.60	0.40	N-17° -W		356
187	F7-G7	円形	0.40	0.35	0.15	N-51° -W		356
188	F7-G7	楕円形	(1.10)	0.80	0.50	N-12° -W	SK174より古 SK202・203より新	357
189	F7-G7	隅丸長方形	2.75	0.70	0.20	N-13° -W	SK204・焼土遺構1より新 P19と重複	357
190	F7-G8	隅丸長方形	1.25	0.55	0.20	N-15° -W		356
191	F7-G8	長楕円形	1.10	0.55	0.30	N-12° -W		356
192	F7-G8	隅丸長方形	1.20	0.75	0.25	N-14° -W	SK193・231と隣接	356
193	F7-G8	隅丸方形	0.85	0.75	0.20	N-13° -W	SK231と重複 SK192と隣接	356
194	F7-G8	隅丸長方形	1.60	0.60	0.20	N-72° -E	SK264より新	326
195	F7-G7	楕円形	0.55	0.40	0.20	N-37° -W		356
202	F7-G7	隅丸長方形	(1.05)	0.80	0.25	N-13° -W	SK188より古 SK242より新 SK203・262と重複	357
203	F7-G7	不整形	4.50	3.90	0.70	N-86° -E	SK168・174・178・179・183・188より古 SK291より新 SK163・202と重複	337
204	F7-G7	不明	0.60	(0.35)	0.05	N-13° -W	SK189より古	357
208	F7-G7	円形	1.05	1.00	0.40	N-50° -W	焼土遺構1より新 SK179・331と重複	357
231	F7-G8	楕円形	0.70	(0.50)	0.15	N-48° -W	SK193と重複 SK192と隣接	356
240	F7-G7	円形	0.80	0.75	0.45	N-48° -W		356
242	F7-G7	不明	(0.25)	0.40	0.15	N-13° -W	SK202より古	357
243	F7-F・G8	楕円形	3.00	1.95	0.50	N-32° -W	SK244と重複	357
244	F7-G8	不整形	1.60	1.20	0.45	N-89° -W	SK243と重複	357
250	F7-G8	楕円形	1.50	(0.70)	0.25	N-72° -E		356
251	F7-G8	楕円形か	0.80	(0.35)	0.30	N-79° -E		358
254	F7-G8	隅丸方形	0.65	0.60	0.30	N-67° -E		358
261	F7-G7	不整形	1.55	0.90	0.45	N-80° -E	SK177・275と重複	326
262	F7-G7	不明	(0.70)	0.60	0.30	N-72° -E	SK184・185・202と重複	326
264	F7-G8	不整形	3.10	2.35	0.60	N-73° -E	SK194より古	326
275	F7-G7	不明	(0.95)	1.05	0.40	N-67° -E	SK291より新 SK177・261と重複	358
291	F7-G7	楕円形	1.15	0.90	0.25	N-75° -E	SK203・275より古	358
309	F7-G8	不整形	1.25	0.95	0.10	N-75° -W		358
331	F7-G7	隅丸長方形	(1.30)	0.70	0.45	N-15° -W	SK176・208と重複	357

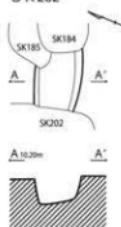
SK 194・264



SK 261



SK 262



- SK 194 (1, 2)・SK 264 (3~8)  
 1 灰褐色土 シルト質 烧土を層状に含む  
 2 灰褐色土 シルト質 烧土粒子少量 豆類含む  
 3 増黄褐色土 シルト質 均質  
 4 増褐色土 シルト質 硅化物 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) 少量  
 5 増褐色土 シルト質 均質  
 6 青灰褐色土 均一 木片含む  
 7 増色有機物層 均一 破壊した木片含む  
 8 青灰土 均一 不均一 木片多量 ラミナ発達

0 2m

第326図 区画AG土壤(1)

化粧がみられ、内上面から外面にかけて白化粧後に鉄絵を施し、施釉している。内底面には重ね焼き痕がみられる。胎土は緻密、硬質である。挿図は接点のない上下2片から復元した。

16は産地不詳陶器の香炉である。胎土は光沢のある石英質である。外面に籠文と鉄軸がみられる。底部には墨書がみられるが、判読できなかつた。

19は瀬戸美濃系陶器の植木鉢である。外面上位に段が付き、口縁部の形状は近・現代的な様相を呈する。弱く被熱している。

21は瓦質土器の蓋である。火消壺の蓋で、口縁部に布目痕が残る漆痕が付着する。胎土に角閃石が一定量含まれ、在地産と推定される。

23は土師質土器の丸底焙烙である。底部は無調整の砂目底で、丸みが弱く、扁平な器形である。体部下位にケズリがみられ、胎土は角閃石が一定量含まれる。在地産と推定される。

24はかわらけの中皿である。底部は糸切痕がナデ消され、二次穿孔がみられる。胎土は細粒な

雲母を含む粉質である。栗橋宿では小皿が主体で、中皿以上の大きさのかわらけは稀である。第264号土壙出土破片と接合関係にある。

第329図25は須恵器の坏である。栗橋宿では、遺構の覆土や整地層などに古代以前の遺物が含まれる。遺構そのものは確認できないものの、栗橋宿周辺に古代以前の遺跡の存在が示唆される。胎土の様相から東金子産の可能性がある。9世紀中葉頃の所産である。

26は輪の羽口である。内面はシワ状痕がみられ、胎土に多量の赤色粒子が含まれる。第三面の第497・500号土壙では多量の羽口が出土している。

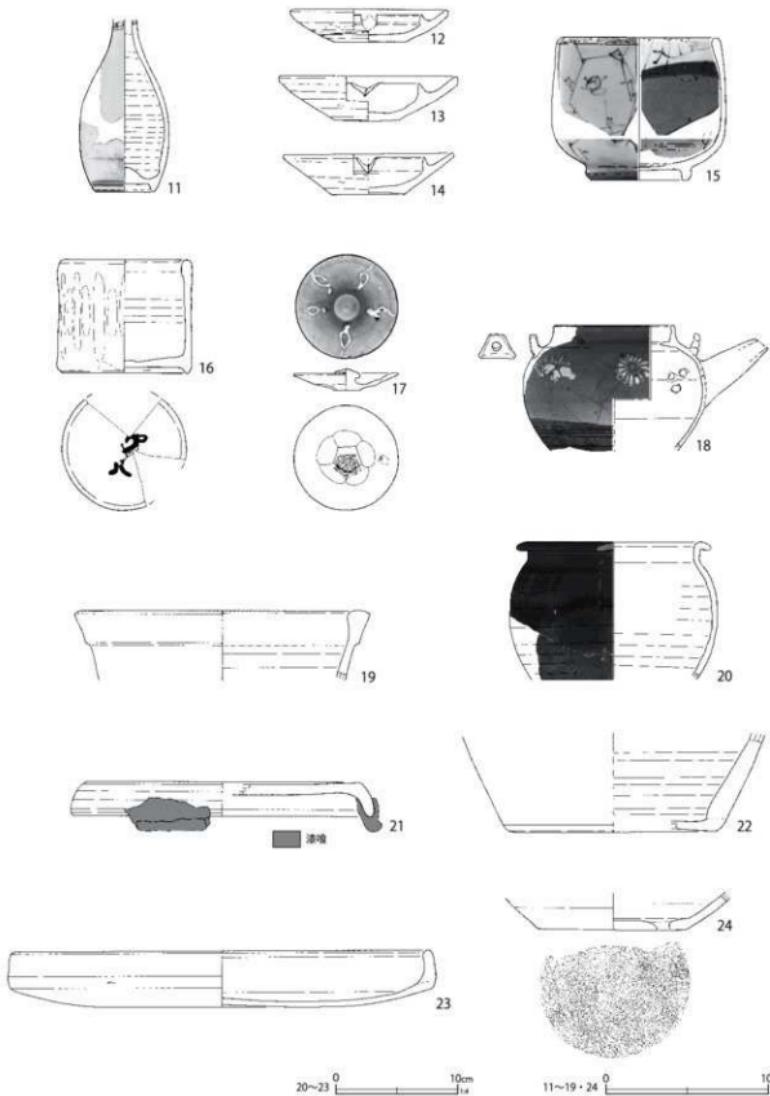
27は土製品の芥子面である。型成形で作られている。

28は隅切りが残る桟瓦である。四面に刃物傷が多数みられ、転用が示唆される。29は袖瓦である。

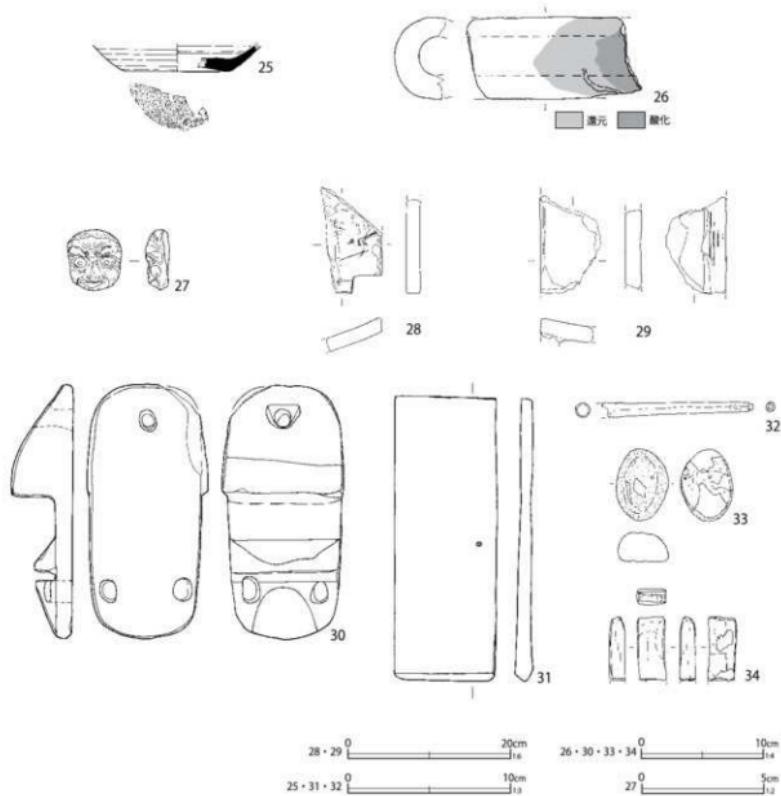
30は木製品の後衛下駄である。被熱によるもののか、焼け焦げがみられる。31は木札である。



第327図 第194号土壤出土遺物（1）



第328図 第194号土壤出土遺物(2)



第329図 第194号土壙出土遺物（3）

墨書「新／〔無類〕／台安」、「①」等がみえるが、意味するところは不明である。

32は用途不明の銅製品である。中空で、端部に栓のようなものが接続する。

33は多孔質の角閃石安山岩製磨石である。下面は平坦で、断面形が半円状を呈する。自然面は大きく残されている。

34は緑色気味の流紋岩製砥石である。側面、裏面に工具痕が遺存する。

第261号土壙（第326・330・331図）

F7-G7グリッドに位置し、第177・275号土壙と重複する。平面形は不整形で、長軸1.55m、短軸0.9m、深さ0.45mを測る。長軸方位はN-80°-Eを指す。覆土の状況は確認できなかった。

遺物は一定量出土している。自然遺物ではヤマトシジミ、ハマグリ、モモの種子が出土している。陶磁器類は瀬戸美濃系磁器の卵殻手杯が最新期である。灯明皿が多く出土しており、すべて瀬戸美濃系である。推定廃絶期は19世紀中葉である。

第82表 第194号土壤出土遺物観察表（第327～329図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	磁器	碗	(10.4)	5.8	(3.8)	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	8.4	4.4	3.3	—	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱	
3	磁器	碗	(7.6)	7.3	3.5	K	45	良好	白	肥前系 内外面施釉	
4	磁器	碗	(6.4)	5.7	(3.0)	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
5	磁器	碗	(6.8)	4.6	(3.2)	—	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉	
6	磁器	环	(5.7)	2.7	(2.7)	—	60	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上染付(赤・緑・黒・黄)	
7	磁器	皿	(15.0)	4.8	8.4	—	75	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上染付(赤・緑・黒・黄) 接合	
8	磁器	皿	13.8	3.9	6.0	—	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押施文 口紅 高台内墨書	76-7
9	磁器	皿	9.4	1.9	5.0	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
10	磁器	皿	(30.6)	6.0	14.7	—	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面陽刻施文 高台内墨書 「八」SK203と接合	
11	磁器	徳利	—	[10.5]	3.5	—	80	良好	白	瀬戸美濃系 外面施釉・染付	
12	陶器	灯明皿	9.2	2.0	4.3	K	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面下位・底部軸引き取り	
13	陶器	灯明皿	10.7	2.8	4.0	EIK	95	良好	灰白	部体輪状重焼痕	
14	陶器	灯明皿	10.3	2.5	4.5	IK	90	良好	灰白	内外面施釉	
15	陶器	香炉	(9.4)	8.7	5.9	K	40	良好	黄灰	内外面白色柱後鉄繪・施釉 高台内白化粧 内底面重焼 積点のない上下2片から複元	
16	陶器	香炉	(7.5)	6.9	7.6	EIK	45	良好	灰白	外面部・鉄釉 高台内墨書	
17	陶器	蓋	—	1.4	1.5	K	100	良好	灰白	底部糸切痕・錫 上面施釉・イッチャン描き文 孔は釉で塞がる 最大径6.4cm	
18	陶器	土瓶	(7.2)	[7.6]	—	K	55	良好	灰白	外面部灰釉・盛绘 内面煤付着	
19	陶器	植木鉢	(18.0)	[4.3]	—	IK	15	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面施釉 被熱(弱)	
20	陶器	甕	(14.4)	[11.3]	—	EIK	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面鐵釉 外面漆黒釉剥落剥け	
21	瓦質土器	蓋	—	[2.8]	(24.5)	CHIK	35	普通	にい・黄	上面砂目 体部上端ケズリ 塗付 口縁部漆喰付着(布目痕あり)	
22	瓦質土器	火消壺	—	[8.0]	(17.0)	CHIK	20	普通	にい・黄	砂目部 体部下端ケズリ 塗付 内面白白色物質付着 外面被熱(剥落)	
23	土質土器	焙烙	(34.0)	4.6	(34.6)	CHIK	35	普通	にい・黄	砂目底 部体下位弱いケズリ 底部端部へ体部・内底面保付着	
24	かわらけ	中皿	—	[2.2]	9.2	AHK	50	普通	にい・黄	底部余切後ヘラナダ 胎土粉質 二次穿孔1遺存 SK264と接合	
25	須恵器	环	—	[1.7]	(6.3)	DEI	20	普通	灰	東金子窯か 9c中葉	
26	土製品	羽口	長さ [13.3] 外径 6.2 内径 3.2 重さ 27.2	—	—	CFHI	40	普通	明褐色	内面シワ状痕 外面ケズリ 胎土赤色粒子多量	
27	土製品	芥子面	長さ 2.5 幅 2.2 厚さ 1.0 重さ 4.5	—	—	AHK	—	良好	椎	一枚型成形 中実	122-13
28	瓦	棲瓦	長さ [13.1] 幅 [7.6] 厚さ 1.7 高さ [4.3]	—	—	AHK	—	普通	灰白	塗付 刀物傷あり	
29	瓦	袖瓦	長さ [12.0] 幅 [7.5] 厚さ 2.8 高さ [3.5]	—	—	AHK	—	普通	灰白	塗付	123-20
30	木製品	下駄	長さ 20.8 幅 9.0 高さ 5.1	—	—	—	—	—	—	板目 後衝下駄 一部炭化	
31	木製品	木札	長さ 17.4 幅 6.3 厚さ 1.1	—	—	—	—	—	—	板目 表面墨書き 槌の側板転用	146-2
32	銅製品	不明	長さ [9.4] 従 0.9 厚さ 0.1 重さ 9.6	—	—	—	—	—	—	中空 端部に栓孔	
33	石製品	磨石	長さ 5.9 幅 4.3 厚さ 2.4 重さ 32.8	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面1	140-3
34	石製品	砥石	長さ [5.2] 幅 2.4 厚さ 1.3 重さ 31.0	—	—	—	—	—	—	流紋岩(緑色) 側・裏面幅広工具痕カ 砥面4	

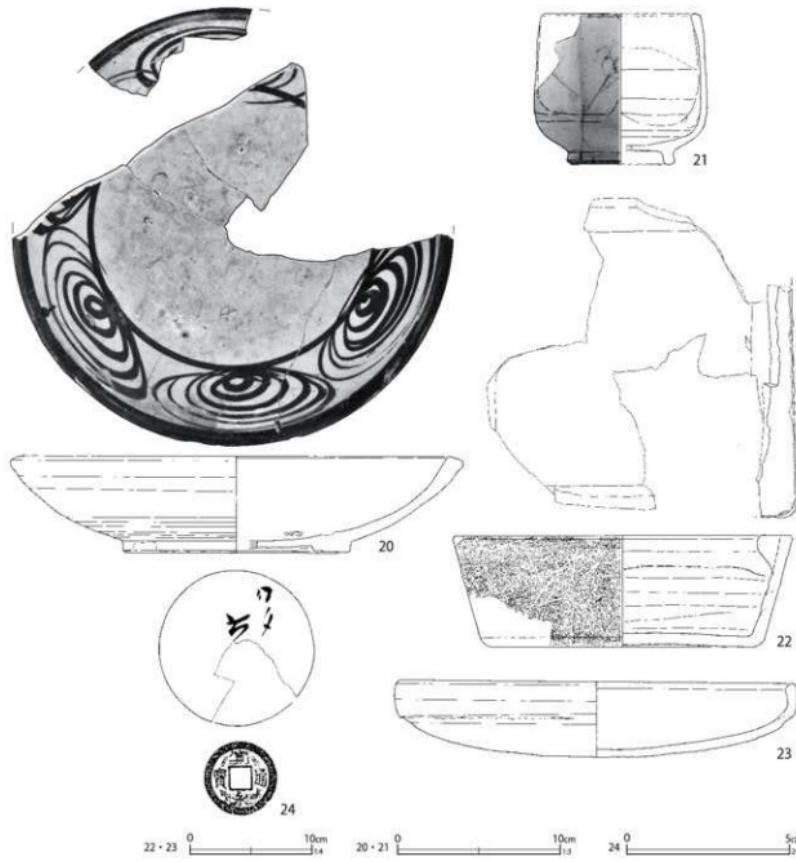
第330・331図に出土遺物を図示した。第330図1は肥前系磁器の広東碗である。内外面に染付が施され、焼継痕がみられる。2は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗である。外面に染付がみられる。3・4は瀬戸美濃系磁器の端反形環である。内面に染付がみられ、4は薄手である。

5は瀬戸美濃系、6は肥前系磁器の卵殻手環である。高台は輪高台を呈し、5は赤と緑で上絵付が施され、外面に「△」、内面に文字がみえる。焼継痕がみられ、高台内には焼継印が認められる。6は内面に染付が施される。

7は肥前系磁器の五寸皿である。高台の低い



第330図 第261号土壤出土遺物（1）



第331図 第261号土壙出土遺物（2）

蛇ノ目四形高台で、内底面は笹文の染付がみられ

る。内側面は墨弾き染付である。

る。内側面は墨弾き染付である。

8は肥前系磁器の中皿である。内外面に染付が施され、平面は八角形と推定される。高台内に窯道具痕が4箇所みられる。

9は糠白釉がかかる落し蓋で、大堀相馬系陶器の可能性がある。

10・11瀬戸美濃系陶器の坏である。内外面に

軸が施釉され、ナデ高台である。

12～19は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。12～14は油皿で、外面下位から底部にかけて釉が拭き取られている。12・14は内面、13は内外面に輪状重ね焼き痕がみられる。15～19は油受皿である。受け口の切込み形状は15～17・19は「U」字状、18は角形である。外面下位から底部にかけて釉が拭き取られ、17～19は外面

第 83 表 第 261 号土壤出土遺物観察表 (第 330・331 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(13.0)	[5.4]	—	—	35	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼成痕あり	
2	磁器	碗	(7.8)	6.4	(4.6)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
3	磁器	杯	(6.0)	3.0	(2.8)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	
4	磁器	杯	6.0	3.3	2.7	—	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 上絵付(緑・赤)「△」焼	70-9
5	磁器	杯	(6.8)	3.3	3.3	—	40	良好	白	燒成痕あり 高台内に焼印(赤)	
6	磁器	杯	(7.0)	3.1	(3.0)	—	40	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付	
7	磁器	皿	13.6	3.6	8.4	—	95	良好	灰白	肥前系 内外面施釉(外面刷毛目釉状)・染付	
8	磁器	皿	(21.8)	2.6	12.7	—	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ハリ支脚4あり	
9	陶器	蓋	(7.6)	1.4	(4.6)	K	35	良好	灰白	大昭和系カ 上面難白釉	
10	陶器	杯	(6.0)	3.5	2.8	IK	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
11	陶器	杯	(6.2)	3.5	(2.9)	EIK	45	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
12	陶器	灯明皿	9.5	1.9	4.0	IK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り 内面輪状重焼痕(径4.4cm)	
13	陶器	灯明皿	9.4	2.1	4.7	IK	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り・輪状重焼痕	
14	陶器	灯明皿	10.0	2.1	4.2	IK	100	良好	にぶい黄澄	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り 内面輪状重焼痕(径3.3cm)	
15	陶器	灯明皿	9.6	2.5	4.7	IK	95	良好	にぶい黄澄	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り 体部下位重焼痕 SK275と接合	
16	陶器	灯明皿	9.6	2.0	4.6	IK	30	良好	にぶい黄澄	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り	
17	陶器	灯明皿	9.7	2.3	4.7	IK	100	良好	にぶい黄澄	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り 体部輪状重焼痕(径6.8cm)	
18	陶器	灯明皿	9.4	2.0	4.8	IK	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り 体部輪状重焼痕	
19	陶器	灯明皿	9.4	2.0	4.4	IK	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部下位・底部釉拭き取り 体部輪状重焼痕 17度(径6.8cm)	
20	陶器	皿	(26.0)	[5.9]	13.5	EIK	65	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄繪・目跡5遺存 高台裏書「ワノメ / 六」	
21	陶器	香炉	(8.9)	9.2	(6.0)	IK	25	良好	灰黃	内外面白化粧後施釉 外面鉄繪 高台内自白粧 内底面 輪状重焼痕 六角形	
22	瓦質土器	火鉢	27.6	[9.1]	21.8	CIK	50	普通	灰白	砂目底 外面ニラナデ 口縁部敲打痕 剥落著しい 脚部欠失	
23	土師質土器	信格	32.2	6.2	32.2	CFGK	80	普通	にぶい椎	底部シワ状痕 体部煤付着	70-6
24	銅製品	錢貨	径23.0	厚さ1.0	重さ2.6					寛永通寶(新)	

に輪状重ね焼き痕がみられる。

第 331 図 20 は瀬戸美濃系陶器の馬目皿である。灰釉が施釉され、内面は鉄絵である。高台内に墨書「ワノメ / 六」がみえる。「六」の下は欠失している。馬目皿の大きさ、もしくは値段を意味するのであろうか。

21 は産地不詳陶器の六角形を呈する香炉である。第 194 号土壤出土製品(第 328 図 15)と同一個体の可能性がある。高台内に白化粧がみられ、内面上位から外面にかけて、白化粧後に鉄絵を施し、施釉している。

22 は瓦質土器の角火鉢である。底部無調整の砂目底で、体部はヘラナデ調整である。口縁部は

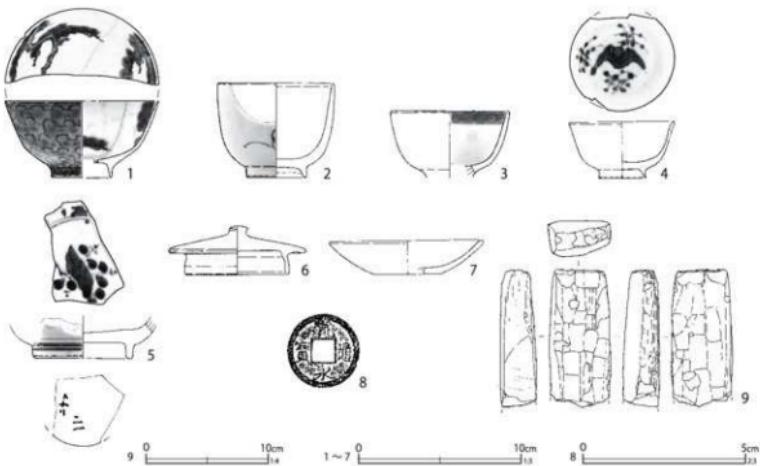
敲打による剥落が著しい。四脚の脚部は欠失している。23 は土師質土器の丸底焙烙である。底部は無調整でシワ状痕が残る。底部の丸みは顕著で、器高が高い。

24 は銅製の新寛永通寶である。

#### 第 262 号土壤 (第 326・332 図)

F 7-G 7 グリッドに位置し、第 184・185・202 号土壤と重複する。平面形は、重複により東西端が壊されており、不詳である。検出長軸は 0.7 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 m を測り、長軸方位は N-72° - E を指す。覆土は確認することができなかった。

出土遺物は少量だが、瀬戸美濃系磁器の湯呑形



第332図 第262号土壤出土遺物

第84表 第262号土壤出土遺物観察表(第332図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版
1	磁器	碗	(9.3)	4.7	(3.6)	—	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	(7.0)	5.8	3.5	—	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
3	磁器	碗	(7.2)	[4.0]	—	—	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 (外面埋積釉) 内面染付	
4	磁器	壺	6.4	3.5	2.8	—	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	
5	磁器	鉢	—	[2.6]	(5.8)	—	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼締印 (赤) 被熱	77-10
6	陶器	蓋	(8.5)	3.0	(6.2)	K	60	普通	灰白	大堀相馬系カ 上面糠白釉 被熟カ	
7	施釉土器	灯明皿	(9.4)	2.1	(4.0)	AIK	20	普通	根	江戸在地系 底部糸切痕 胎土粉質 内外面施釉 (剥落) 口縁部煤付者	
8	銅製品	鏡背	径22.8 厚さ1.2 重さ2.5							寶永通寶(新)	
9	石製品	砥石	長さ[11.3] 幅5.1 厚さ2.9 重さ248.8							流紋岩(緑色) 表・側・裏面櫛衝状工具痕 砥面1	139-14

碗、瑠璃釉の小碗が最新期の陶磁器である。推定廃絶期は19世紀中葉である。

第332図に出土遺物を図示した。1は肥前系磁器の丸碗である。内外面に丁寧な染付が施され、極めて薄手である。

2～5は瀬戸美濃系磁器である。2は外面に染付が施される湯呑形碗である。3は外面瑠璃釉の小碗で、内面に染付がみられる。4は端反形壺で、内面に染付がみられる。5は八角鉢と考えられ、内外面に染付がみられる。焼締痕があり、高台内に焼締印が認められる。

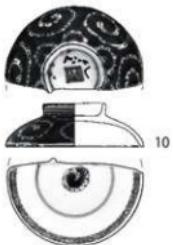
6は上面に糠白釉が施釉されている土瓶の蓋である。大堀相馬系陶器の可能性がある。

7は江戸在地系施釉土器の灯明皿である。底部に糸切痕がわずかに遺存し、胎土は粉質である。透明釉が施釉されるが、著しく剥落している。口縁部には使用痕と思われる煤が付着する

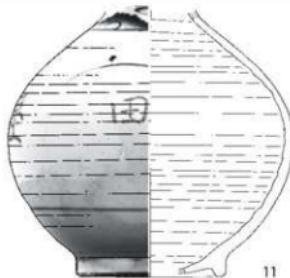
8は銅製の新寛永通寶である。9は緑色を呈する流紋岩製砥石である。表面、右側面に櫛衝状工具痕がみられる。裏面も同様の工具痕と推定されるが櫛衝状の条線が不明瞭である。左側面砥面となっている。



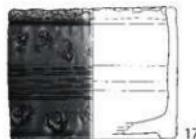
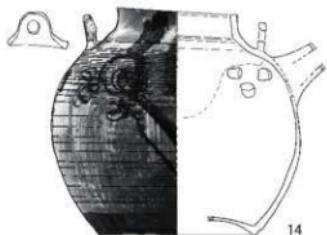
第333図 第264号土壤出土遺物（1）



星 田 林

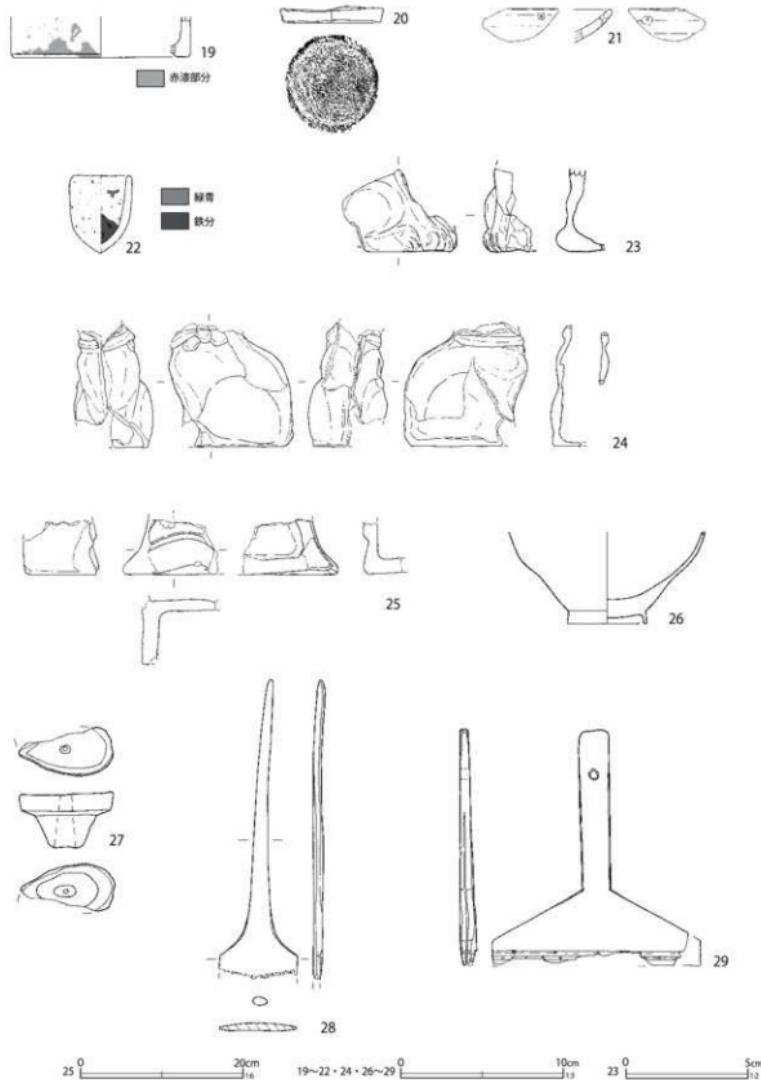


■ タール状物質

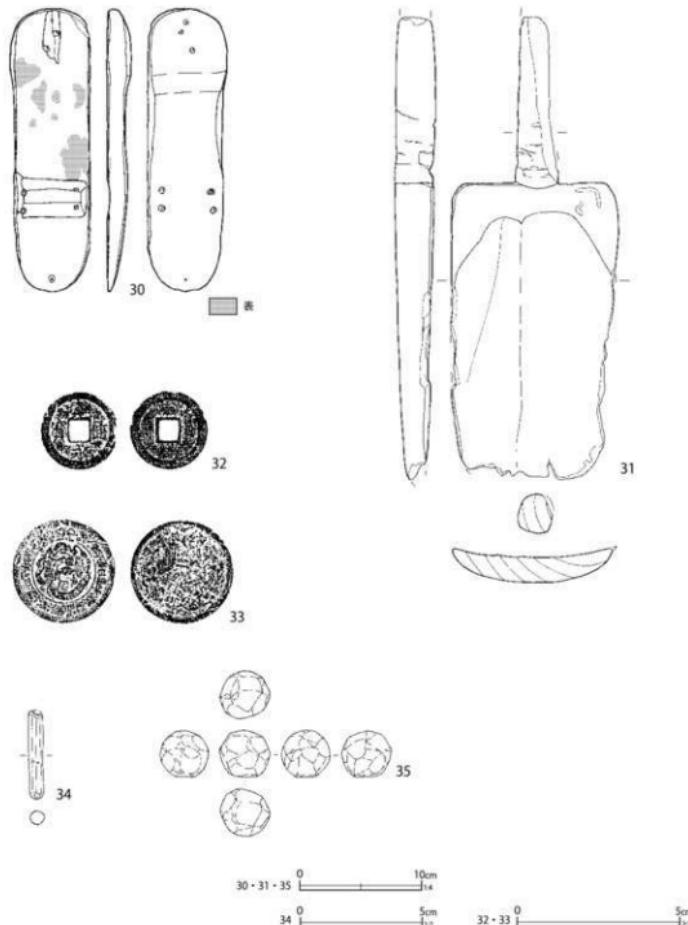


18 0 10cm 14  
9~17 0 10cm 13

第334図 第264号土壤出土遺物(2)



第335図 第264号土壤出土遺物（3）



第336図 第264号土壙出土遺物(4)

#### 第264号土壙(第326・333~336図)

F7-G8グリッドに位置し、第194号土壙より古い。平面形は不整形で、長軸3.1m、短軸2.35m、深さ0.6mを測る。長軸方位はN-73°-Eを指す。

第196・197・205・211・212号土壙と重複関係にあったが、時期差のない出土遺物の様相や覆土の状況から第264号土壙に統合した。出土遺物は第264号土壙出土として扱った。

覆土は大部分が木片等の木質で構成され、上層

第 85 表 第 264 号土壤出土遺物観察表 (第 333 ~ 336 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	7.0	6.0	3.3	-	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	碗	6.8	6.0	3.3	-	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
3	磁器	碗	7.2	6.2	4.1	-	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・焼成 焼締痕あり 高台内燒印(赤)	
4	磁器	碗	(6.1)	4.3	(2.5)	-	35	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
5	磁器	碗	(6.0)	4.1	2.8	-	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
6	磁器	杯	-	[2.2]	2.3	-	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付(青)波黒(油・釉剥落)	
7	磁器	皿	28.8	4.7	16.1	-	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ハリ支路7	
8	磁器	鉢	17.1	9.2	8.3	-	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
9	磁器	蓋	4.1	2.9	9.7	-	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
10	磁器	蓋	8.3	2.6	3.7	-	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼締痕 高台内燒印(赤)	
11	磁器	徳利	-	[16.3]	8.5	K	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付・釘書「森田屋」	77-12
12	陶器	杯	5.3	3.5	2.7	EIK	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 口縁欠失部にタール状物質付着	
13	陶器	土瓶	(6.7)	[9.4]	-	IK	20	良好	灰白	外面青緑釉	
14	陶器	土瓶	7.4	13.9	(9.6)	EIK	80	良好	灰	内外面施釉 外面白土刷毛塗・鉄繪	
15	陶器	蓋	7.0	[1.6]	(5.0)	K	25	良好	にぶい黄褐色	上面白化粧・鉄繪・緑色彩・施釉	
16	陶器	蓋	8.4	[2.3]	(6.4)	K	45	良好	灰白	上面青緑釉	
17	陶器	香炉	9.7	8.0	8.4	DEIK	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面緑釉・捺刻施文 底部累巒 口縁部破壊直痕	
18	土師質土器	燈籠	33.7	[4.5]	33.8	CHIK	55	普通	にぶい黄褐色	砂目底 修補痕4遺存 底部周縁・内底面側付着	
19	土師質土器	鉢カ	[10.6]	[2.5]	-	AHKH	15	良好	にぶい褐色	外面漆状塗布物付着・下端部黒色付着物	
20	土師質土器	蓋	6.2	1.0	5.7	ADHJK	95	普通	にぶい褐色	上面板状压痕 烧塗壺の蓋	
21	かわらけ	中皿	-	[2.0]	-	AHKH	5	普通	にぶい褐色	江戸在地系 胎土粉質 二次穿孔1遺存	
22	土器	埴輪	3.4	4.8	-	-	100	普通	灰白	内面緑青塗・鉄分付着 外面被熱(発泡・ガラス化)	
23	土製品	人形	長さ [3.4] 幅 [4.7] 厚さ 1.1 重さ 41.5	-	-	AHKH	-	良好	にぶい褐色	江戸在地系 弧 左右合二枚型形成 中空	
24	土製品	人形	長さ [7.6] 幅 [7.6] 厚さ 0.7 重さ 52.8	-	-	AIK	-	良好	燈	犬 左右合二枚型形成 中空 胎土粉質	120-14
25	瓦	鬼瓦	長さ [9.7] 幅 [11.6] 厚さ 3.5 高さ [8.7]	-	-	AIK	-	普通	灰	弱く銀化 穿孔あり	124-12
26	木製品	漆椀	高さ [5.6] 底径 4.9	-	-	-	-	-	-	横木取り 内面赤漆 外面黒漆	
27	木製品	脚カ	長さ 3.4 幅 5.8 厚さ [2.9]	-	-	-	-	-	-	祇目	
28	木製品	櫛	長さ 4.8 幅 [18.4] 厚さ 0.6	-	-	-	-	-	-	板目	
29	木製品	刷毛	長さ 14.4 幅 (12.8) 厚さ 0.8	-	-	-	-	-	-	祇目	
30	木製品	下駄	長さ 23.2 幅 6.5 高さ 2.0	-	-	-	-	-	-	祇目 無眼天下駄 表模存	
31	木製品	繩	長さ [37.9] 幅 13.7 厚さ 3.2	-	-	-	-	-	-	板目 柄に工具痕多数 鉄釘残存 焼印	130-5
32	銅製品	錢貨	径 24.1 厚さ 0.9 重さ 2.2	-	-	-	-	-	-	寛永通寶(新)	
33	銅製品	錢貨	径 32.0 厚さ 2.3 重さ 13.2	-	-	-	-	-	-	二銭銅貨 明治一四年	
34	石製品	石斧	長さ [3.5] 幅 0.6 厚さ 0.6 重さ 2.9	-	-	-	-	-	-	滑石 向端使用	
35	石製品	砥石カ	長さ 3.8 幅 4.1 厚さ 3.9 重さ 75.4	-	-	-	-	-	-	砂岩(細粒) 全面砥面で多面体を呈する	138-10

はシルト質土で、一部炭化物が含まれる。

出土遺物は極めて多く、陶磁器類は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗を主体とし、江戸絵付けの卵殻手

杯を最新期とする。明治十四年鑄造の二銭銅貨は後世の混入である。推定廃絶期は19世紀中葉である。

第 333 ~ 336 図に出土遺物を図示した。第 333 図 1 ~ 3 は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗である。1 ~

2 は外面に同文の染付がみられる。3 は内外面に染付が施され、焼締痕がみられる。高台内には焼締印が認められる。

4 ~ 5 は瀬戸美濃系磁器の小碗である。内外面に同文の染付がみられる。

6 は瀬戸美濃系磁器の卵殻手杯で、最新期の陶磁器である。内面に江戸絵付けがみられ、高台疊付けは内側に段が付く。強く被熱しており、釉の

剥落が著しい。

7は肥前系磁器の内面に一枚絵の染付が施される皿である。口径28.8cmを測り、大皿に近い大きさである。口縁部は輪花状に成形され、高台内には窯道具痕が7箇所みられる。

8は肥前系磁器の八角鉢である。口縁部に反りがみられる大型製品で、高台は輪高台である。

第334図9・10は肥前系磁器の蓋である。9は端反形碗の蓋で、薄手で口縁部の反りは弱い。内外面に染付が施される。10は丸碗の蓋である。内外面に染付が施され、焼継痕とつまみ内に焼継印がみられる。

11は肥前系磁器の大型長頸壺である。外面に染付が施され、釦書き「森田屋」がみえる。「森田屋」は第7地点(『栗橋宿跡IV』)に集中的してみられ、「森吉」、「森田屋」等の文字資料がみえる。

12は瀬戸美濃系陶器の壺である。灰釉が施釉され、口縁部に「V」字状の欠失がみられる。欠失部には、タール状物質が付着している。灯火具への転用が示唆される。

13は産地不詳陶器の青土瓶である。外面に青緑釉が施釉され、把手は型成形である。器形は胴部が張り、ソロバン形に近い形状である。注口部は鉄砲口である。

14は産地不詳陶器の土瓶である。内外面が施釉され、外面には刷毛塗状に塗布された白土と鉄絵がみられる。器形は球状で、注口部は鉄砲口である。

15は産地不詳陶器の三彩土瓶の蓋である。上面を白化粧後に鉄絵と緑釉彩を施す。

16は産地不詳陶器の青土瓶の蓋である。上面に青緑釉が施釉される。

17は瀬戸美濃系陶器の筒形香炉である。外面に陰刻文と櫛歯状文施文がみられ、緑釉が施釉される。底部に墨書がみられるが、判読できない。口縁部には敲打痕がみられる。

18は土師質土器の丸底壺である。底部は無

調整の砂目底で、丸みが弱い。補修痕である二次穿孔が4箇所遺存する。底部と内底面に使用痕と思われる煤が付着する。

第335図19は鉢の可能性が考えられる土師質土器である。外面に著しく剥落した漆状の塗布物が付着し、下端部には黒色の付着物がみられる。

20は土師質土器の蓋である。焼塗壺の蓋で、断面形は逆台形を呈する。下面に圧痕がみられる。胎土は極めて多様な駆物がみられ、白色針状物質も特徴的である。

22は砲弾形を呈する土製坩堝である。綠青が僅かに付着し、内底面には鉄分の付着も認められる。第8地点では坩堝の出土が多く、金属生産に関わりが深いと考えられる。

23は狐を模したと推定される江戸在地系の土製人形である。右側面の手足が遺存する。左右合わせの二枚型成形で、中空である。

24は犬を模した土製人形である。大型の中空製品で、左右合わせの二枚型成形である。下面是型合わせの痕に沿って欠損している。

25は鬼瓦である。角にあたる部分と考えられ、焼しにより弱く銀化する。

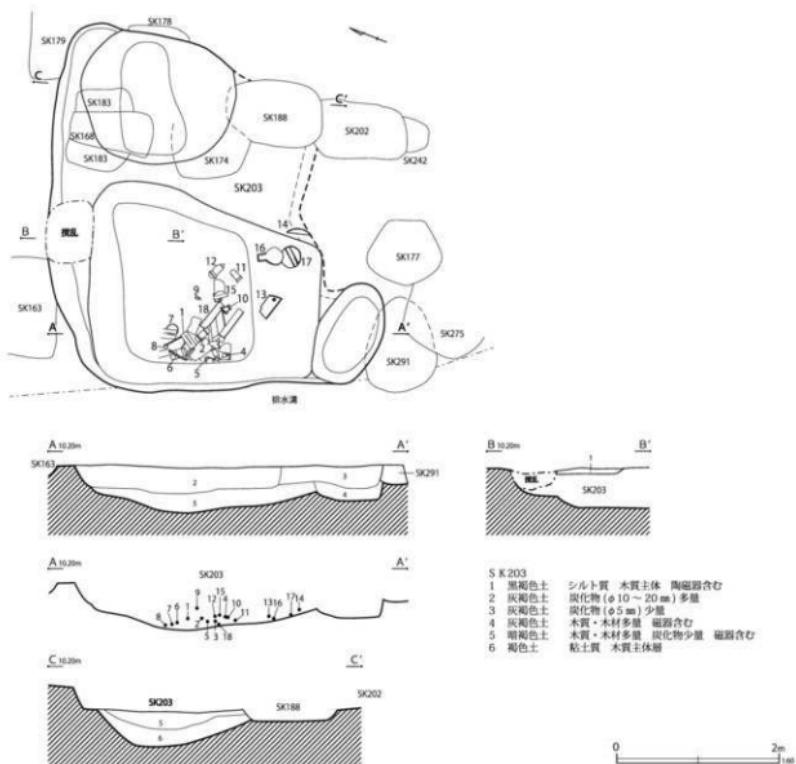
26は木製の漆椀である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。器形は瀬戸美濃系陶器の天目碗に類似する。

第336図30は木製の無眼下駄である。表が部分的に遺存する。

31は木製の鬚である。柄に工具痕が多数みられ、鉄釘が遺存する。焼印がみられるが、判読できない。

35は砾石の一種と思われる多面体状の石製品である。石材は細粒な砂岩で、使用により多面を形成し、面は滑らかである。球状に近い形状となっている。豊島区の町入地である巣鴨遺跡ハーモニーハイツ地区(豊島区2007)で多く出土しており、球状石製品と報告されている。民俗資料から鍛冶と関係する遺物の可能性が考えられるが、

## SK 203



ハーモニーハイツ地区では、埋設桶からの出土がほとんどである。なお、ハーモニーハイツ地区では鍛冶炉が検出されている。

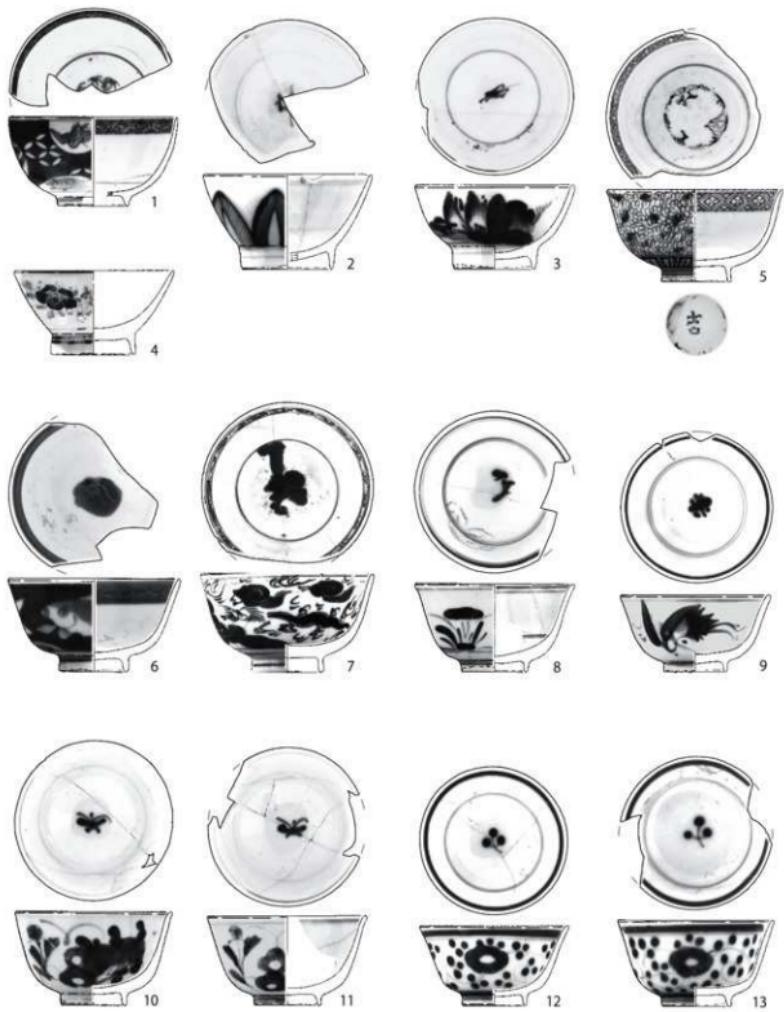
#### 第203号土壌(第337~355図)

F 7-G 7グリッドに位置する。第168・174・178・179・183・188より古く、第291号土壌より新しい。さらに、第163・202号土壌と重複する。平面形は不整形で、長軸4.5m、短軸3.9m、深さ0.7mを測る大型の土壌である。長軸方位はN-86°-Eを指す。

第206・279・290・326・327号土壌は、覆土の状況と、出土遺物に混入や時期差がないことから第203号土壌に統合し、遺構番号は欠番とした。複数回にわたる廃棄が推定される。

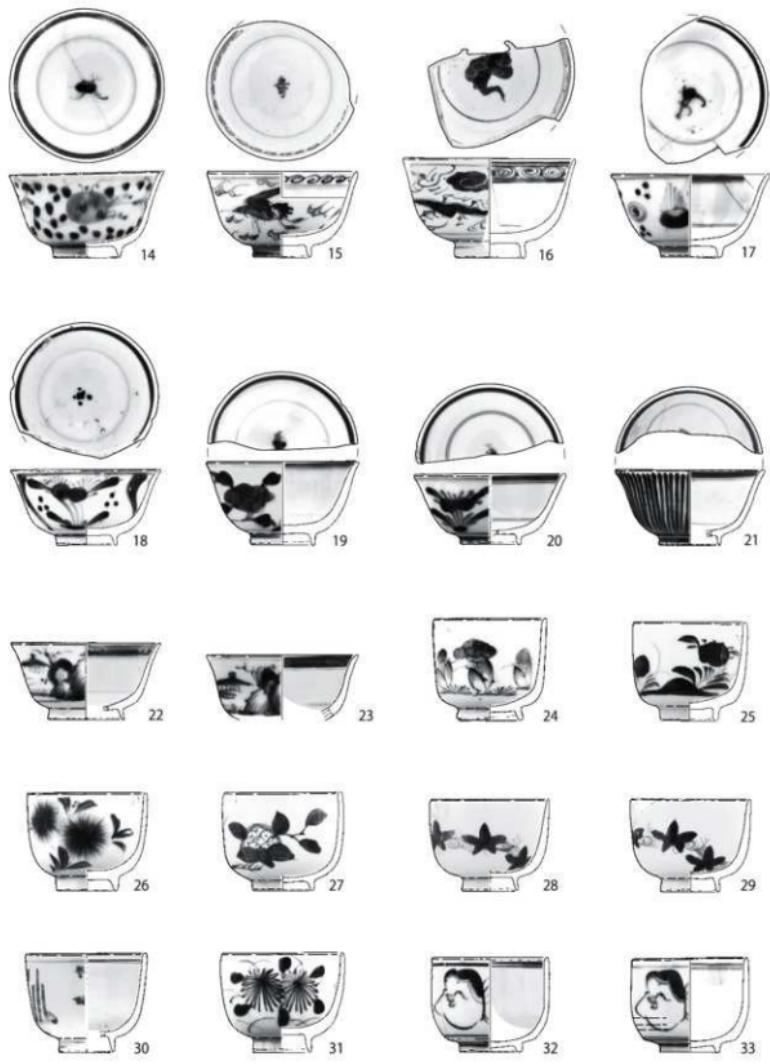
覆土は下層に木材等の木質が多量に投棄されており、それらを覆うように炭化物が多量に含まれる灰褐色土が堆積している。

極めて多量の遺物が出土しており、碗、壺、中皿、鉢、土瓶を中心としている。飲食系の商売性が高い器種組成である。しかし、「絵図」では「明



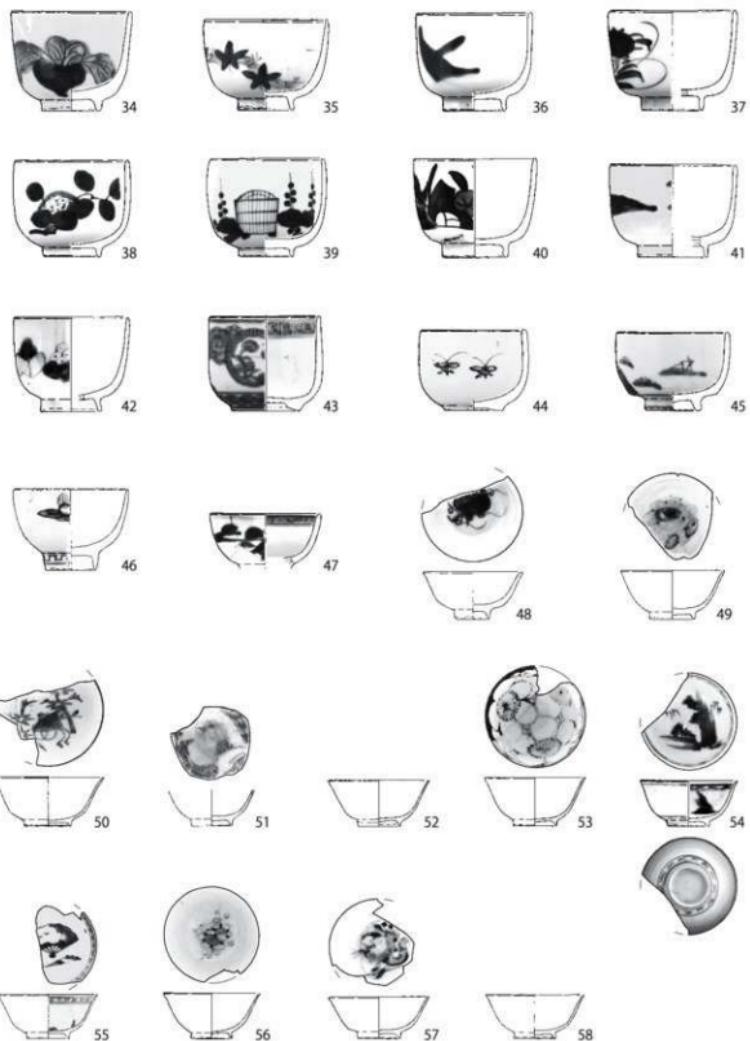
0 10cm

第338図 第203号土壤出土遺物(1)



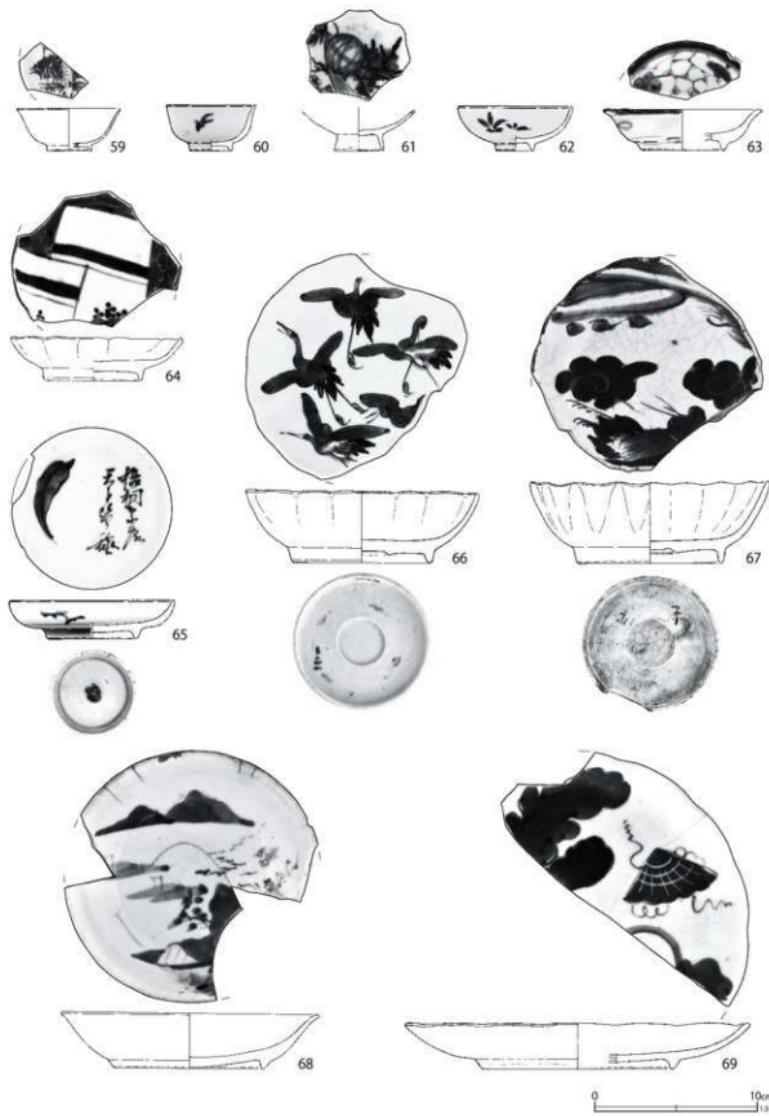
0 10cm

第339図 第203号土壤出土遺物（2）

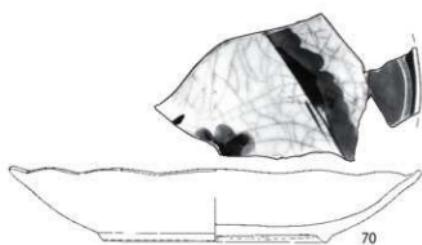


0 10cm

第340図 第203号土壤出土遺物(3)



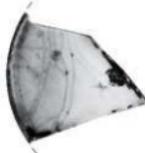
第341図 第203号土壤出土遺物(4)



70



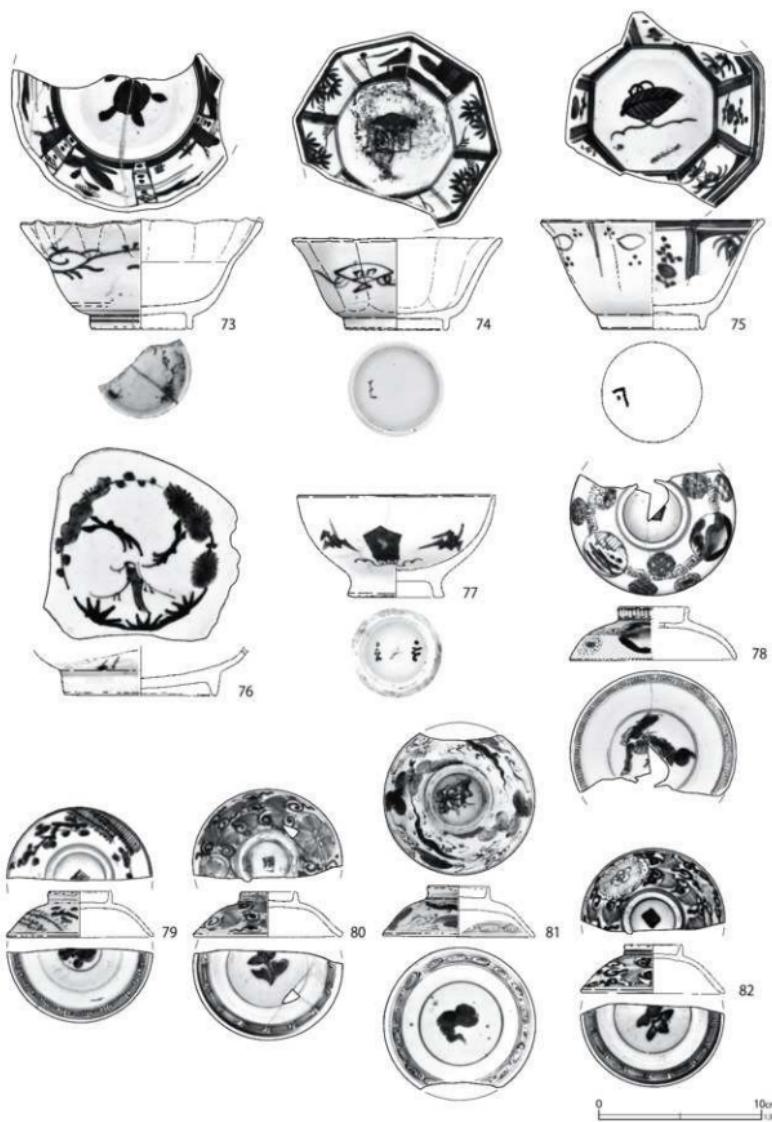
71



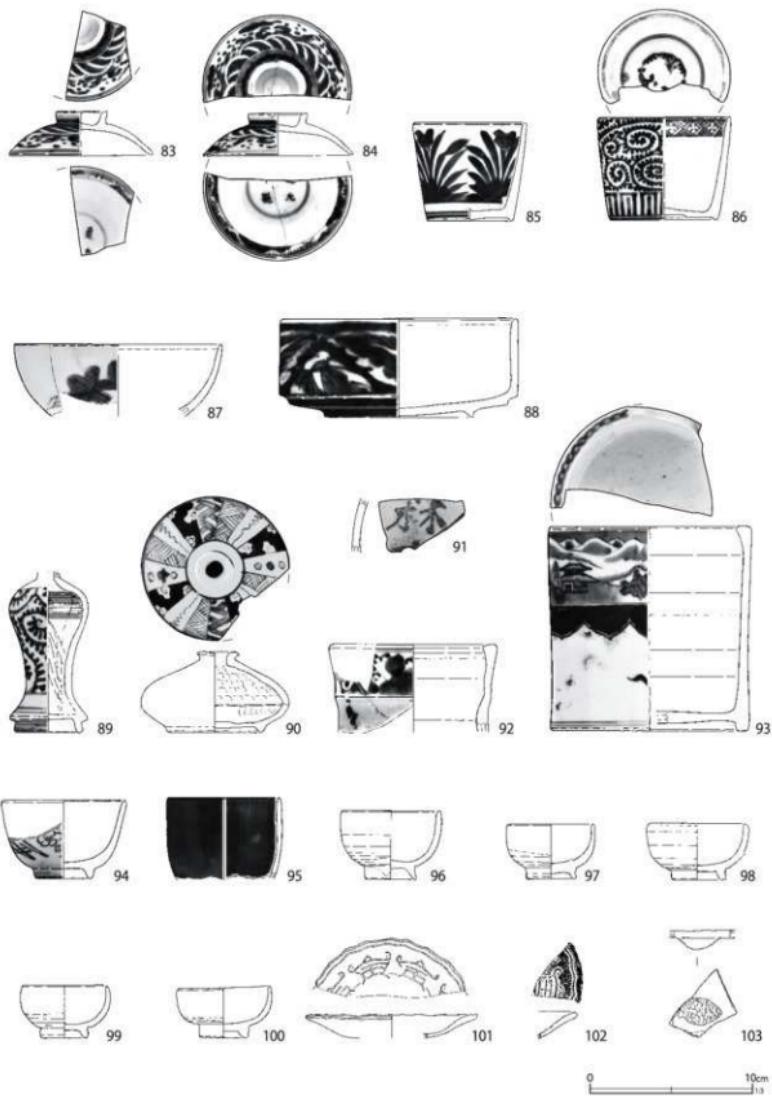
72



第342図 第203号土壤出土遺物(5)



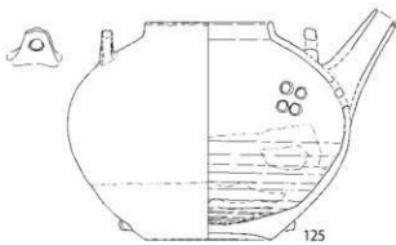
第343図 第203号土壤出土遺物（6）



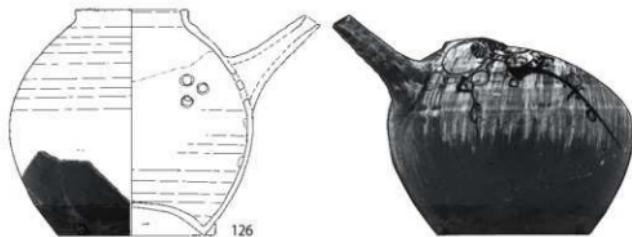
第344図 第203号土壤出土遺物(7)



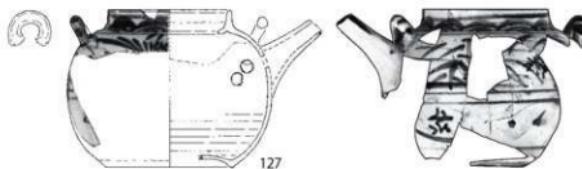
第345図 第203号土壤出土遺物（8）



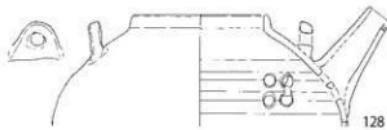
125



126



127



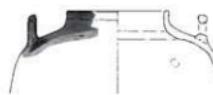
128



129



130



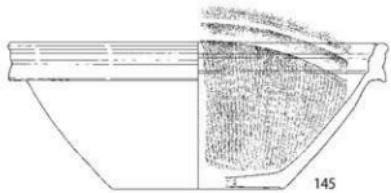
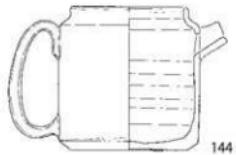
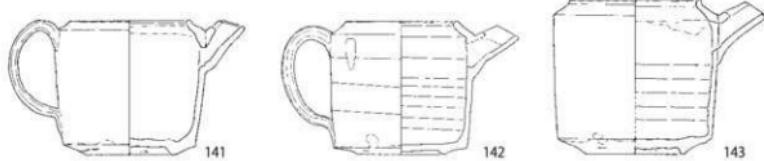
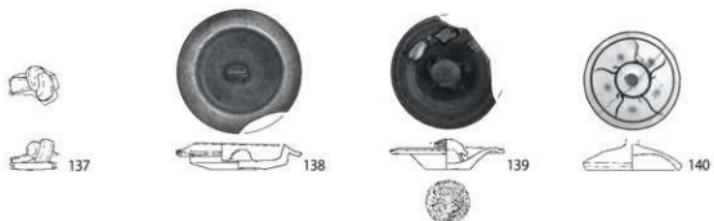
131



132

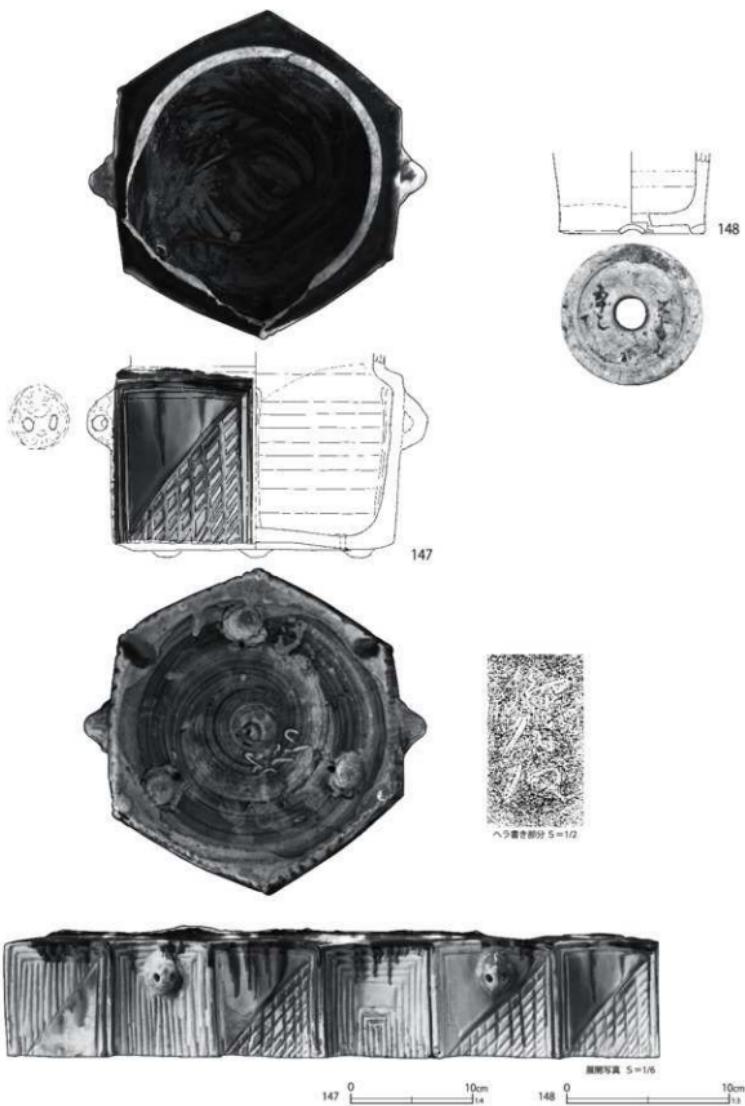


第346図 第203号土壤出土遺物(9)

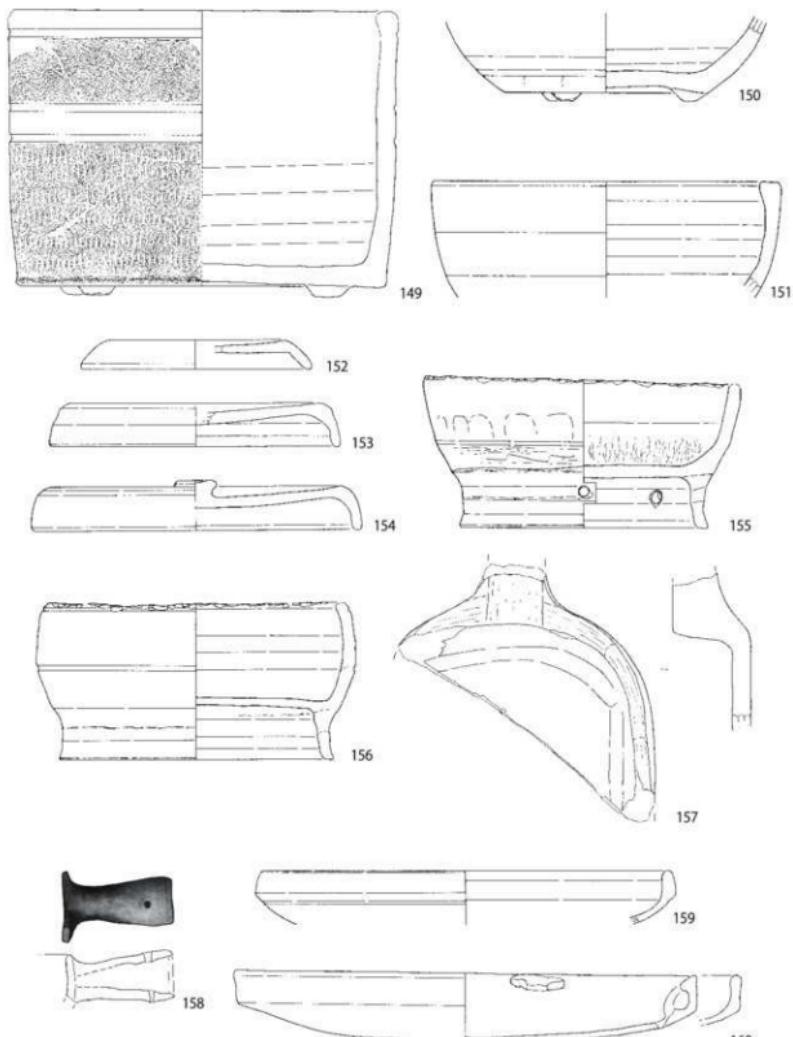


145~146 0 10cm 14 133~144 0 10cm 13

第347図 第203号土壤出土遺物(10)

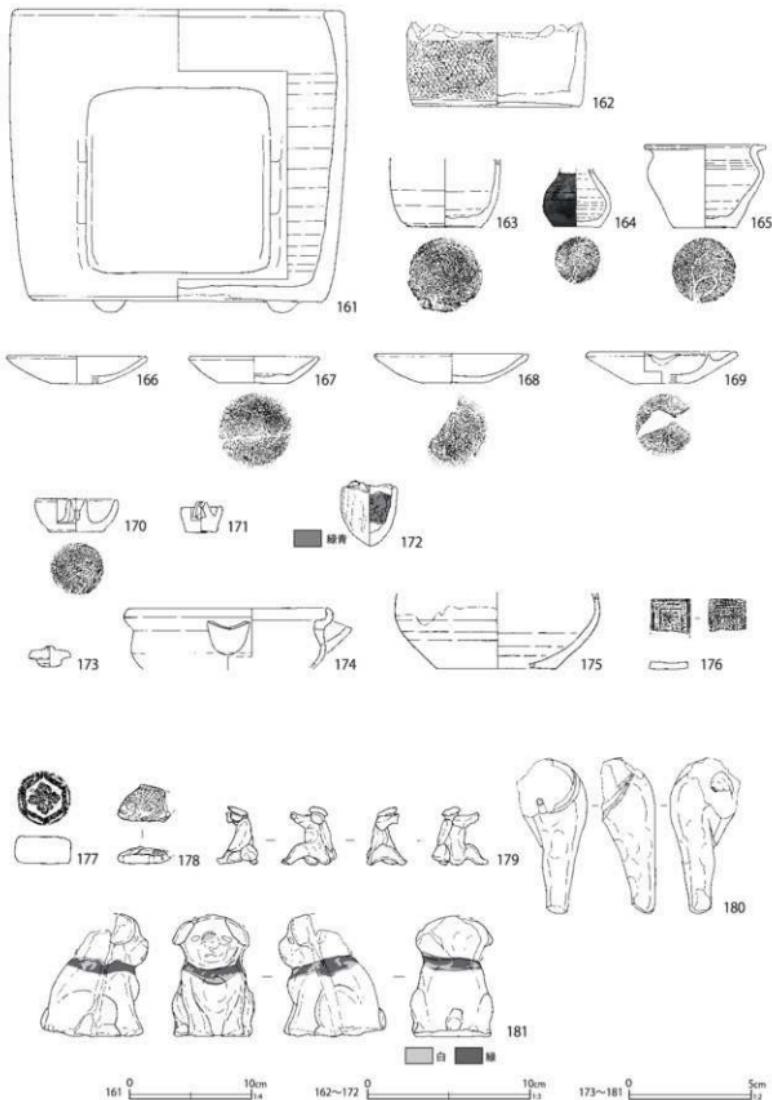


第348図 第203号土壤出土遺物(11)

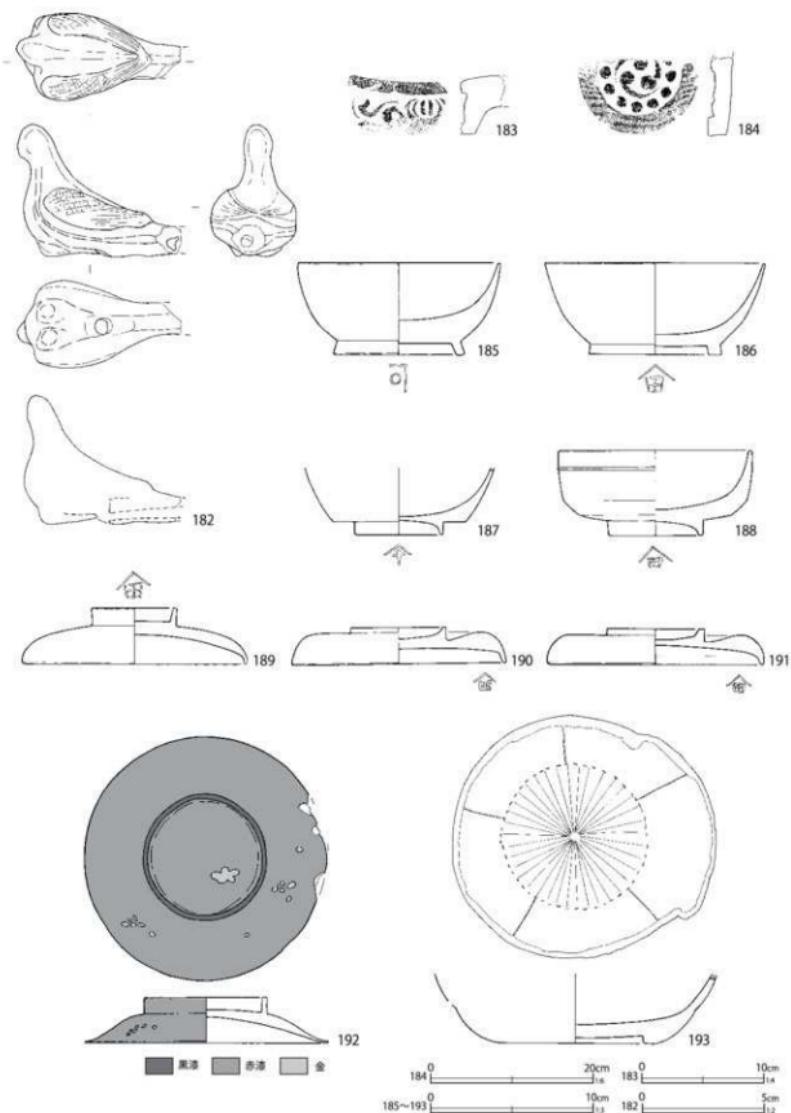


152~156・159・160 0 10cm  
149~151・157・158 0 10cm

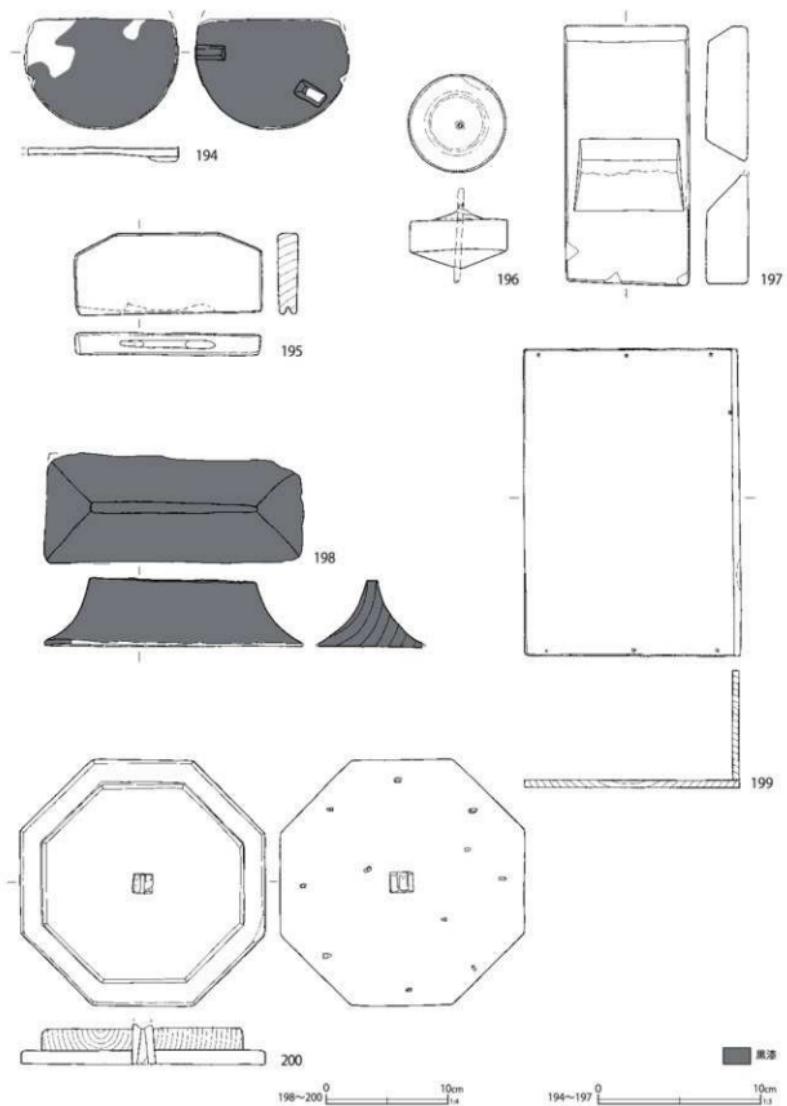
第349図 第203号土壤出土遺物(12)



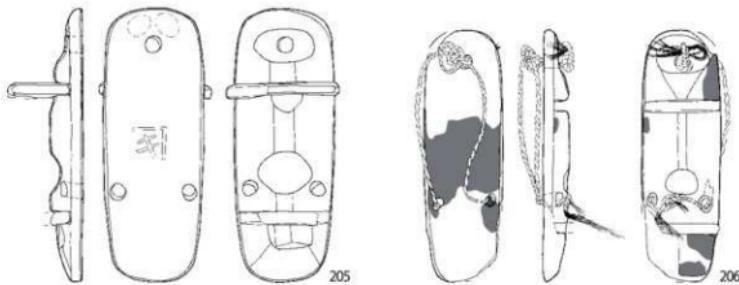
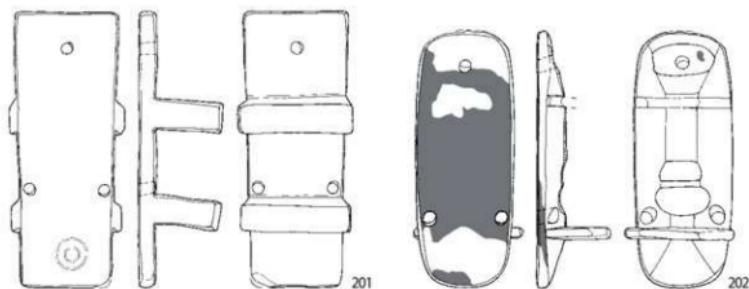
第350図 第203号土壤出土遺物(13)



第351図 第203号土壤出土遺物(14)



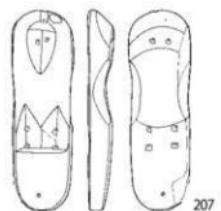
第352図 第203号土壤出土遺物(15)



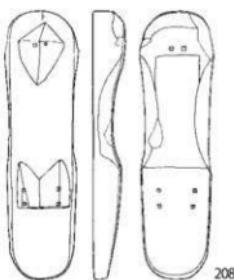
■ 黑漆

0 10cm  
1m

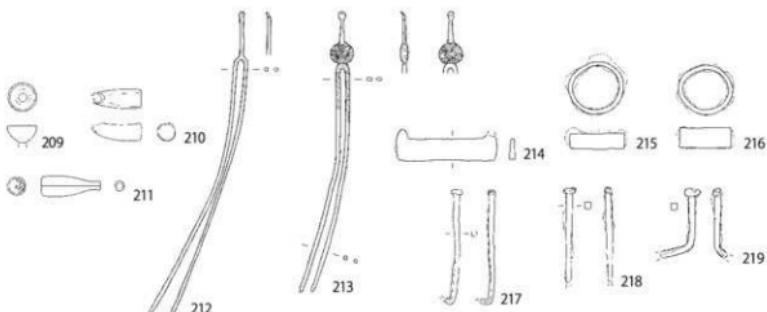
第353図 第203号土壤出土遺物(16)



207



208



209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219



220



223

224

225

226

227



228



229



230



231

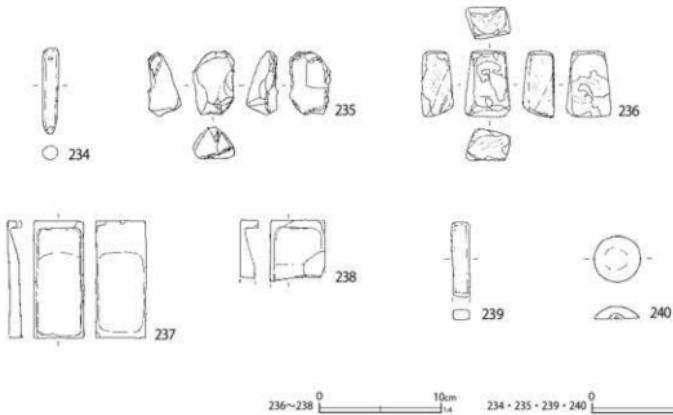


233

207・208 0 10cm  
212・213 0 5cm

209～211・214～219 0 10cm  
220～233 0 5cm

第354図 第203号土壤出土遺物(17)



第355図 第203号土壤出土遺物 (18)

地 / 平八持」の区画であり、実態と異なる。陶磁器類は、磁器の端反形碗、湯呑形碗、卵殻手杯を主体とし、卵殻手杯が最新期である。なお、非掲載遺物の型紙摺絵染付磁器は混入である。自然遺物では、ハマグリ、アサリが少量出土している。推定廃絶期は19世紀中葉である。

第338～355図に出土遺物を図示した。第338図2～4は瀬戸美濃系磁器の広東碗である。栗橋宿では出土量が少ない。2・3は染付で、4は外面に赤・黒・緑色の上絵付が施される。

5～7・16は肥前系磁器の端反形碗である。5は高台内に釘書き「吉」がみえる。7是非掲載遺物に同文製品が1個体みられる。16は第343図81の身である。いずれも染付が施され、口縁部の反りは弱い。

8～15・17～23は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。12・13は同文製品で、非掲載遺物に別個体が1点みられる。20も非掲載遺物に同文製品が1点みられる。厚手で、口縁部の反りが強いものが多い。

第339図24～26・28～31、第340図34～36・37・40～42・45は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗である。28・29は35の肥前系磁器と同文の染付である。34・36・41は外面に陰刻文染付がみられる。43・44は高台が蛇ノ目状である。45は器高が低く、腰部が張る。

46・47は瀬戸美濃系磁器の小碗である。卵殻手杯と共に共伴することが多い。

第340図50～58、第341図59は磁器の卵殻手杯で、最新期の陶磁器である。50・51・53・59は瀬戸美濃系、52・54～58は肥前系である。高台疊付けに段をもつ製品がなく、すべて輪高台状である。多くは内面に多色の上絵付が施されるが、54・55は染付のみである。また、59は江戸絵付けが施される。

61は瀬戸美濃系磁器の杯である。高台が高く、体部が浅い角度で開く。盃状の器形である。内面に江戸絵付けが施される。

第86表 第203号土壤出土遺物観察表（第338～355図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	筋土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.2)	5.4	(4.2)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	10.2	5.8	5.4	—	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
3	磁器	碗	9.6	5.2	4.8	—	90	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
4	磁器	碗	9.6	5.2	5.0	—	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
5	磁器	碗	(10.6)	5.6	4.0	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内釘書「吉」	76-11
6	磁器	碗	10.3	5.7	4.0	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
7	磁器	碗	10.4	6.0	4.0	—	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体1あり	
8	磁器	碗	9.6	5.4	3.9	—	75	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱（弱）	
9	磁器	碗	9.0	4.7	3.7	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
10	磁器	碗	9.5	5.7	3.7	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
11	磁器	碗	9.4	5.5	3.9	—	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
12	磁器	碗	9.0	4.9	3.8	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 非掲載に同文別個体1あり	
13	磁器	碗	9.4	5.3	4.0	—	70	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 非掲載に同文別個体1あり	
14	磁器	碗	9.3	5.2	4.0	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
15	磁器	碗	9.1	5.3	3.4	—	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
16	磁器	碗	(10.4)	6.2	4.0	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 第343図81の身	
17	磁器	碗	9.6	5.1	3.5	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
18	磁器	碗	(9.0)	4.6	3.6	—	85	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 白色物質付着	
19	磁器	碗	(9.2)	5.1	(3.7)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
20	磁器	碗	(9.2)	4.3	(3.5)	—	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体1あり	
21	磁器	碗	9.0	4.6	3.6	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
22	磁器	碗	(9.0)	4.7	(4.6)	—	20	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
23	磁器	碗	(9.2)	[4.0]	—	—	20	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
24	磁器	碗	7.0	6.3	3.8	—	95	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
25	磁器	碗	6.8	6.1	3.3	—	95	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 No.8	
26	磁器	碗	(7.2)	6.0	3.5	—	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
27	磁器	碗	(7.1)	6.0	3.6	—	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
28	磁器	碗	7.2	5.6	3.3	—	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
29	磁器	碗	7.2	5.7	3.4	—	75	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
30	磁器	碗	7.3	6.1	(3.2)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
31	磁器	碗	7.2	6.1	3.5	—	100	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
32	磁器	碗	7.0	5.8	3.6	—	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
33	磁器	碗	6.9	5.8	3.7	—	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
34	磁器	碗	7.2	6.1	3.4	—	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付・陰刻文	
35	磁器	碗	(7.4)	5.6	(3.3)	—	45	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
36	磁器	碗	7.0	6.0	3.7	—	55	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻文・染付	
37	磁器	碗	(7.6)	6.1	(3.6)	—	45	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
38	磁器	碗	6.9	5.9	3.7	—	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
39	磁器	碗	6.8	6.0	3.2	—	40	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
40	磁器	碗	(7.4)	6.1	3.8	—	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
41	磁器	碗	(7.6)	5.7	(4.2)	—	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻文・染付	
42	磁器	碗	(6.9)	5.8	(3.6)	—	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
43	磁器	碗	6.6	5.8	4.2	—	55	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
44	磁器	碗	6.4	4.9	3.6	—	55	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
45	磁器	碗	(6.8)	4.8	3.2	—	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
46	磁器	碗	(7.0)	5.0	(3.0)	—	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
47	磁器	碗	6.6	[3.4]	—	—	75	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
48	磁器	杯	6.0	2.9	1.9	—	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面染付	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
49	磁器	坏	6.3	3.0	2.6	—	35	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上給付 (赤・黄・緑)		
50	磁器	坏	(6.8)	3.0	2.8	—	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付 (金・赤) 口唇部上給付 (金)		
51	磁器	坏	—	[2.2]	2.5	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付 (赤・黄・金・灰) 色飛びあり		
52	磁器	坏	6.1	2.8	2.5	—	90	良好	白	肥前系 内外面施釉		
53	磁器	坏	6.1	3.0	2.6	—	90	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付 (被熱により黒化・色飛び)		
54	磁器	坏	5.9	2.8	2.4	—	75	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付		
55	磁器	坏	(6.0)	2.7	2.6	—	40	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上給付		
56	磁器	坏	5.8	2.8	2.4	—	85	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上給付 (白・赤・黄)		
57	磁器	坏	6.1	2.6	2.5	—	25	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面上給付 (緑・赤・金) 内面被熱 (愛・色飛び)		
58	磁器	坏	5.9	2.7	2.5	—	25	良好	白	肥前系 内外面施釉		
59	磁器	坏	(6.3)	2.6	(2.6)	—	10	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付 (青)		
60	磁器	坏	(5.4)	2.8	2.4	—	50	良好	白	口縁部金彩		
61	磁器	坏	—	[2.4]	2.9	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付		
62	磁器	坏	6.9	2.8	2.2	—	90	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付		
63	磁器	皿	(9.4)	2.5	(5.0)	—	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付		
64	磁器	皿	10.3	2.7	5.7	—	65	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅		
65	磁器	皿	10.0	2.4	5.2	—	85	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	69-1	
66	磁器	皿	14.1	4.4	8.4	—	90	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 燃縫痕あり 高台内焼 隕印 (赤)	76-11	
67	磁器	皿	(14.2)	5.0	8.7	—	25	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 口紅 燃縫痕あり 高台 内焼隕印 (赤) 2あり		
68	磁器	皿	15.6	3.4	9.0	—	80	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 内面染付 刻書 SK327 と接合		
69	磁器	皿	(21.0)	2.8	(11.6)	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ハリ支跡1遺存		
70	磁器	皿	(25.0)	4.5	(13.5)	—	10	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ハリ支跡2遺存 焼隕印 (赤) 燃縫痕あり 被熱 花は確定		
71	磁器	皿	(28.6)	6.2	(14.2)	—	10	普通	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ハリ支跡2遺存 燃 隕痕・漆隕痕あり 高台内焼隕印 (赤)		
72	磁器	皿	26.1	3.8	14.0	—	70	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ハリ支跡3遺存 焼隕痕あり 高台内焼隕印 (赤)		
73	磁器	鉢	14.8	6.7	5.9	—	35	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 燃縫痕あり 高台内焼 隕印 (赤) 2あり		
74	磁器	鉢	12.6	5.6	5.9	—	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 燃縫痕あり 高台内焼 隕印 (赤) 内面被熱 (羽)・煤付着	76-12	
75	磁器	鉢	(13.5)	6.7	6.1	—	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面訂書「丁」		
76	磁器	鉢	—	[3.0]	9.2	—	30	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付		
77	磁器	蓋物	12.0	6.3	4.9	—	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 燃縫痕あり 高台内焼 隕印 (赤) 2あり		
78	磁器	蓋	10.1	3.3	4.4	—	60	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 SK206 と接合		
79	磁器	蓋	8.8	2.8	3.9	—	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付		
80	磁器	蓋	9.0	2.8	3.6	—	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付		
81	磁器	蓋	9.2	3.1	3.7	—	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 第339回16の蓋		
82	磁器	蓋	9.0	3.0	3.6	—	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付		
83	磁器	蓋	(8.6)	2.7	(3.2)	—	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付		
84	磁器	蓋	9.1	2.6	3.6	—	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	68-12	
85	磁器	猪口	6.8	6.0	5.0	—	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付		
86	磁器	猪口	7.9	6.3	6.2	—	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付		
87	磁器	蓋物	(12.6)	[4.4]	—	—	45	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 燃縫痕あり		
88	磁器	段重	(14.4)	6.0	9.0	—	40	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付		
89	磁器	徳利	—	[9.9]	3.9	—	60	普通	白	肥前系 外面施釉・染付		
90	磁器	油壺	2.1	4.9	5.6	—	80	普通	白	瀬戸美濃系 上下合二枚型成形 外面施釉・色繪 (赤・ 緑・黄)		
91	磁器	徳利	—	[3.3]	—	—	5	良好	灰白	肥前系 外面施釉 刻書「森口」	76-13	
92	磁器	香炉	9.8	[5.3]	—	—	10	良好	白	肥前系 外面上に施釉・染付・下位青磁釉		
93	磁器	火鉢	(11.0)	12.5	(10.8)	—	15	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
94	陶器	碗	(7.4)	4.8	(3.3)	K	15	普通	灰	内外白面化粧下施釉 外面鉄絞	
95	陶器	碗	(6.8)	[5.0]	—	—	30	普通	黄灰	内外面施釉 (下位うのふ釉気味)	
96	陶器	环	5.9	4.2	3.0	EK	50	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 高台内墨痕カ	
97	陶器	环	5.2	3.4	2.8	EIK	90	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面ピン痕3	
98	陶器	环	5.7	3.4	3.0	IK	100	良好	灰	京都信楽系 内外面灰釉 体部中位重焼痕	
99	陶器	环	5.1	3.2	2.6	EIK	100	普通	黄灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
100	陶器	环	5.5	3.2	2.7	EK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
101	陶器	皿	(10.4)	[1.4]	—	—	30	普通	灰素	備前系 胎土柘器質 内面型押陽刻文 口縁部繪土	69-2
102	陶器	皿	—	[1.7]	—	—	5	普通	にい赤褐	備前系 胎土柘器質 内面型押陽刻文 口縁部繪土	
103	陶器	皿	—	[1.1]	—	I	5	普通	灰白	底面布目痕 内面型押陽刻文 内外面施釉 松ぼっくり	
104	陶器	灯明皿	10.0	2.1	4.1	IK	100	普通	灰白	内面輪状重焼痕	
105	陶器	灯明皿	9.6	2.0	3.6	IK	25	良好	明褐灰	瀬戸美濃系 内外面柿輪 外面下位・底部釉拭き取り	
106	陶器	灯明皿	9.6	2.1	4.7	IK	100	普通	灰	内面輪状重焼痕	
107	陶器	灯明皿	9.6	1.9	4.1	I	100	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿輪 外面下位・底部釉拭き取り	
108	陶器	灯明皿	9.9	2.2	3.9	IK	100	普通	淡黄	内面輪状重焼痕	
109	陶器	灯明皿	9.6	2.0	4.6	I	100	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面柿輪 外面下位・底部釉拭き取り	
110	陶器	灯明皿	9.6	2.2	3.9	I	70	普通	灰白	内面輪状重焼痕	
111	陶器	灯明皿	8.8	1.8	3.1	I	65	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 内面ピン痕3 外面下位胎土付着	
112	陶器	灯明皿	8.4	1.6	3.0	K	50	普通	灰白	京都信楽系 内外面柿輪 内面ピン痕1 遺存	
113	陶器	灯明皿	8.6	1.9	3.3	K	65	普通	灰白	京都信楽系 内外面柿輪	
114	陶器	灯明皿	(10.8)	2.2	3.9	K	20	良好	灰白	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉 内面ピン痕1・桶掛2 遺存	
115	陶器	灯明皿	9.7	2.2	4.3	DIK	99	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面柿輪 体部下位・底部釉拭き取り	
116	陶器	灯明皿	8.9	1.8	3.0	K	55	普通	灰白	京都信楽系 内外面施釉 体部中位重焼痕 煙付着	
117	陶器	灯火具	8.4	5.3	5.5	K	90	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉	
118	陶器	灯火具	8.1	5.3	5.0	—	65	良好	灰白	京都信楽系 内外面柿輪 被熱(黒化)	
119	陶器	灯火具	8.3	4.6	5.3	EK	95	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 №5	
120	陶器	灯火具	—	[6.1]	5.4	K	70	普通	灰白	京都信楽系 内外面施釉	
121	陶器	灯火具	9.0	4.8	4.0	I	100	良好	灰白	大堀相馬系 内外面鐵釉	
122	陶器	燭臺	5.1	6.0	4.7	K	100	良好	灰白	底面切痕 (右) 内外面鐵釉 口縁部重焼痕 (口縁歪む)	
123	陶器	皿	(26.4)	5.5	(11.6)	EIK	30	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面鉄絞 内面目跡3 遺存	
124	陶器	燭徳利	4.0	[18.7]	—	K	20	普通	灰白	京都信楽系 外面施釉 紋袖流し掛け 接点のない2片から復元	
125	陶器	土瓶	7.5	14.1	7.7	K	100	普通	灰白	外面青緑釉 内面施釉 内外面煤付着	
126	陶器	土瓶	(6.8)	13.8	9.0	EIK	60	良好	灰	外面白刷毛像状・鉄絞 内外面施釉 内面下位胎土付着 体部下位冠付着	
127	陶器	土瓶	7.5	8.6	(7.8)	K	50	普通	灰	内外面施釉 内外面白土塗付	
128	陶器	土瓶	8.2	[7.3]	—	K	40	普通	灰白	大堀相馬系カ 胎土磁質 外面擦白釉 内面施釉	
129	陶器	土瓶	—	[6.4]	—	K	5	普通	灰白	外面駿馬釉 内面下位施釉 接点のない3片から復元	
130	陶器	土瓶	—	[6.8]	—	K	5	良好	灰白	外面青緑釉 把手側方に遺存	
131	陶器	土瓶	6.1	[5.1]	—	K	25	普通	白	京都信楽系 外面施釉・青緑釉流し掛け	
132	陶器	土瓶	—	[2.2]	(7.6)	K	5	良好	灰白	内面施釉 外面墨書 被熱・煤付着	
133	陶器	蓋	8.2	3.3	5.6	K	100	普通	黄灰	上面青緑釉	
134	陶器	蓋	(9.4)	3.7	(6.6)	K	25	良好	灰白	上面青緑釉	
135	陶器	蓋	8.4	3.1	6.0	K	50	普通	灰白	上面青緑釉	
136	陶器	蓋	7.8	3.0	5.2	K	55	普通	灰白	上面青緑釉	
137	陶器	蓋	—	[1.8]	—	K	40	普通	灰白	上面青緑釉	
138	陶器	蓋	7.6	1.6	3.2	K	90	良好	淡黄	京都信楽系 上面施釉 体部下位重焼痕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	祐土	残存	焼成	色調	備考	図版
139	陶器	蓋	7.0	1.8	2.7	EIK	65	普通	灰	底部離し系切痕(左) 上面底輪・白輪・鉄繪 口縁端部白化粧 亀のツマミ	
140	陶器	蓋	6.0	[1.6]	—	K	90	普通	にぶい黄	上面白化粧 三彩・施釉	
141	陶器	水注	7.2	8.2	5.1	IK	95	普通	褐灰	瀬戸美濃系 内外面施釉 内底面・外面下位輪状重焼痕 口縁欠失部摩耗	
142	陶器	水注	6.7	8.1	5.4	IK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面施釉 内面黑色付着物あり	
143	陶器	水注	8.0	9.4	6.0	IK	50	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面下位輪状重焼痕	
144	陶器	水注	7.0	8.7	7.1	—	100	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 外面黑色付着物	
145	陶器	桶鉢	30.6	12.0	19.6	DEIKL	20	普通	にぶい橙	埋明石系 内面縦目	
146	陶器	水甕	22.7	16.1	11.6	DEK	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面赤輪流しき掛け・ヘラガ 砂目底 内面目跡4 外面下位目跡1 高台内墨書き	
147	陶器	瓶掛	—	[16.7]	20.1	EK	90	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・緑・白輪流しき掛け 底部施釉 刷毛目状 内面赤輪流しき掛け・目跡5あり 底部ヘラガ書き・貯糞孔3 (鉄製品付)	76-15
148	陶器	桶木鉢	—	[4.9]	7.7	DEK	30	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 高台抉り1 底部墨書き	76-16
149	瓦質土器	火鉢	(22.4)	[17.4]	22.0	CFHI	70	普通	橙	砂目底 外面上位横削状施文・中位ミガキ・下位トビガシナ状施文 濡す 内面上位・口縁部剥落 祇土中心灰色	
150	瓦質土器	火鉢	—	[5.2]	12.4	CHIK	30	普通	灰黄	底部ヘラナデ 体部下位ケズリ やや酸化焼成	
151	土師質土器	火鉢	(21.0)	[7.6]	—	AHK	5	普通	浅黄橙	祐土粉質 体部上位ケズリ	
152	瓦質土器	蓋	(18.4)	[2.4]	—	AHK	5	普通	淡黄	内面上位・口縁部黒色塗布 上面ヘラグテ 体部ミガキ 濡す	
153	瓦質土器	蓋	23.6	[3.6]	—	CFHII	65	普通	灰白	上面砂目 濡す 内面煤付着	
154	瓦質土器	蓋	26.8	4.1	—	HIK	80	普通	灰白	上面砂目 内底面ランダムなナデ 濡す 内面煤付着	
155	瓦質土器	火鉢	25.0	12.6	20.2	CEPHI	60	普通	灰白	砂目底 体部下位弱いケズリ 外面下位黒色塗布 内面下位火照付 口縁部敲打痕 内面中位・口縁部煤付着	69-3
156	瓦質土器	火鉢	(24.5)	12.8	(22.4)	CHIK	40	普通	灰白	砂目底 やや酸化焼成 口縁部敲打痕 内面中位煤付着	
157	瓦質土器	十能	長さ [15.7] 幅 [15.8] 高さ 4.8	—	CEI	40	普通	灰	下面シワ状筋 扊手上面ヘラナデ 濡す		
158	土師質土器	焙烙	—	[3.3]	—	CHIK	3	良好	灰白	把手 内面・把手下面煤付着	
159	土師質土器	焙烙	(33.4)	[4.4]	(35.6)	CEFH	15	普通	浅黄橙	底部シワ状筋 祇土粉質 体部煤付着 SK204 と接合	
160	土師質土器	焙烙	37.5	5.9	37.5	CHIK	70	普通	灰白	底部シワ状筋 内面円周状のナデ 内耳2遺存 底部端部~体部煤付着	
161	瓦質土器	甌	(24.6)	24.7	(23.8)	CFHI	45	普通	灰	砂目底 体部下端ケズリ 濡す 内面上位・下端部・外面上位煤付着 濡部は推定	
162	瓦質土器	火鉢	—	[5.2]	10.0	AHK	45	普通	橙	江戸在地系 底部ヘラナデ 外面スタンプ施文 濡す 上端部敲打筋・摩耗 彼熟(剥落)	
163	土師質土器	楕木鉢カ	—	[4.2]	4.5	ADHILK	30	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部粉質 外面施文・施釉	
164	施釉土器	小甌	—	[3.6]	2.8	HIK	70	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部系切痕(左) 祇土粉質	
165	土師質土器	甌	(7.4)	5.1	3.9	AHK	45	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部系切痕(左) 祇土粉質	69-4
166	施釉土器	灯明皿	(8.4)	1.7	(3.0)	AHK	25	普通	橙	江戸在地系 底部系切痕遺存 祇土粉質 内外面施釉(剥落)	
167	かわらけ	小皿	(7.8)	1.7	4.5	AFHII	60	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部系切痕(左)	
168	施釉土器	灯明皿	(9.1)	1.8	3.6	AIK	30	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部系切痕(左) 祇土粉質 内外面施釉(剥落) 口縁部煤付着	
169	施釉土器	灯明皿	9.0	2.0	3.5	IK	70	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部系切痕(左) 祇土粉質 内外面施釉	
170	施釉土器	更篋	4.8	2.0	3.2	I	100	普通	浅黄橙	江戸在地系 底部系切痕(左) 内外面施釉 赤立煤付着	
171	土師質土器	更篋	2.3	1.8	1.9	CHI	100	普通	浅黄橙	赤立煤付着	
172	土器	埴堀	3.1	4.1	—	—	100	—	—	内面緑青付着 外面ガラス化	
173	土製品	ミニチュア	1.7	0.9	0.4	AK	—	良好	にぶい橙	蓋 形成型 上面施釉 重さ 1.7 g	119-2
174	土製品	ミニチュア	(8.2)	[2.5]	—	HIK	—	良好	にぶい橙	行平鍋 祇土粘質 内外面白化粧・施釉 重さ 8.2 g	
175	施釉土器	ミニチュア	—	[3.1]	(4.8)	HK	10	普通	橙	江戸在地系 施釉 重さ 11.2 g	
176	土製品	ミニチュア	長さ [1.4] 幅 1.6 厚さ 0.3	—	AK	—	良好	橙	一枚形成型 中実 摩耗著しい 重さ 0.9 g	119-3	
177	土製品	泥面子	径 1.3 厚さ 1.1	—	AHK	—	良好	橙	一枚形成型 中実 摩耗著しい 重さ 7.4 g	122-11	
178	土製品	人形	長さ 1.6 幅 [2.2] 厚さ 0.7	—	A	—	良好	にぶい橙	一枚形成型 中実 泥面付着 重さ 1.7 g	119-4	
179	陶器	人形	長さ 2.4 幅 1.7 厚さ 2.3	—	—	普通	灰白	京都系 手捻り成形 右手成形前穿孔1あり 緑釉 弱く被熱 重さ 2.7 g	119-5		
180	陶器	人形	長辺 [6.4] 短辺 [2.8] 厚さ [0.9 ~ 2.1]	—	IK	—	普通	灰白	京都系 手捻り成形 縫成形前穿孔1あり 重さ 32.5 g		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
181	土製品	人形	長さ 5.0 幅 3.4 厚さ 0.7	AIK	—	良好	にせい櫻	江戸在地系 大 前後合二枚型成形 中空 外面施釉・白土・緑釉 重さ 27.2 g	119-6		
182	土製品	埴輪	長さ [6.8] 幅 3.5 厚さ 5.4	IK	—	良好	櫻	江戸在地系 上下合二枚型成形 中空 外面施釉・上面白土・緑釉 重さ 32.1 g №.9	119-7		
183	瓦	軒棟瓦	長さ [3.8] 幅 [9.0] 厚さ 2.5 高さ [5.4]	AIK	—	普通	灰白	江戸式 弱く銀化 燐す 胎土中心部灰色			
184	瓦	軒丸瓦	幅 3.5 厚さ 2.6 高さ [10.1] 径 15.3	ADHKK	—	良好	灰白	右巻十四連珠三巴文 銀化	123-21		
185	木製品	漆桶	口径 12.2 高さ 5.5 黒径 7.8					横木取り 内面赤漆 外面黒漆 高台内赤で「匁」	128-18		
186	木製品	漆桶	口径 13.4 高さ 5.6 底径 8.2					横木取り 内面赤漆 外面黒漆 高台内赤で「會」	129-1		
187	木製品	漆桶	高さ [4.1] 底径 5.2					横木取り 内外面黒漆 高台内赤で「今」			
188	木製品	漆桶	口径 11.6 高さ 5.2 底径 5.5					横木取り 内外面黒漆 高台内赤で「會」			
189	木製品	漆椀蓋	口径 13.7 つまみ径 5.2 高さ 3.5					横木取り 内面赤漆 外面黒漆 つまみ内赤で「會」	129-2		
190	木製品	漆椀蓋	口径 12.9 つまみ径 5.0 高さ 2.2					横木取り 内外面黒漆 内面赤で「會」	129-3		
191	木製品	漆椀蓋	口径 (13.0) つまみ径 6.0 高さ 2.2					横木取り 内外面黒漆 内面金で「會」	129-4		
192	木製品	漆椀蓋	口径 14.9 つまみ径 7.5 高さ 2.8					横木取り 内面黒漆 外面赤漆 金で花文様 つまみ縦縫	129-5		
193	木製品	漆鉢	高さ [4.3] 底径 9.6					横木取り 内面赤漆 金で文様 外面茶漆 高台内黒漆			
194	木製品	曲物	口径 (9.5) 高さ [0.9]					板目 桟 表裏黒漆 一部側板残存 脚 2			
195	木製品	火打金	長さ 11.4 幅 4.9 厚さ 1.2					板目 桟 表裏炭化 金屬一部残存	129-6		
196	木製品	樂器	口径 6.0 高さ 5.7					板目 鉄芯 上面同心円の削り	129-7		
197	木製品	鏡台	長さ 15.9 幅 7.6 厚さ 2.6					板目 全面黒漆	129-8		
198	木製品	枕	長さ 21.3 幅 9.0 厚さ 5.6					板目 侧板 1 残存 表面墨書き	146-5		
199	木製品	箱	長さ 25.2 幅 17.7 高さ 9.6					板目 長脚 2 残存 表面鉄針存			
200	木製品	行灯	長さ 20.3 幅 20.0 厚さ [3.4]					板目 長脚 2 残存 表面黒漆			
201	木製品	下駄	長さ 22.6 幅 8.5 高さ 6.9					板目 長脚 2 残存 表面一部鉄針			
202	木製品	下駄	長さ 21.1 幅 8.1 高さ 6.1					板目 隆卯下駄 黒漆			
203	木製品	下駄	長さ 21.0 幅 8.5 高さ [2.7]					台板目 齿不明 隆卯下駄 黒漆			
204	木製品	下駄	長さ 20.8 幅 8.1 高さ [2.2]					板目 隆卯下駄 表面黒漆			
205	木製品	下駄	長さ 22.4 幅 8.2 高さ 6.2					板目 隆卯下駄 鼻緒			
206	木製品	下駄	長さ 20.6 幅 6.5 高さ [2.2]					板目 隆卯下駄 全面黒漆 鼻緒残存			
207	木製品	下駄	長さ 16.4 幅 5.1 高さ 2.1					板目 無眼下駄 木釘残存			
208	木製品	下駄	長さ 22.0 幅 5.7 高さ 2.7					板目 無眼下駄			
209	銅製品	煙管	火薙径 1.8 重さ 2.6					雁首火皿			
210	銅製品	煙管	長さ 3.1 小口径 1.1 重さ 3.7					雁首 火皿欠失			
211	銅製品	煙管	長さ 3.6 小口径 1.1 口付径 0.6 重さ 6.3					吸口 内部に羅字残存			
212	銅製品	簪	長さ 12.4 幅 0.6 厚さ 0.1 重さ 2.7								
213	銅製品	簪	長さ 11.5 幅 1.0 厚さ 0.3 重さ 4.7					玉に花 細杉文			
214	鉄製品	火打金	長さ 2.0 幅 6.2 厚さ 0.4 重さ 17.2								
215	鉄製品	燐金具	径 3.4 × 3.2 幅 0.9 厚さ 0.3 重さ 11.6								
216	鉄製品	燐金具	径 3.4 × 3.0 幅 1.2 厚さ 0.3 重さ 11.1								
217	鉄製品	釘	長さ 7.0 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 3.4								
218	鉄製品	釘	長さ [5.9] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 2.8								
219	鉄製品	釘	長さ [4.3] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.7								
220	銅製品	錢貨	径 23.3 厚さ 0.9 重さ 2.2					寛永通寶 (古)			
221	銅製品	錢貨	径 22.7 厚さ 0.8 重さ 1.8					寛永通寶 (古)			
222	銅製品	錢貨	径 28.2 厚さ 1.2 重さ 4.6					寛永通寶 (新) 11 波			
223	銅製品	錢貨	径 23.2 厚さ 1.0 重さ 2.3					寛永通寶 (新)			
224	銅製品	錢貨	径 23.3 厚さ 1.4 重さ 2.3					寛永通寶 (新)			
225	銅製品	錢貨	径 24.2 厚さ 1.2 重さ 2.6					寛永通寶 (新)			
226	銅製品	錢貨	径 23.2 厚さ 0.9 重さ 2.4					寛永通寶 (新)			
227	銅製品	錢貨	径 23.2 厚さ 0.8 重さ 1.9					寛永通寶 (新)			
228	銅製品	錢貨	径 24.3 厚さ 1.2 重さ 2.7					寛永通寶 (新)			

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
229	銅製品	錢貨	径24.4	厚さ1.0	重さ2.4				寛永通寶（新）		
230	銅製品	錢貨	径23.6	厚さ1.2	重さ2.2				寛永通寶（新）		
231	銅製品	錢貨	径25.3	厚さ1.8	重さ1.6				寛永通寶（新）		
232	銅製品	錢貨	径24.2	厚さ1.5	重さ3.4				寛永通寶（新）		
233	銅製品	雁首錢	径20.8×19.2	厚さ1.6	重さ2.1						
234	石製品	石策	長さ3.5	幅0.6	厚さ0.6	重さ2.4			滑石（灰色）両端使用		
235	石製品	火打石	長さ2.6	幅1.7	厚さ1.3	重さ6.2			玉鶴 横の彫れ著しい		
236	石製品	砥石	長さ5.4	幅3.7	厚さ2.6	重さ72.5			波紋岩 砥面6		
237	石製品	硯	長さ9.6	幅4.1	器高1.1	重さ90.0			粘板岩 赤褐色 裏面刻書	141-2	
238	石製品	硯	長さ[5.0]	幅4.5	器高1.5	重さ33.2			凝灰岩 内面墨付着		
239	硝子製品	筈	長さ[3.1]	幅0.7	厚さ0.4	重さ3.3			被熱（白色化）中実	142-1	
240	骨製品	ボタン	径1.9	厚さ0.5	重さ1.7				黒色塗付物付着	142-13	

62は肥前系磁器の壺である。体部が丸く、扁平な器形で、高台径が小さい。紅壺や紅皿等の器形に類似する。

66・67は肥前系磁器の皿である。高台が高い蛇ノ目凹形高台で、口縁部は輪花状に成形される。両者ともに焼継痕と高台内に焼継印がみられる。

第341図69、第342図70・72は肥前系磁器の中皿である。内面に一枚絵の染付が施され、口縁部は輪花状に成形されている。70・72には焼継痕と高台内に焼継印がみられる。

71は肥前系磁器の皿である。見込みは深く、口縁部は強く反る。推定口径は28.6cmを測り、大皿に匹敵する大きさである。焼継痕、漆継痕がみられ、高台内に焼継印が認められる。漆継痕は栗橋宿では稀である。

第343図74・75は肥前系磁器の八角鉢である。74は輪高台で、焼継痕と高台内に焼継印がみられる。75は蛇ノ目凹形高台で、高台内に釘書き「森」の屋号がみえる。この屋号は18世紀中葉に比定される第6地点『栗橋宿跡III』（埼埋文2019c）第73号土壇出土の徳利でのみ確認されている。

第343図78～82は肥前系、第344図83・84は瀬戸美濃系磁器碗の蓋である。78は丸碗の蓋で、79～84は端反形碗の蓋である。81は第339図16とセットである。83・84は同文の製品で、つまみ端部は幅広である。内面に「道光年製」の

銘がみえる。清朝における道光年間は1821～1850年である。

88は肥前系磁器の段重である。腰部に露胎の段が付き、中段と考えられる。

90は瀬戸美濃系磁器の油壺である。上下合せの型成形で、中位に接ぎ痕がみられる。外側は赤・緑・黄色の上絵付である。

91は肥前系磁器の大型長頸壺の体部破片である。釘書き「森」がみえ、第264号土壇で出土している「森田屋」（第334図11）の可能性がある。

94は産地不詳陶器の碗である。緻密で硬質な胎土を呈し、白化粧後に外側に鉄絵を施し、施釉している。地方窯系の可能性がある。

95は産地不詳陶器の碗である。湯呑形を呈し、外側下位の釉調はうのふ気味である。

101・102は同文の備前系陶器の煎餅皿である。型成形で、内面は陽刻文である。口縁部に塗土がみられる。19世紀前半に出現する器種である（鈴木2014）。

第345図104～110・115は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。104～107は油皿で、108～110・115は油受皿である。いずれも外側下位から底部にかけて釉が拭き取られている。油受皿の受け口切り込みは「U」字状を呈する。

111～114・116は京都信楽系陶器の灯明皿である。114は胎土が磁質で、内面に窯道具痕が1箇所遺存し、櫛描状の刻みがみられる。116は油

受皿で、体部中位に輪状重ね焼き痕がみられる。

117～120は京都信楽系陶器の灯火具である。

121は大堀相馬系陶器の灯火具である。鉄軸が施釉され、体部下半は筒形を呈する。

第346図125は産地不詳陶器の青土瓶である。外面は青緑釉で、把手は型成形である。内外面に煤が付着する。126は産地不詳陶器の土瓶である。外面には刷毛塗状の白土と鉄絵がみられる。

128は糠白釉が施釉されている土瓶である。大堀相馬系陶器の可能性がある。胎土は磁質である。

第348図147は瀬戸美濃系陶器の瓶掛である。六角形で、両側面に獅子頭が付く。外面の施文は4種類みられる。灰釉に緑釉・白釉が流し掛けられている。底部は柿釉刷毛塗状で、内面は柿釉が拭き取られている。底部に貫通孔が3箇所みられ、一部棒状鉄製品が差し込まれている。底部にはヘラ書きがみられる。

第349図155・156は瓦質土器の脚付火鉢である。輪高台状の脚部が付く。口縁部には敲打痕がみられ、155の内面下位に火箸による使用痕が遺存する。胎土に角閃石が一定量含まれ、在地産と推定される。

158は土師質土器の把手付焰烙である。把手は水平に付き、焼成前穿孔が2箇所みられる。内面と把手下面に使用痕と考えられる煤が付着する。

159・160は土師質土器の丸底焰烙である。底部は無調整のシワ状痕が残る。160には内耳が遺存する。159は胎土が粉質である。いずれも角閃石が含まれ、160是在地産と推定される。

第350図161は瓦質土器の竈である。底部は無調整の砂目底で、体部下端にケズリ状調整がみられる。挿図では窓部を推定復元した。

162は江戸在地系瓦質土器の筒形火鉢である。底部にヘラナデ調整がみられ、外面はスタンプ文が施文される。口縁部は敲打により欠失しており、灰落としの可能性が推定される。

164は施釉土器の小壺である。頸部がすぼまる

器形で、底部に糸切痕が遺存し、外面には僅かに施文がみられる。透明釉が施釉される。

172は砲弾形を呈する土製坩埚である。内面に綠青が付着する。

176は銭貨を模した江戸在地系のミニチュアである。型成形で、雲母が付着する。表面に「定銀/堂」、裏面に「一分」の陽刻文字がみえる。

179は京都系の人形である。手捻り成形で、綠釉が施釉される、胎土は陶器質である。右手に焼成前穿孔があり、別作りの釣竿があったと考えられる。

180は京都系の人形類と推定される。手捻り成形で、焼成前穿孔がみられる。ぶら人形の手足のようにパーツの一部の可能性が推定される。

181は犬を模した江戸在地系の土製人形である。前後合わせの二枚型成形で、中空である。透明釉が施釉され、白土、緑釉で彩色されている。

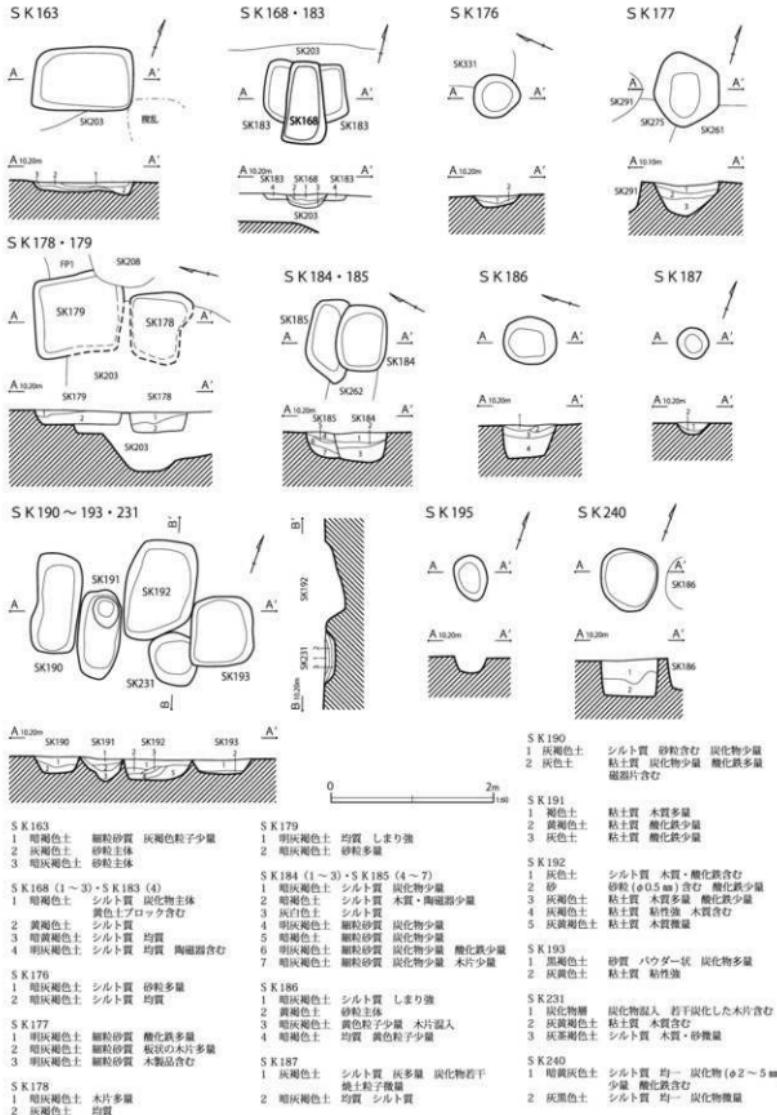
第351図182は江戸在地系の鳩笛である。上下合わせの二枚型成形で、外面に透明釉が施釉される。上面は白土と緑釉で彩色されている。

183は江戸式に類似する軒棟瓦である。

185～188は漆椀、189～192は漆椀の蓋である。屋号が書かれているものが多く、185は「匂」、186・188・189～191は「金」、187は「今」である。「金」は第8地点では多く出土している。192は端反形を呈し、外面は赤漆、内面は黒漆が塗布されている。外面は金彩模様が描かれる。

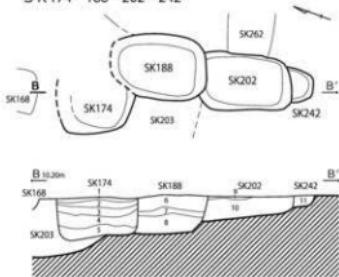
第352図195は火打金の木製柄である。金属が一部遺存する。火打金の金属部分も出土しており、第354図214に図示した。第8地点では火打石は一定量出土するが、火打金の出土量は少ない。

第354図213は銅製の簪である。玉に花、綾杉文がみられる。217～219は鉄製の頭巻釘である。220～232は銭貨の寛永通寶である。220・221は古寛永、222は新寛永の四文銭である。223～229は新寛永で、230～232は鉄錢である。

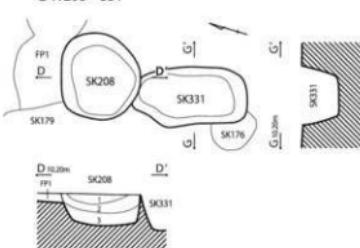


第356図 区画AG土壤(3)

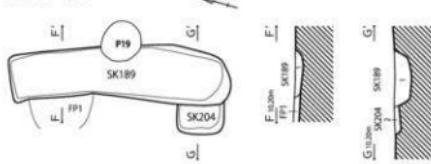
S K 174・188・202・242



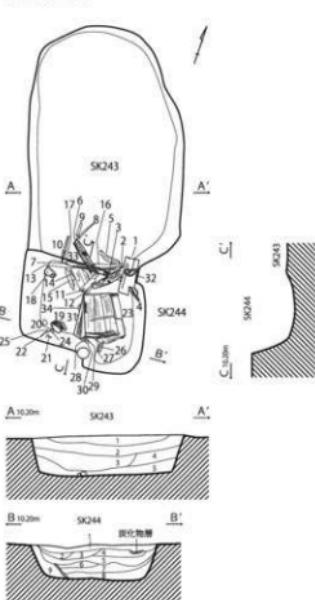
S K 208・331



S K 189・204



S K 243・244



S K 174 (1～5)・S K 188 (6～8)・S K 202 (9, 10)・S K 242 (11)

- 1 灰褐色土 シルト質 均質
- 2 黒褐色土 シルト質 炭化物多量
- 3 暗灰褐色土 シルト質 炭化物微量 陶磁器含む
- 4 黑褐色土 シルト質 均質 木片少量
- 5 黑褐色土 シルト質 炭化物多量 木片多量
- 6 灰褐色土 シルト質 均質
- 7 灰褐色土 シルト質 木片少種
- 8 暗灰褐色土 シルト質
- 9 細粒砂
- 10 シルト シルト質 黄色土ブロック ( $\phi 20\text{ mm}$ ) 少量
- 11 暗灰褐色土 粘土鉱多量 炭化物 ( $\phi 10\text{ mm}$ ) 多量

S K 189 (1)・S K 204 (2)

- 1 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土 シルト質 炭化物 ( $\phi 10\text{ mm}$ ) 多量

S K 208

- 1 灰褐色土 シルト質 黄色土ブロック ( $\phi 20\text{ to }30\text{ mm}$ )・炭化物少量
- 2 暗灰褐色土 シルト質 炭化物 ( $\phi 10\text{ mm}$ ) 多量
- 3 灰褐色土 シルト質 均質 しまり強

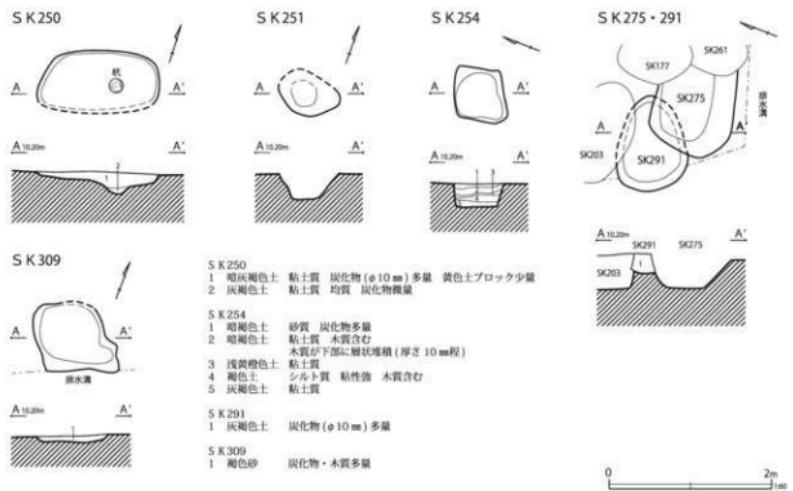
S K 243

- 1 暗灰褐色土 粘土質 黄色粒子少種
- 2 暗灰褐色土 粘土質 黄色粒子少種 炭化物 ( $\phi 10\text{ mm}$ ) 少量
- 3 暗灰褐色土 粘土質 炭化物微細
- 4 灰褐色土 粘土質 木片多量
- 5 棕褐色土 砂質

S K 244

- 1 暗灰褐色土 砂質 木質・炭化物多量
- 2 暗褐色土 シルト質 黏性強 炭化物少量
- 3 灰褐色土 粘土質 炭化物微量
- 4 白色土 粘土質
- 5 黄褐色土 木質微量 (上層の混入)
- 6 黄褐色砂 粘土質 木質多量 木製品含む
- 7 灰色土 粘土質 木質多量 木製品多量
- 8 暗灰色土 粘土質 木質少量
- 9 黄褐色土 粘土質 炭化物少量

第 357 図 区画 AG 土壤 (4)



第358図 区画AG土壤(5)

第355図234は滑石製の石筆で、混入と考えられる。235は玉醤製の火打石である。236は白色の流紋岩製砥石である。全面を砥面としている。237は赤褐色を呈する粘板岩製硯である。裏面に刻書がみえる。

以上に取り上げた土壌の他にも特徴的な遺物が出土しており、以下に記述する。

第359図2は地方窯系と推定される陶器で、大型のこね鉢である。内外面に灰釉が施釉され、外面に青緑釉が流し掛けられている。胎土は緻密で硬質である。

4は瀬戸美濃系磁器で、端反形碗の蓋である。つまみ端部が幅広で、内面に「道(光)年(製)」の染付銘がみられる。

8は土瓶と推定される漆塗の陶器である。器形はソロパン形を呈する。第139号土壌で類似する製品が出土しており(第300図2)、「陶胎蒔絵」、「陶漆器」、「漆陶器」等と呼ばれる陶器と考えられる。代表的なものでは、江戸時代後期に軟質陶器を焼いた名古屋の「豊楽焼」や「慶楽焼」等が

ある(矢部ほか2002)。

上下合わせの型成形で、接ぎ痕がみられる。外面上位は陽刻状施文で赤漆が塗布される。下位は黒漆が塗布されているが、脆く、著しく剥落している。外面上位には把手が付いていたと考えられる欠失部がみられる。

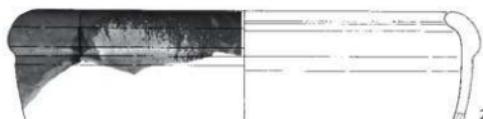
第360図13は備前系陶器の壺・甕類と推定される。胎土は炻器質で、外面に施釉状の光沢がみられる。被熱している。

14は瓦質土器の火鉢である。大型の丸火鉢と推定され、外面にミガキ調整とスタンプ施文がみられる。表面は燻しにより灰へ黒色を呈する。

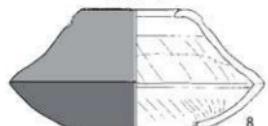
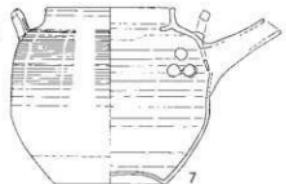
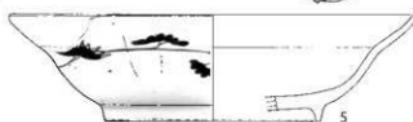
15は瓦質土器の植木鉢である。体部の開きが大きく、器高が低い。底部は糸切痕がナデ消されていている。燻しにより表面の色調は灰色である。胎土に細粒な雲母が含まれる。

21は地方窯系陶器と推定される片口鉢である。灰釉が施釉され、体部下位に鎧状文がみられる。内面に台形の目跡が5箇所みられる。被熱により釉は白色化し、胎土は橙色化している。底部に墨

SK168



SK174



赤漆 黒漆

SK177

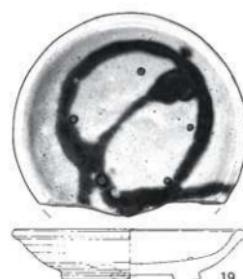
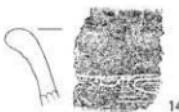
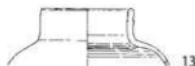
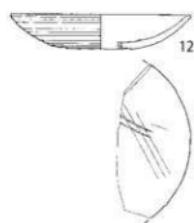


2 0 10cm

1 3~11 0 10cm

第359図 区画AG 土壌出土遺物(1)

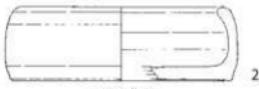
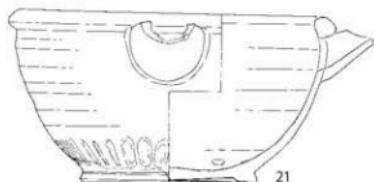
SK178



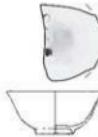
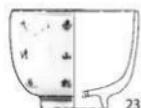
SK185



染付



SK188



第360図 区画AG土壤出土遺物(2)

S K 188



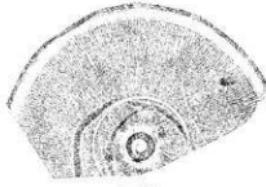
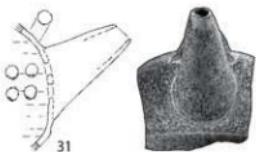
S K 190



S K 202

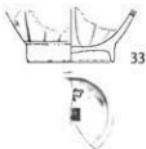


S K 208

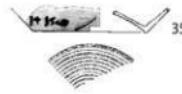


32

S K 243

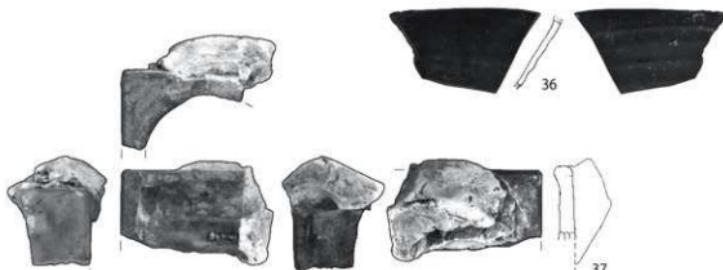


34



第361図 区画AG 土壌出土遺物（3）

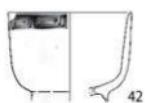
S K243



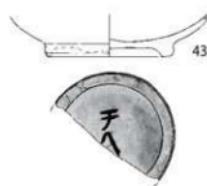
S K244



S K275



S K309



S K331



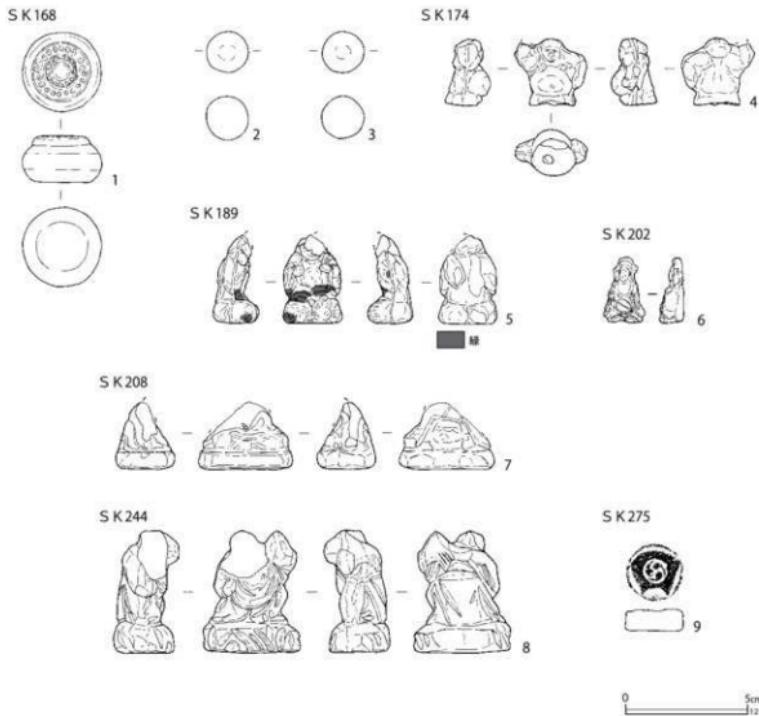
38 0 20cm 36 · 37 · 39~44 0 10cm

第362図 区画AG土壤出土遺物(4)

第87表 区画AG 土壌出土遺物観察表(1)(第359~362図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存 焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	戸車	3.6	0.7	3.6	—	95 良好	白	SK168	肥前系 侧面施釉	
2	陶器	こね鉢	(34.0) [9.0]	—	—	IK	5 良好	灰白	SK168	内外面灰釉 外面上位青緑釉流し掛け 被熱	
3	磁器	碗	(7.4)	5.5	(3.8)	—	45 普通	白	SK174	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
4	磁器	蓋	(3.3)	2.7	(9.1)	—	40 良好	白	SK174	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
5	磁器	鉢	(24.8)	6.6	(13.0)	—	25 普通	白	SK174	肥前系 内外面施釉・染付	
6	陶器	灯明皿	(8.4)	1.6	(3.0)	K	45 普通	灰白	SK174	京都信楽系 外面上位・内面施釉 内面ピン痕2道存 外面上位煤付着	
7	陶器	土瓶	(7.8)	[11.0]	6.8	IK	40 普通	灰黄	SK174	外面上位施釉・鉄船・白土結付 内面下位施釉 接点のない3片から復元	
8	陶器	土瓶	(6.0)	[7.4]	—	K	20 普通	こぶい煙	SK174	上下合型成形 内面下位鉄釉 外面上位陽刻文・赤漆塗布 外面下位黒漆塗布 耳・脚痕あり SK266-279と接合	
9	磁器	碗	(9.8)	6.1	4.3	—	35 普通	白	SK177	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
10	磁器	碗	(9.0)	[4.4]	—	—	15 普通	白	SK177	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
11	磁器	环	(5.6)	3.1	(1.8)	—	15 普通	白	SK177	肥前系 内外面施釉・染付	
12	陶器	灯明皿	(10.9)	2.1	(4.0)	K	40 普通	灰白	SK178	京都信楽系 脱土磁質 外面上位・内面施釉 内面櫛目・ピン痕1道存 外面上位煤付着	
13	陶器	盃盤類	5.6	[3.5]	—	IK	15 普通	灰黄褐	SK178	肥前系 脱土炻器質 外面施釉 被熱 (弱)	
14	瓦質土器	火鉢	—	[4.7]	—	ACHIK	5 普通	明褐色	SK178	外面上ミガキ・スタンプ施文 磁土 被熱・煤付着	
15	瓦質土器	植木鉢	10.0	3.9	4.9	A1	85 普通	灰	SK178	底部系切瓶をナデ消し 燐す	
16	磁器	碗	(7.3)	5.9	3.8	—	45 普通	白	SK185	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面上位陽刻文・染付	
17	磁器	碗	(5.9)	4.5	2.8	—	50 普通	白	SK185	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 SK188と接合	
18	磁器	皿	口絶長8.1 短4.1 高さ2.4 底部長4.3 短2.3	—	—	—	40 普通	白	SK185	瀬戸美濃系 型成形 内面陽刻文・染付	
19	陶器	皿	13.9	3.3	8.5	EIK	85 普通	灰黄	SK185	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面青緑釉流し掛け 目跡5あり 被熱	
20	陶器	灯明皿	(11.0)	[1.8]	(4.0)	K	30 良好	灰白	SK185	京都信楽系 脱土磁質 外面上位・内面施釉	
21	陶器	片口鉢	18.8	10.6	10.8	IK	90 普通	灰	SK185	内外面灰釉 体部下位輪 内面台形目跡5あり 被熱 (釉白色化・胎土橙色化) 底部黒墨書き	
22	施釉土器	鉢	(12.4)	4.6	(13.4)	AHK	30 普通	こぶい煙	SK185	近部静止系切瓶 内外面施釉 底部鉄化粧 口縁部重複	
23	磁器	碗	(7.8)	6.1	3.8	—	45 普通	白	SK188	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
24	磁器	环	(5.9)	2.9	2.4	—	20 普通	白	SK188	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付 (黒化・金)	
25	磁器	环	(5.9)	2.6	(2.3)	—	35 普通	白	SK188	肥前系 内外面施釉 内面上給付 (赤)	
26	磁器	皿	13.7	2.7	6.5	—	95 普通	白	SK188	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 内面黒色付着物	
27	陶器	环	(5.8)	3.5	(2.4)	IK	45 普通	黄灰	SK188	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
28	陶器	皿	12.7	2.0	8.0	IK	85 普通	こぶい煙	SK188	体部下位錐状 内外面灰釉 内面鉄絵・ピン痕7道存	
29	磁器	皿	9.4	2.0	5.0	—	95 普通	白	SK190	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
30	磁器	环	(5.7)	2.9	(2.3)	—	30 良好	白	SK209	肥前系 内外面施釉 内面上給付 被熱	
31	陶器	土瓶	—	[8.6]	—	I	10 良好	こぶい煙	SK208	外面上鉄釉 (胎釉気味)	
32	陶器	蓋	—	3.9	(15.8)	IK	55 良好	灰白	SK208	体部トビガラナ施文・青緑釉散らし	
33	磁器	碗	—	[3.2]	(5.2)	—	20 普通	白	SK243	高台美濃系 内外面施釉・染付 高台内施錐印 (赤)	
34	磁器	碗	(10.3)	4.8	(3.6)	—	45 普通	白	SK243	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
35	磁器	急須	—	[1.5]	(7.0)	—	5 普通	白	SK243	瀬戸美濃系 内外面施釉 底部同心円状の弦線 外面焼印	
36	陶器	盃盤類	—	[4.4]	—	I	5 普通	明褐色	SK243	肥前系 脱土炻器質 外面一部に釉が重れる	
37	瓦質土器	甕口	長[9.3] 短[6.8] 高さ[6.5]	—	—	CIK	10 普通	こぶい煙	SK243	板作り成形 錆噴付着	
38	瓦質土器	甕	(63.2)	[13.9]	—	CHIK	10 普通	こぶい煙	SK243	やや酸化焰焼成 脱土中心灰色 内面・口唇部白色質付着	
39	磁器	土瓶	(7.0)	[3.5]	—	—	10 普通	白	SK244	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
40	磁器	蓋	—	[1.0]	5.5	—	95 普通	白	SK244	瀬戸美濃系 上下面施釉 上面酸化コバルト染付 最大径6.0 cm	
41	瓦質土器	焙烙	—	[0.7]	—	CHIK	5 普通	こぶい煙	SK244	底部シワ状模 やや酸化焰焼成 内面光沢・刻印 「大極上」カ	77-5

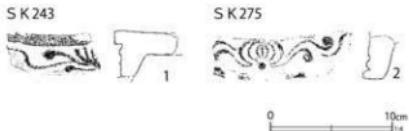
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
42	磁器	碗	(7.6)	[5.5]	—	—	15	良好	白	SK275	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
43	陶器	鉢	—	[2.6]	7.7	IK	40	良好	灰黄	SK309	内外面灰釉 高台内墨書き	
44	磁器	碟利	—	[14.1]	5.0	—	95	良好	白	SK331	肥前系 外面施釉・染付 高台内墨書き	



第363図 区画AG 土壌出土遺物(5)

第88表 区画AG 土壌出土遺物観察表(2)(第363図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	ミニチュア	—	3.3	1.9	11.4	AK	普通	灰白	SK168	京都系 型成形 中空	118-16
2	陶器	土玉	1.7	1.7	—	5.2	—	普通	灰白	SK168	手捻り成形 露胎 硬質	118-17
3	陶器	土玉	1.7	1.8	—	5.2	—	普通	灰白	SK168	手捻り成形 露胎 硬質	118-17
4	土製品	人形	2.7	3.0	1.9	8.1	AIK	良好	橙	SK174	前後合二枚型成形 中実	118-18
5	土製品	人形	[3.6]	2.4	1.9	12.0	IK	良好	灰白	SK189	京都系 大黒 前後合二枚型成形 中実 外面施釉 緑釉	118-19
6	土製品	人形	2.2	1.7	1.0	2.8	AK	良好	橙	SK202	江戸在地系 一枚型成形 中実 雪母付着	119-1
7	土製品	人形	[2.4]	3.9	2.4	17.2	AHK	良好	にじみ橙	SK208	天神様 前後合二枚型成形 中実	119-8
8	土製品	人形	5.0	4.0	2.7	34.1	AHK	良好	にじみ橙	SK244	恵比須様 前後合二枚型成形 中実 胎土 小織含む	119-15
9	土製品	泥面子	—	2.4	0.9	6.0	AIK	良好	橙	SK275	江戸在地系 一枚型成形 雪母付着	122-11



第364図 区画AG 土壤出土遺物(6)

第89表 区画AG 土壤出土遺物観察表(3)(第364図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[5.2]	[9.2]	2.1	4.0	—	AIK	良好	灰白	SK243	銀化 鐵す	
2	瓦	軒桟瓦	—	12.4	2.3	[4.0]	—	AIK	普通	灰白	SK275	江戸式 弱く銀化 鐵す	

書がみられる。

22は施釉土器の鉢である。器高が低く、口縁部は内湾する。透明釉が施釉され、底部には静止糸切痕が遺存する。底部に鉄化粧、口縁部に重ね焼き痕がみられる。

第361図26は瀬戸美濃系磁器の皿である。蛇ノ目四形高台で、酸化コバルト染付が施される。内面全面に黒色物質が厚く付着する。

28は地方窯系陶器と推定される皿である。蛇ノ目高台で、体部下位に鎬状文がみられる。口縁部は玉縁状を呈する。灰釉が施釉され、内面は鉄絵である。内面には窯道具痕が7箇所みられる。

32は産地不詳陶器の蓋である。行平鍋の蓋と考えられ、外面にトビガンナ文がみられ、青緑釉が散らされている。

第362図36は備前系陶器の壺甕類と推定される。薄手の胴部破片で、大型製品と推定される。外面の一部に釉の垂れがみられる。

37は土師質土器の風口である。焜炉のオブションやパーツの一部で、付着している漆喰は組み合わせ時に固定するためのものと推定される。胎土に角閃石が一定量含まれ、在地産と考えられる。

38は瓦質土器の大甕で、常滑系大甕に類似する器形を呈している。やや酸化焰焼成で、表面は橙色気味である。内面と口唇部に白色物質が付着する。江戸遺跡で便槽として検出された甕や桶には白色物質が付着していることから、尿を貯蓄

した可能性が指摘されている(江戸遺跡研究会2001)。

41は瓦質土器の平底焙烙である。底部破片で、内面に光沢と「大極上」と推定される刻印がみられる。「大極上」の刻印は平底焙烙の底部にみられる場合が多い。

44は肥前系磁器の鶴首形御神酒徳利である。外面は蛸唐草文染付が施され、底部に墨痕がみられる。

第363図1は素焼きの京都系陶器のミニチュアで、モチーフは不明である。型成形で中空である。

2・3は陶器製の土玉である。手捻り成形で、硬質な素焼である。栗橋宿では磁器製、土製はみられるが、陶器製は稀である。

4は力士を模した土製の人形である。前後合せの二枚型成形で、中実である。胎土に細粒な雲母が含まれる。

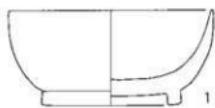
5は大黒を模した京都系の土製人形である。前後合せの二枚型成形で、中実である。透明釉が施釉され、一部緑釉彩色が施される。

7は天神様を模した土製人形である。前後合せの二枚型成形で、中実である。

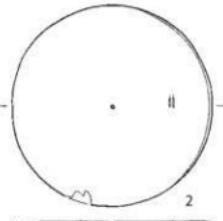
8は恵比須様を模した土製人形である。前後合せの二枚型成形で、中実である。胎土に小礫が含まれている。

9は江戸在地系の泥面子である。型成形で、胎

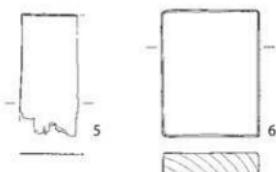
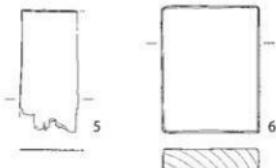
SK179



SK185



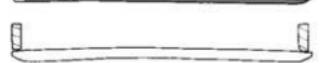
SK188



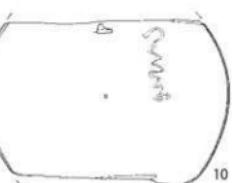
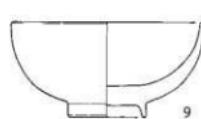
SK195



SK240



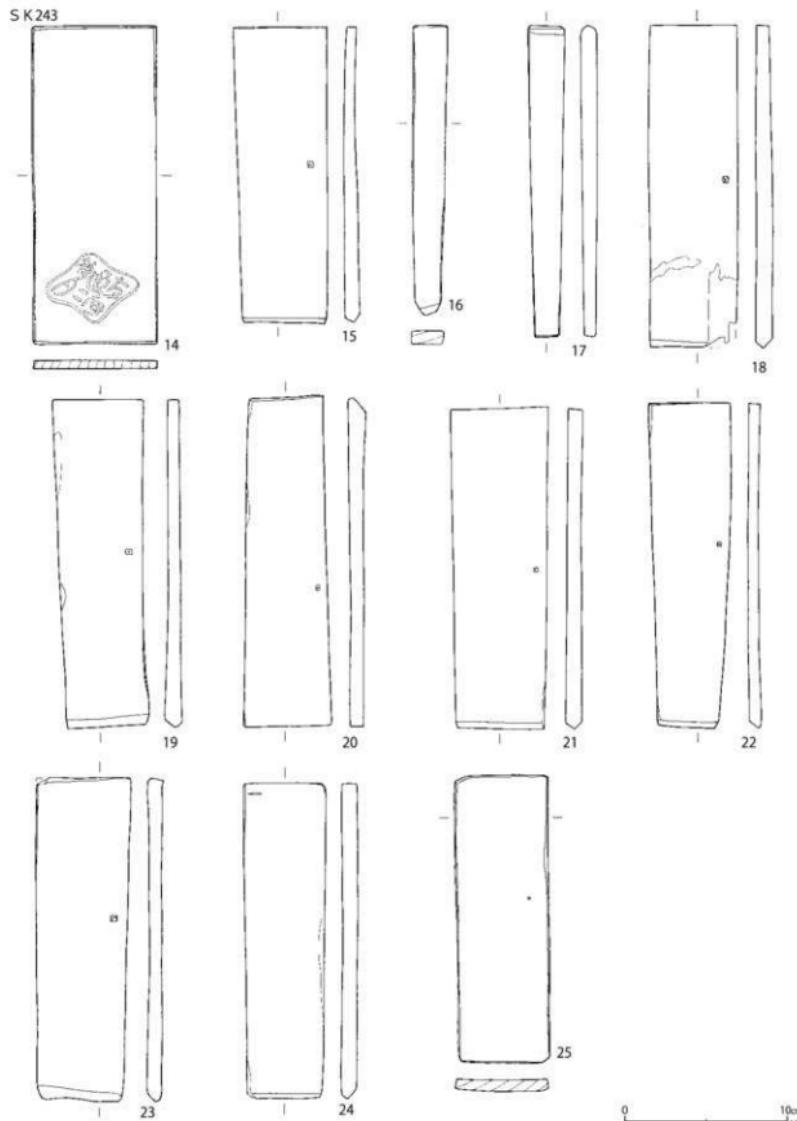
SK243



2・12・13 0 10cm

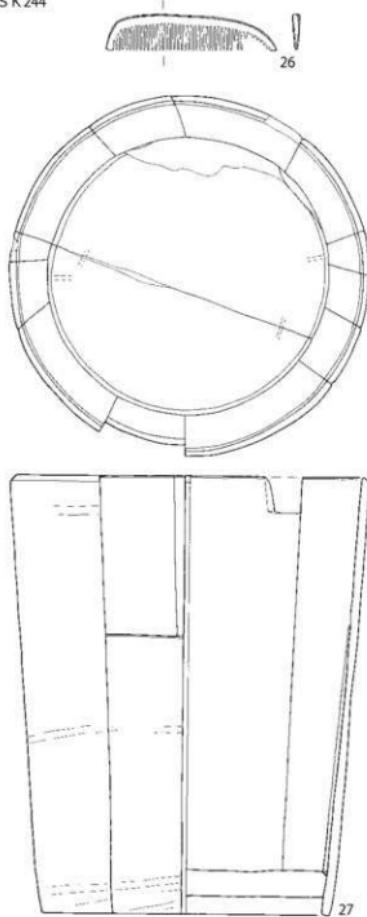
1・3～11 0 10cm

第365図 区画AG 土壌出土遺物（7）



第366図 区画AG 土壌出土遺物(8)

SK244



SK250



第367図 区画AG土壤出土遺物(9)

土に細粒な雲母が含まれる。三巴文がみられる。

第364図1・2は江戸在地系に類似する軒棧瓦である。いずれも銀化状の光沢がみられる。2は唐草文の巻きが強い。

第365図1は漆椀で、体部の腰に丸みを持つ。高台径は8.6cmで、高台の大きな器形である。2は蓋である。曲物の蓋と考えられる。樹皮紐の先端が欠けて一部が残存する。3は木札である。下部は斜めに削り落されており、樽側板の転用と考えられる。中央には穴が2箇所あけられている。4は刀物柄である。側面には断面長方形の穴があけられている。5は経本で、ごく薄い。墨書で「十一□□」の文字が書かれる。6は木札である。「□□管」の文字が書かれる。7は守り札である。表面に墨書で不動三尊の梵字が書かれ、裏面に焼印で「成田山」とある。8は漆塗りの箱で、高さ2.3cmと浅型である。底板は、角を斜めに落とされている。9は漆椀で、内面赤漆、外面黒漆塗りである。外面は腰の位置が明瞭ではなく丸みを持つ。高台は5.8cmと小形である。10は蓋である。樹皮紐が残る。焼印で「つぐたに」の文字が押されている。11は櫛である。背の左右端に角を持たない形状である。櫛の目はやや粗い。12はすりこぎである。上部に紐穴がなく、切断の痕跡がある。表面に節が残り、丸木をほとんど削らずに作られる。13は箱枕としたが、長さ15.1cm、幅23.9cmと大型で、外周に鉄釘が残ることから、他の器種の可能性がある。平面形は台形で、上下辺の角を斜めに削り落とす。

第366図14～25は木札である。14の下部には焼印で「古河□□抱月」の文字が押される。15～24は木札で、いずれも第243号土壙から出土した。樽の側板を転用している。長さはいずれも20cm前後である。端部は斜めに削り落とされ、中央部に方形の穴があけられる。15には「無類幸手支□」、18には「無類／白捨」、19には「無

第90表 区画AG 土壌出土遺物観察表(4)(第365~367図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	—	—	—	12.6	5.8	8.6	横木取り	SK179	内面赤漆 外面黒漆	128-15
2	木製品	蓋	—	—	0.5	16.4	—	—	板目	SK185	樹皮紐残存 木釘残存	145-20
3	木製品	木札	19.6	6.0	0.9	—	—	—	板目	SK185	表面墨書き 棚の側板転用カ	145-20
4	木製品	刃物柄	13.6	2.7	1.7	—	—	—	板目	SK188		
5	木製品	絹木	[7.4]	[3.5]	0.06	—	—	—	柾目	SK188	表面墨書き「十一□□」	145-21
6	木製品	木札	7.8	5.9	1.3	—	—	—	板目	SK188	表面墨書き「□□管」	129-17
7	木製品	木札	5.2	3.0	0.3	—	—	—	柾目	SK195	守り札 表面墨書き「不動三尊」裏面焼印「成田山」	146-3
8	木製品	漆箱	8.8	18.4	—	—	2.3	—	柾目	SK240	全面黒漆 並み有	
9	木製品	漆椀	—	—	—	11.7	5.8	4.6	横木取り	SK243	内面赤漆 外面黒漆	129-13
10	木製品	蓋	—	—	0.7	15.2	—	—	柾目	SK243	中央に孔 焼印「つくたに」樹皮紐残	
11	木製品	柳 [15.0]	3.5	1.0	—	—	—	—	板目	SK243		
12	木製品	すりこぎ	24.8	—	—	3.8	—	—	芯持材	SK243		
13	木製品	枕杖	15.1	23.9	0.8	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 外周に釘穴 鉄釘残存	147-13
14	木製品	木札	19.4	7.6	0.5	—	—	—	柾目	SK243	焼印「古河□□抱月」	
15	木製品	木札	18.2	5.7	0.9	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 棚の側板転用	146-17
16	木製品	木札	17.7	2.1	0.8	—	—	—	板目	SK243	墨書き	147-1
17	木製品	木札	19.0	2.2	1.0	—	—	—	柾目	SK243	表面墨書き 棚の側板転用 裏文字不明瞭	147-2
18	木製品	木札	19.8	5.4	1.0	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 棚の側板転用 孔2	147-3
19	木製品	木札	20.2	5.5	1.1	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 朱書き 棚の側板転用 孔1	147-4
20	木製品	木札	20.3	5.9	1.1	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 棚の側板転用 孔1	147-5
21	木製品	木札	19.8	6.0	1.0	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 棚側板転用 一部焼化 孔1	147-7
22	木製品	木札	19.9	5.0	0.7	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 棚の側板転用 孔1	147-8
23	木製品	木札	19.8	5.7	1.0	—	—	—	板目	SK243	墨書き 棚の側板転用 孔1	147-10
24	木製品	木札	19.2	5.0	1.0	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 棚の側板転用	147-11
25	木製品	木札	17.6	5.7	0.7	—	—	—	板目	SK243	表面墨書き 木釘残存	147-12
26	木製品	柳	10.4	2.2	0.4	—	—	—	板目	SK244		
27	木製品	樽	—	—	0.8~1.4	44.0	53.4	—	側板板目 底板板目	SK244	側板12枚(1枚短い 2枚に鉄釘孔1ヶ所ずつ 内鉄釘残1) 底板木孔2鉄釘孔2 黒墨	152-7
28	木製品	浮子	3.9	1.5	—	—	—	—	不明	SK250	赤黒漆塗り	129-15

類／二月／白玉／、20には「武州／無類／□玉／①幸手」、23には「ザラメ／①」、24には「ザラ／①／武州幸手町」の墨書きが見られる。屋号は二種見られ、15・18・19には「[下]」、20~24には「①」が書かれる。出土遺構が異なるが、第365図3にも「①」の屋号が見られる。25は転用品ではないが、15・18~23の木札と同様に方形の穴があけられている。表面に「武州栗橋河岸正出/海老寿屋様行」、裏面に「拾八年四月廿二日/改式千四百入」と書かれている。

第367図26は櫛で、髪を結う結構である。背の外形が左右で異なる。27は樽で、径44.0 cm、高さ53.4 cmと細長い樽である。側板は12枚、底板は2枚をつないでいる。底板に墨書きで「幸」

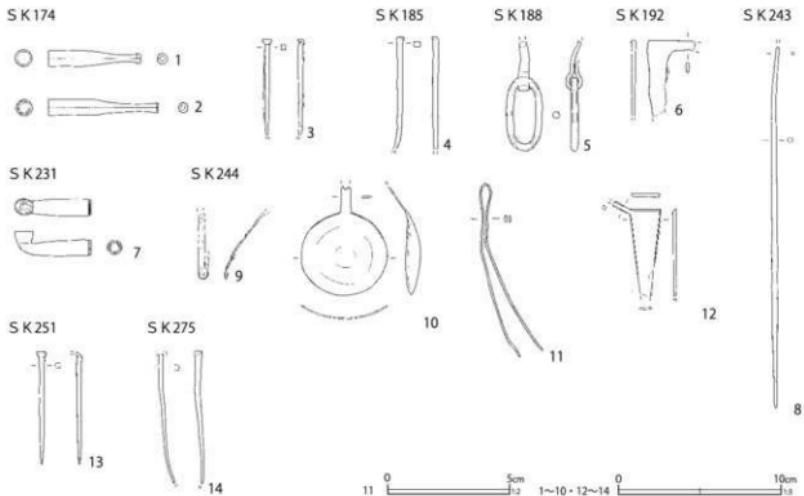
の文字が書かれる。箆の痕跡が3段残る。28は浮子である。上半が細く括れ、上端に膨らみがある。

第368図1・2・7は銅製煙管である。1・2は吸口、7は雁首である。吸口は薄い板状の銅を曲げて作られ、中心に素材の端部がみえる。

3・4・13・14は鉄製の頭巻釘である。建材等に使用されたと考えられる。

5は用途不明の鉄製品で、吊金具である。先端が環状を呈する棒状鉄製品に長楕円形の環状鉄製品が接続する。

11は扁平な棒状銅製品が曲げられ、二又状となっている。簪の可能性が推定されるが、飾りや文様がみられず、質素である。



第368図 区画AG土壤出土遺物(10)

第91表 区画AG土壤出土遺物観察表(5)(第368図)

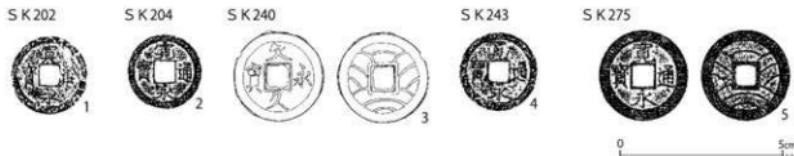
番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ5.7 小口径1.0 口付径0.6 重さ7.3	SK174	吸口	
2	銅製品	煙管	長さ6.8 小口径1.0 口付径0.6 重さ12.4	SK174	吸口	
3	鉄製品	釘	長さ[5.9] 幅0.3 厚さ0.3 重さ2.4	SK174		
4	鉄製品	釘	長さ[6.9] 幅0.4 厚さ0.3 重さ3.7	SK185		
5	鉄製品	吊金具	径4.5×2.2 縦[6.7] 厚さ0.4 重さ11.8	SK188		
6	鉄製品	不明	縦[4.7] 横[2.9] 厚さ0.3 重さ6.1	SK192		
7	銅製品	煙管	長さ4.7 大口径1.1×1.0 小口径0.9 重さ12.4	SK231	雁首	
8	鉄製品	不明	長さ[22.2] 厚さ0.3 重さ9.1	SK243		
9	銅製品	不明	長さ[4.1] 幅0.6 厚さ0.03 重さ1.2	SK244	端部で2枚折留	
10	銅製品	匙	長さ[6.7] 幅5.3 厚さ0.1 重さ7.9	SK244		
11	銅製品	簪か	長さ7.1 幅0.1 厚さ0.3 重さ1.8	SK244		
12	鉄製品	不明	縦[5.8] 横3.0 厚さ0.2 重さ9.4	SK244	柄中	
13	鉄製品	釘	長さ[8.2] 幅0.3 厚さ0.3 重さ3.6	SK251		
14	鉄製品	釘	長さ[8.2] 幅0.3 厚さ0.3 重さ3.5	SK275		

第369図1～5は銅製の錢貨である。多くは新寛永通寶である。3は文久永寶で、5は背面11波の四文錢である。

第370図1は軽石製、2は多孔質の角閃石安山岩製磨石である。1は自然面が大きく遺存する。裏面は使用面となっており、平坦である。刃物傷がみられる。2は大部分に使用痕がみられ、自然

面は部分的に遺存している。主要な使用面は裏面で、そのほかは部分的な使用で多面が形成されている。利根川中流域の中・近世遺跡で特徴的な遺物であり、近年埼玉県内における発掘調査で資料が急増している。

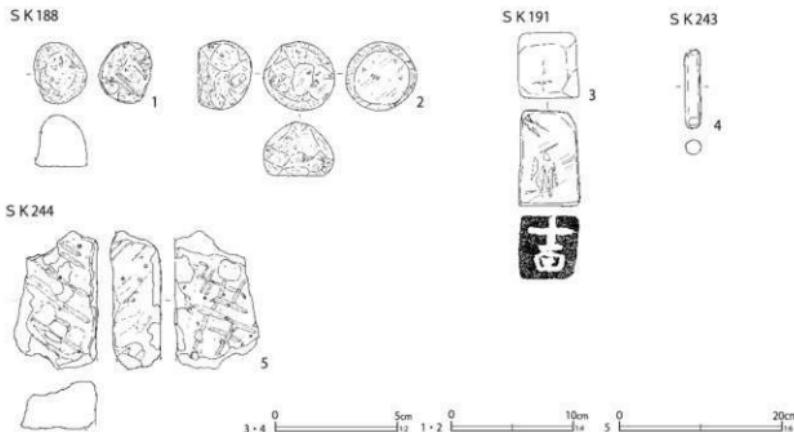
3は滑石製の印章である。下面に刻書「吉」がみえる。4は滑石製の石筆である。筆記具であり、



第369図 区画AG土壤出土遺物(11)

第92表 区画AG土壤出土遺物観察表(6)(第369図)

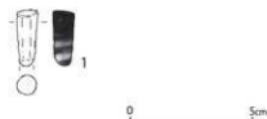
番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	錢貨	径 24.2 厚さ 1.1 重さ 1.9	SK202	寛永通寶(新)	
2	銅製品	錢貨	径 23.2 厚さ 0.9 重さ 1.8	SK204	寛永通寶(新)	
3	銅製品	錢貨	径 27.3 厚さ 1.2 重さ 3.3	SK240	文久永寶	
4	銅製品	錢貨	径 24.4 厚さ 1.4 重さ 2.8	SK243	寛永通寶(新)	
5	銅製品	錢貨	径 28.3 厚さ 1.4 重さ 5.3	SK275	寛永通寶(新) 11波	



第370図 区画AG土壤出土遺物(12)

第93表 区画AG土壤出土遺物観察表(7)(第370図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	磨石	5.0	4.4	4.2	32.5	軽石	SK188	自然面遺存 使用面1	140-3
2	石製品	磨石	5.6	5.8	4.4	88.5	角閃石安山岩	SK188	多孔質 自然面部分の遺存 使用面多数	140-3
3	石製品	印章	3.9	2.5	2.7	61.1	滑石	SK191	刃物・研磨痕多数 下面刻書「吉」	138-8
4	石製品	石筆	[3.2]	0.65	0.6	2.5	滑石(白)	SK243	両端使用	
5	石製品	切石材	[17.2]	[10.4]	6.3	815.9	凝灰岩	SK244	大谷石 表・裏面ツルハシ状工具痕 側面幅広工具痕 No.18	138-9



第371図 区画AG土壤出土遺物(13)

第94表 区画AG土壤出土遺物観察表(8)(第371図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構	備考	図版
1	硝子製品	笄	[2.3]	0.9	0.9	2.4	SK179	青に白を練り込み 中実	142-1

栗橋宿では多く出土している。

5は軽石質凝灰岩製の切石材である。栃木県大谷町で採掘される大谷石と推定される。栗橋宿では土蔵跡の基礎と考えられる蠟燭地業建物跡の基礎石として用いられることが多い。表・裏面には切石材に特徴的なツルハシ状工具と推定される幅の狭い溝状の削り痕がみられる。側面の工具痕は刃幅の広い工具痕に類似する。

第371図1は硝子製の笄である。青を基調に白の硝子が練り込まれている。中実である。

#### (10) ピット(第372・373図)

ピットは19基検出された。区画ごとの内訳は、区画ABに7基(ピット1~6・9)、区画ACに

第95表 第一回ピット一覧表

番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	備考	単位:m
1	AB	F7-B5	円形	0.22	0.18	0.13		
2	AB	F7-B5	円形	0.19	0.17	0.14		
3	AB	F7-B5	楕円形	0.47	0.24	0.07		
4	AB	F7-B6	楕円形	0.28	0.18	0.09		
5	AB	F7-C5	楕丸長方形	0.50	0.35	0.16		
6	AB	F7-C6	円形	0.35	0.34	0.22	SB32と重複	
7	AC	F7-C6	楕丸長方形	0.62	0.43	0.09		
8	AC	F7-C6	不整形	0.51	0.39	0.08		
9	AB	F7-C6	円形	0.35	0.30	0.07		
10	AC	F7-C7	不整形	0.51	0.38	0.11		
11	AE	F7-D6	円形	0.52	0.51	0.21	SB3と重複 SK272と重複	
12	AE	F7-D6	円形	0.43	0.42	0.34		
13	AE	F7-E6	円形	0.49	0.46	0.21	桶2より古 SB3より新	
15	AE	F7-E6	円形	0.34	0.33	0.25		
16	AF	F7-F6	円形	0.45	0.40	0.14		
17	AF	F7-F7	円形	0.46	0.44	0.23	SB1と重複 SK233と重複	
18	AG	F7-G7	円形	0.34	0.29	0.18		
19	AG	F7-G7	円形	0.50	0.49	0.26	SK189と重複	
20	AF	F7-F8	不整形	(0.60)	(0.25)	0.15	SB1と重複	

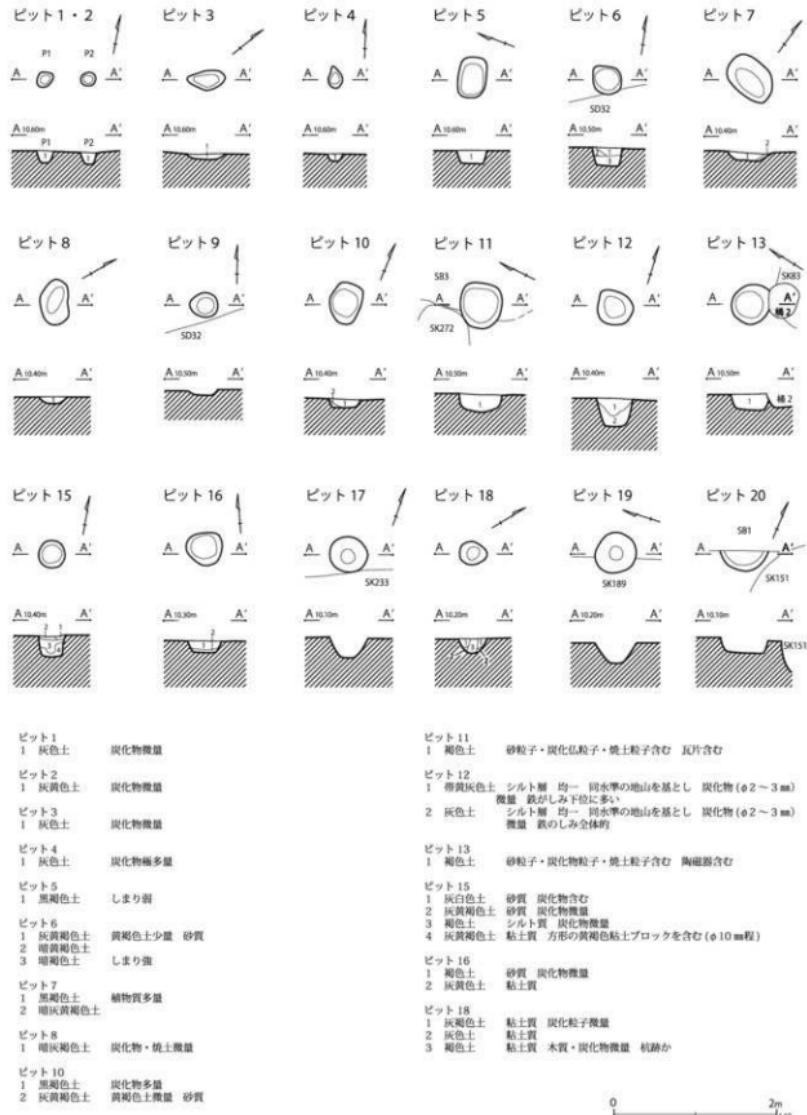
3基(ピット7・8・10)、区画AEに4基(ピット11・12・13・15)、区画AFに3基(ピット16・17・20)、区画AGに2基(ピット18・19)である。

単独のものがほとんどであり、建物跡を想定するような等間隔な並びは認められなかった。ただし、ピット1~4は直線上に並んでおり、1・2・3の径がかなり小さいため、後世の杭跡の可能性がある。

第95表に位置・規模等の基本情報、第372図に遺構図、第373図に出土遺物を図示した。

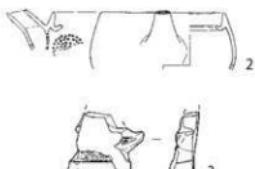
#### ピット5(第372・373)

F7-C5グリッドに位置する。平面形は隅丸



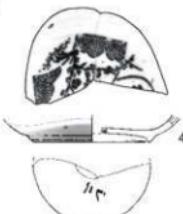
第372図 ピット

P 5



1 2 3 4 0 10cm 3 0 5cm

P 13



第373図 ピット出土遺物

第96表 ピット出土遺物観察表（第373図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	壺	—	[1.6]	(2.6)	—	30	良好	白	P5	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 内面 上位上繪付(青)	
2	陶器	急須	(7.5)	[3.5]	—	K	10	良好	灰白	P5	外面施釉・上繪付	
3	土製品	人形	長さ [2.6]	幅3.2	厚さ1.2	重量6.4	AHK	良好	橙	P5	江戸在地系 一枚型成形 中実 雲母付着	
4	磁器	皿	—	[1.6]	(7.2)	—	10	良好	白	P13	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型紙模様染付 焼締痕あり 高台内焼締印(赤)	

長方形で、長軸0.5m、短軸0.35m、深さ0.16mを測る。覆土は単層で、しまりの弱い黒褐色土である。推定廃絶期は19世紀後葉である。

出土遺物は極めて少なく、第373図1～3陶磁器を図示した。1は瀬戸美濃系磁器の壺である。外面に酸化コバルト染付、内面に江戸絵付けがみられる。2は産地不詳陶器の急須である。外面に施釉と上絵付がみられる。3は江戸在地系の土製人形である。一枚型成形で、中実である。表面には型離れをよくするための雲母が付着する。

#### ピット13（第372・373図）

F7-E6グリッドに位置する。第3号建物跡より新しく、第2号埋設洞より古い。平面形は円形で、長軸0.49m、短軸0.46m、深さ0.21mを測る。覆土は単層で、炭化物や焼土粒子、砂粒子を含む褐色土である。推定廃絶期は19世紀後葉である。

出土遺物は極めて少なく、第373図4に陶磁器を図示した。4は瀬戸美濃系磁器の型紙模様染

付皿である。焼締痕と高台内に焼締印がみられる。

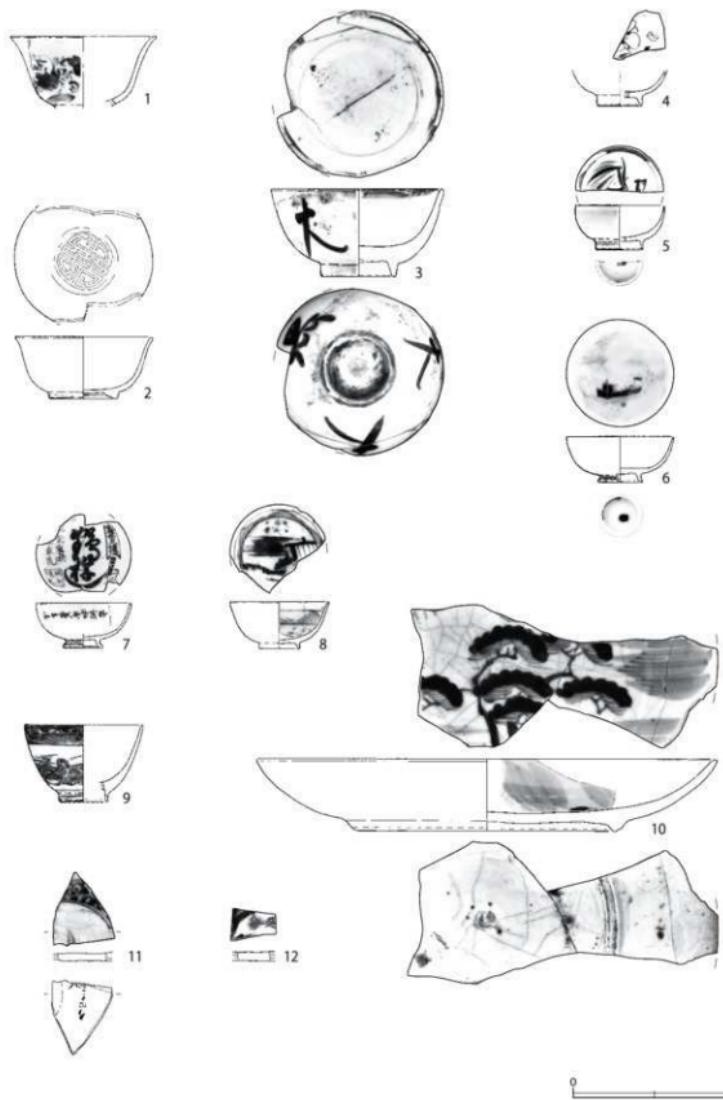
#### (11) 遺構外出土遺物（第374～383図）

第374～383図に第一面までの掘削時、遺構確認作業に伴って出土した遺物を示した。なお、掘り込みが確認できなかった杭列の出土遺物は、遺構に伴うものか判断することができないため、遺構外出土遺物として扱った。遺物は文字資料と特徴的な製品を中心に抽出した。

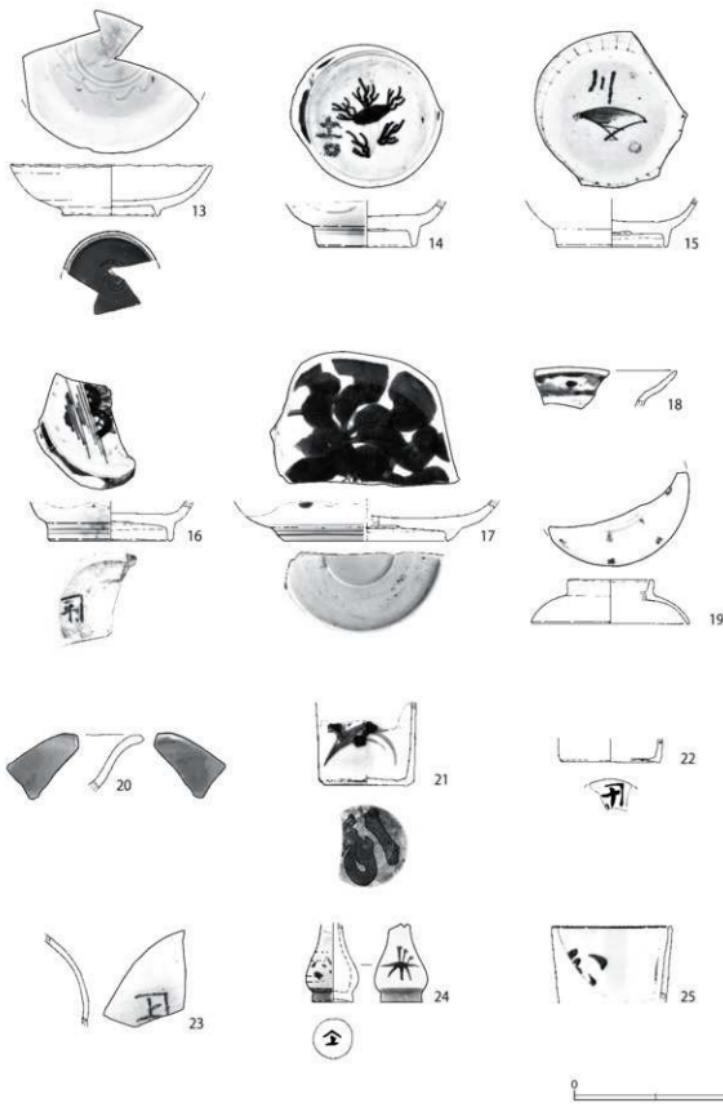
第374～376図に陶磁器類、第377・378図に小型器種の陶磁器類と土製品、第379図に瓦、第380・381図に木製品、第382図に金属製品と錢貨、第383図に石製品を示した。

第374図3は瀬戸美濃系磁器の丸碗である。厚手で、外面に酸化コバルト染付文字で「大大黒」と書かれている。焼締痕がみられる。被熱し、煤の付着もみられ、高台や壺付けに金属質の付着物がみられる。

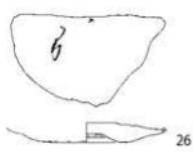
7は瀬戸美濃系磁器の卵殻手壺である。外面に染付、内外面に江戸絵付け文字がみられる。外面



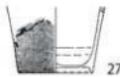
第374図 遺構外出土遺物（1）



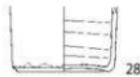
第375図 遺構外出土遺物（2）



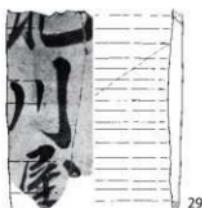
26



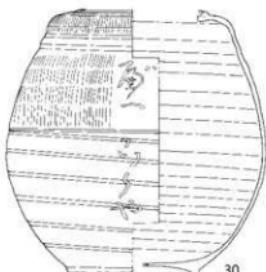
27



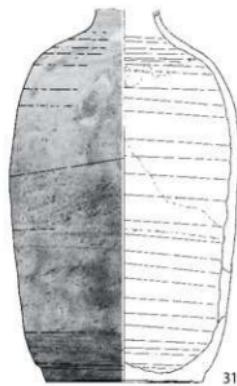
28



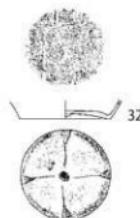
29



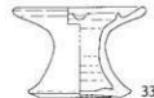
30



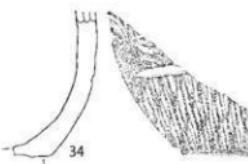
31



32



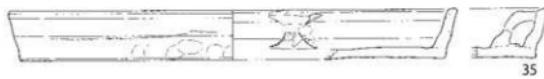
33



34



35



35 0 10cm

26~34 0 10cm

第376図 遺構外出土遺物（3）

第 97 表 遺構外出土遺物観察表(1) (第 374 ~ 376 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(8.9)	[4.4]	—	—	10	良好	白	—	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 烧継痕あり	
2	磁器	碗	8.5	3.8	4.0	—	80	良好	白	—	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
3	磁器	碗	10.4	5.4	4.5	—	80	良好	白	F7-C6	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 外面電付文字「大大黒」 燒継痕あり 被熱・煤付着 高台・豊付に金属質の付着物 高台内側み状の凹損	
4	磁器	环	—	[2.2]	(2.8)	—	20	良好	白	—	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付 (青)	
5	磁器	环	(5.4)	2.7	2.9	—	40	良好	白	—	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上上給付(青)	
6	磁器	环	6.6	2.9	2.6	—	95	普通	白	—	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
7	磁器	环	5.8	2.8	2.3	—	70	良好	白	桃核5	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付・上給付 (青)「古河 松本善口口」内面上給付 (青・金) 口唇部金彩カ	
8	磁器	环	(6.0)	2.8	2.4	—	65	良好	白	桃核3	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上給付	
9	磁器	环	(7.2)	4.7	(2.9)	—	30	良好	白	桃核3	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面銅版転写染付	
10	磁器	皿	(28.0)	4.4	(15.6)	—	15	良好	白	桃核3	肥前系 内外面施釉 内面染付 底部ハリ支脚5遺存	
11	磁器	皿	—	0.6	—	—	5	良好	白	桃核3	肥前系 内外面施釉 内面染付 蛇ノ目回形高台 烧継痕 ・焼継印 (赤)	
12	磁器	皿	—	0.6	—	K	5	良好	白	桃核3	肥前系 内外面施釉 内面型押陰刻文・染付	
13	磁器	皿	(12.2)	3.1	(5.8)	—	40	普通	白	—	瀬戸美濃系 内面陰刻文 内外面青磁釉 高台内鉄釉	
14	磁器	鉢	—	[2.9]	5.8	—	5	良好	白	桃核1	肥前系 内外面施釉・染付 内面訂書「吉」Na.36	
15	磁器	鉢	—	[3.0]	6.6	—	20	良好	白	桃核5	肥前系 内外面施釉 内面染付・ハリ支脚3あり・訂書 「川」	
16	磁器	鉢	—	[2.4]	7.4	—	10	良好	白	F7-D7	肥前系 内外面施釉・染付 高台内墨書	
17	磁器	鉢	—	[2.5]	(10.0)	—	15	普通	白	—	肥前系 内外面施釉・染付 烧継痕あり 高台内焼継印 (赤)	
18	磁器	鉢	—	[2.2]	—	—	5	普通	白	—	肥前系 内外面施釉 内面染付 被熱	
19	磁器	蓋	(5.2)	2.7	(9.6)	—	30	普通	白	—	肥前系 内外面施釉 外面染付	
20	磁器	鉢	—	[3.5]	—	—	5	普通	白	—	肥前系 内外面施釉 墨書	
21	磁器	橢形	—	[5.1]	5.1	—	5	普通	白	桃核5	瀬戸美濃系 外面施釉・染付 底部墨書	
22	磁器	橢形	—	[1.4]	(6.0)	—	5	良好	白	—	瀬戸美濃系 外面施釉 外面酸化クロム青磁釉 底部墨書 「丁」 [ ]	
23	陶器	徳利	—	[5.6]	—	—	5	普通	灰白	F7-C6	肥前系 外面施釉・訂書「王」「△」カ	
24	磁器	徳利	—	4.8	2.4	—	90	普通	白	—	瀬戸美濃系 外面施釉・酸化コバルト染付 底部墨書 「企」	
25	磁器	猪口	(7.2)	[4.7]	—	—	15	普通	白	—	肥前系 内外面施釉 外面染付文字「口[田]屋」	
26	陶器	香炉	—	[1.2]	4.4	—	10	普通	白	桃核5	肥前系 外面青磁釉 内面白色物質付着・墨書	
27	陶器	猪口	—	[4.1]	4.5	EIK	20	普通	灰白	F7-C6	大堀相馬系 内外面施釉 外面鉄釉 高台内焼継印 (赤) 破断面朱付着	
28	陶器	橢形	—	[4.0]	5.6	EIK	10	普通	灰白	桃核5	京都信楽系 外面灰釉 底部墨書「八」百兵」	
29	陶器	徳利	—	[12.2]	—	EIK	15	普通	灰白	F7-C5	船戸櫻硬質 内面鉄釉 外面灰釉・兵頭文字 (酸化コバ ルト) 「口用屋」 被熱	
30	陶器	徳利	—	[16.3]	7.7	K	70	良好	灰白	F7-C5	伊部上位トビガラナ状施文 外面灰釉・訂書 (正面・背 面)	
31	陶器	徳利	—	[22.8]	9.6	EIK	95	良好	灰白	—	瀬戸美濃系 外面灰釉 外面下位・底部釉拭き取り 底部 釉切痕遺存 体部上位2次穿孔	
32	陶器	急須	—	[1.1]	5.6	K	10	普通	灰白	F7-C6	船戸櫻硬質 施釉面 柱頭裏2次	
33	陶器	灯火具	(7.8)	5.5	4.9	K	60	普通	灰白	桃核3	京都信楽系 内外面施釉 口縁部歪み 被熱	
34	瓦質土器	火鉢	—	[8.0]	—	CIK	10	普通	灰白	桃核3	外腹墨文 燐十 口縁歪む 粘土中心部灰色	
35	瓦質土器	焰燈	(36.0)	[4.1]	(34.4)	CHIK	20	普通	灰白	桃核3	底部シワ状施 燐十 口縁歪む 粘土中心部灰色	

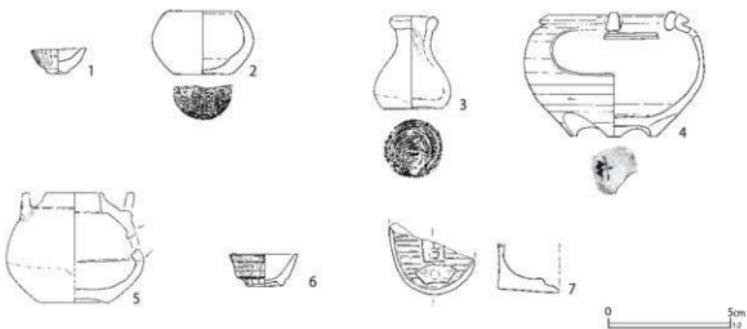
には「古河松本善口口」書かれる。古河の酒屋等に関係する杯と推定される。

第 375 図 14・15・16 は肥前系磁器の八角鉢である。蛇ノ目回形高台で、14 は内面に訂書き「吉」、15 は内面に訂書き「川」、16 は底部に墨書がみ

られる。

23 は肥前系磁器の大型長頸壺の体部破片である。訂書き「王」がみえ、板屋の屋号「<sup>上</sup>」の可能性が高い。

24 は瀬戸美濃系磁器の小型御神酒徳利である。



第377図 遺構外出土遺物(4)

第98表 遺構外出土遺物観察表(2)(第377図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	紅坯	2.2	1.0	0.6	3.9	一	良好	白	表採	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉	121-15
2	土師質土器	小壺	(2.8)	2.6	2.4	10.0	AHK	普通	にぬい黄焼	表採	底部糸切瓶 胎土粉質	121-14
3	陶器	ミニチュア	1.5	3.8	2.3	25.2	EIK	良好	灰黄	F7-08	瀬戸美濃系 底部糸切瓶(中心) 内外面灰釉	121-3
4	陶器	ミニチュア	(5.4)	5.1	3.5	65.9	K	良好	灰白	一	焼き締め 胎土磁質 外面火拂 高台扱り4底 部墨書 SK259と接合	70-1
5	土製品	ミニチュア	2.1	4.5	2.8	43.1	AHK	良好	橙	F7-06	江戸在地系 土瓶 上下合二枚型成形 内外面白化粧・施釉 外面縦輪溝し掛け・鉄絵	121-1
6	土製品	ミニチュア	2.8	1.3	1.4	3.5	K	良好	灰白	F7-06	京都系 磐 型成形 内外面施釉 口縁部縦輪	121-2
7	土製品	ミニチュア	[2.9]	1.5	0.8	11.5	AK	良好	にぬい黄焼	杭列1Tr 小判 一枚型成形 開口 被熱		

外面は酸化コバルト染付である。底部に墨書「全」がみえる。宿内用いられている屋号と考えられるが、栗橋宿では初出であり、詳細は不明である。

25は肥前系磁器の蓄友猪口である。外面に染付文字「□(田)屋」がみえる。「吉田屋」可能性が高く、区画AEの『絵図』にみえる「旅籠屋 / 太左衛門」に關わる遺物と推定される。

第376図27は大堀相馬系陶器の猪口である。粗粒な胎土で、外面に走馬文と考えられる鉄絵がみられる。底部に焼締印がみられ、破断面には朱が付着している。

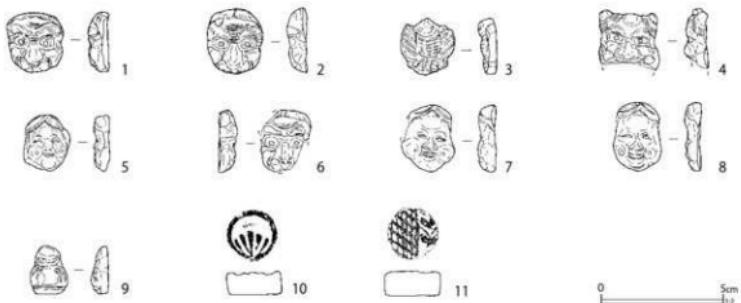
28は京都信楽系陶器の燭徳利である。外面は灰釉で、底部に墨書「□百兵」がみえる。「八百兵」と考えられ、第8地点ではよくみられる墨書である。第8地点周辺に居住する人物を指す可能性が

ある。

29は産地不詳陶器の徳利である。厚手で、胎土が炻器質に近く、極めて硬質である。外面に灰釉、内面に鉄釉が施釉される。外面には酸化コバルトの呉須で、「□川屋」の文字がみえる。宿内もしくは対岸の中田宿にある店名を指すと推定される。

30は東北・北関東地方を中心に分布する「すず徳利」である。極めて薄作りで、外面上位にトピガンナ状施釉、下位には沈線がみられる。外面は灰釉が施釉される。上端部の破断面には頸部と体部を接続した痕跡がみられる。体部には釘書きが2箇所みられる。

31は瀬戸美濃系陶器の灰釉一升徳利である。底部に糸切痕が遺存し、外面下位から底部にかけ



第378図 遺構外出土遺物（5）

第99表 遺構外出土遺物観察表（3）（第378図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土製品	芥子面	2.4	2.3	0.9	4.2	AHK	良好	橙	杭列1	Tr 江戸在地系 一枚型成形	122-13
2	土製品	芥子面	2.7	2.3	0.8	4.4	AHK	良好	橙	杭列1	Tr 江戸在地系 一枚型成形	122-13
3	土製品	芥子面	2.3	2.2	0.7	2.6	AK	良好	橙	杭列1	Tr 江戸在地系 一枚型成形	122-13
4	土製品	芥子面	[2.5]	2.5	1.0	4.5	AHK	良好	にぶい橙	杭列1	Tr 江戸在地系 一枚型成形	122-13
5	土製品	芥子面	2.3	1.9	0.7	2.1	AK	良好	橙	杭列1	Tr 江戸在地系 一枚型成形	122-13
6	土製品	芥子面	2.6	[2.1]	0.7	3.4	AK	良好	にぶい橙	杭列1	Tr 江戸在地系 一枚型成形	122-13
7	土製品	芥子面	2.8	2.2	0.7	3.2	AHK	良好	にぶい橙～黒	F7-87	一枚型成形 被熱（赤化）	122-13
8	土製品	芥子面	2.8	1.9	0.7	3.1	AK	良好	橙	F7-87	一枚型成形	122-13
9	土製品	芥子面	2.0	1.5	0.7	1.7	AHK	良好	にぶい橙	F7-C2	江戸在地系 一枚型成形 被熱か	122-13
10	土製品	泥面子	—	2.3	0.9	5.5	AHK	良好	橙	F7-C6	江戸在地系 一枚型成形 霧母付着	122-11
11	土製品	泥面子	径1.3	—	1.0	6.1	AHK	良好	橙	杭列1	江戸在地系 一枚型成形 中実 霧母付着	122-11

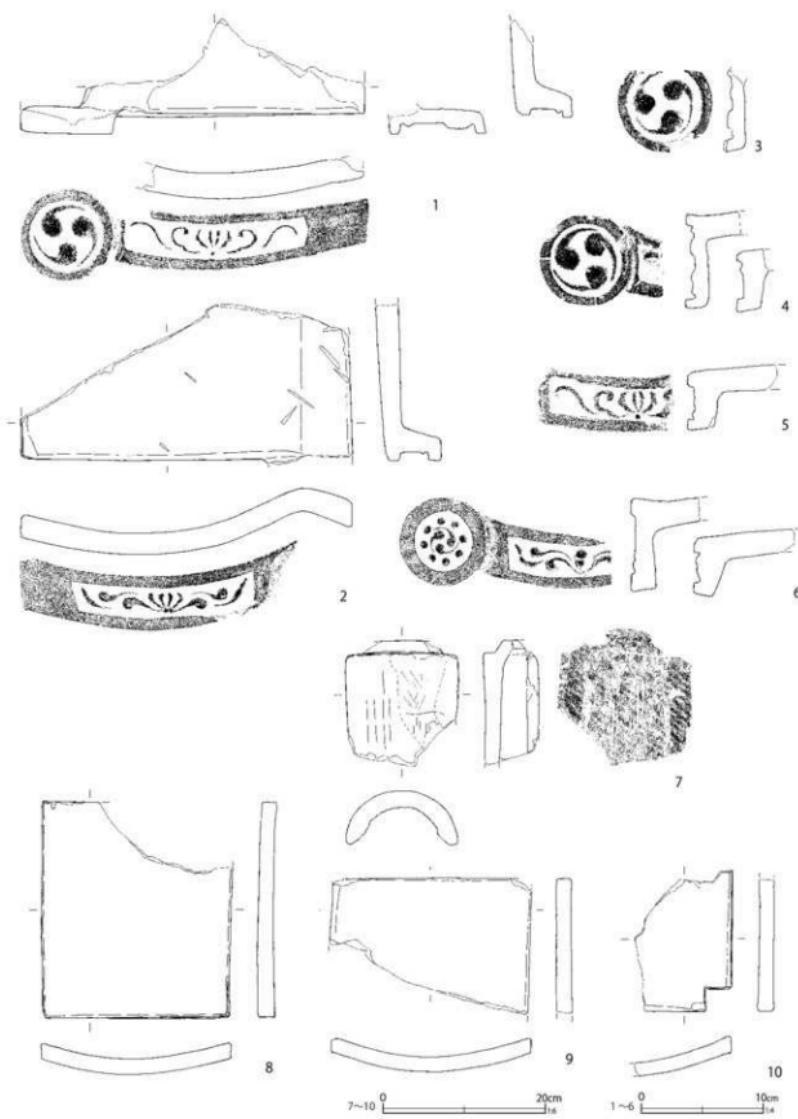
第100表 遺構外出土遺物観察表（4）（第379図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒棟瓦	[8.4]	28.2	2.3	[4.6]	7.6	AIK	普通	灰白	表探	左巻三巴文 錠寸 銀化	
2	瓦	軒棟瓦	[13.0]	27.2	2.1	5.4	—	AIK	良好	灰白	杭列5	江戸式 胎土粗雑 銀化 錠寸	
3	瓦	軒棟瓦	—	—	1.3	[7.6]	7.5	AIK	良好	灰白	表探	左巻三巴文 錠寸	
4	瓦	軒棟瓦	[5.9]	[10.7]	2.0	[7.7]	7.4	ACIK	普通	灰白	表探	左巻三巴文 弱く銀化 上面部分的に摩耗	
5	瓦	軒棟瓦	[7.6]	[14.4]	2.3	[17.7]	—	ACIK	普通	灰白	表探	弱く銀化 錠寸 摩耗著しい	
6	瓦	軒棟瓦	[11.1]	[17.7]	2.8	[7.6]	7.2	AIK	良好	灰白	表探	江戸式 右巻八連珠三巴文 銀化 錠寸	
7	瓦	丸瓦	[15.7]	[14.0]	2.2	6.8	—	AIK	普通	灰白	—	上面ヘラナデ 錠寸 一部二次利用（擦痕）下端部欠質部摩耗	
8	瓦	平瓦	27.0	23.9	1.9	4.1	—	AIK	良好	灰	—	焼寸 被熱（一部銀化）	
9	瓦	棟瓦	[16.9]	[25.1]	1.9	[4.1]	—	AHK	普通	灰白	—	弱く銀化 錠寸	
10	瓦	棟瓦	[17.5]	[12.2]	1.9	[4.9]	—	AK	普通	灰	—	弱く銀化 錠寸	

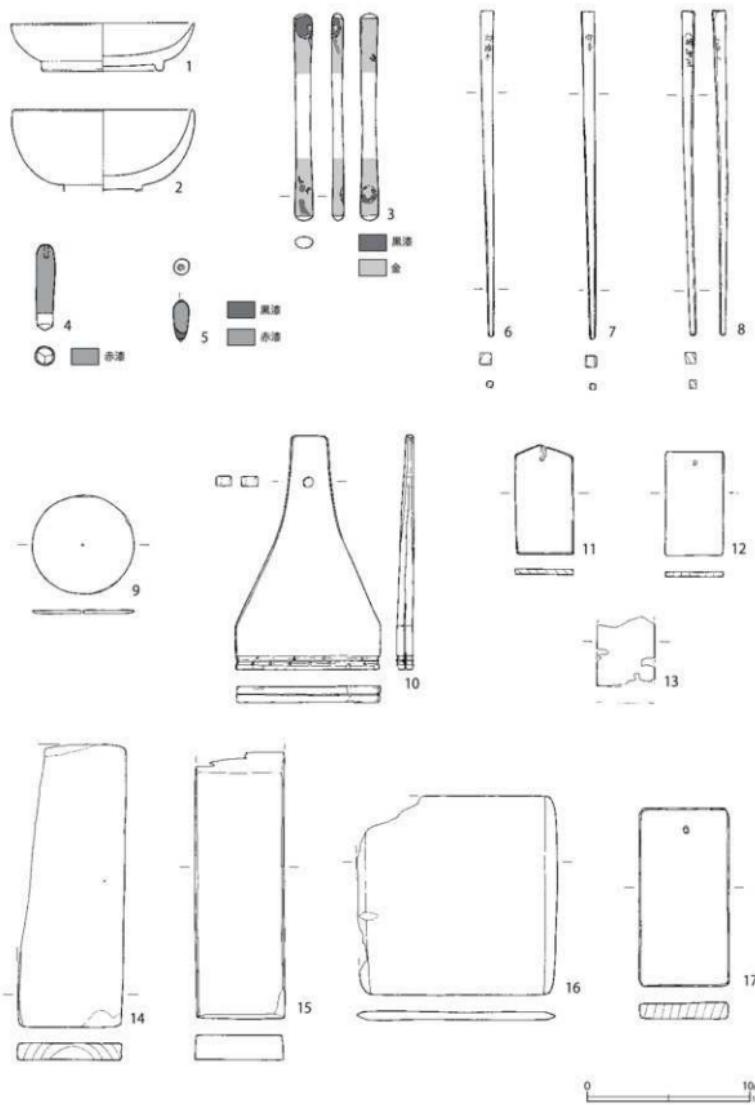
て釉が拭き取られている。体部下位には二次穿孔がみられ、転用が示唆される。

34は瓦質土器の火鉢である。輪高台状の脚部が付くと推定される。外面はトビガンナに類似する施文がみられる。

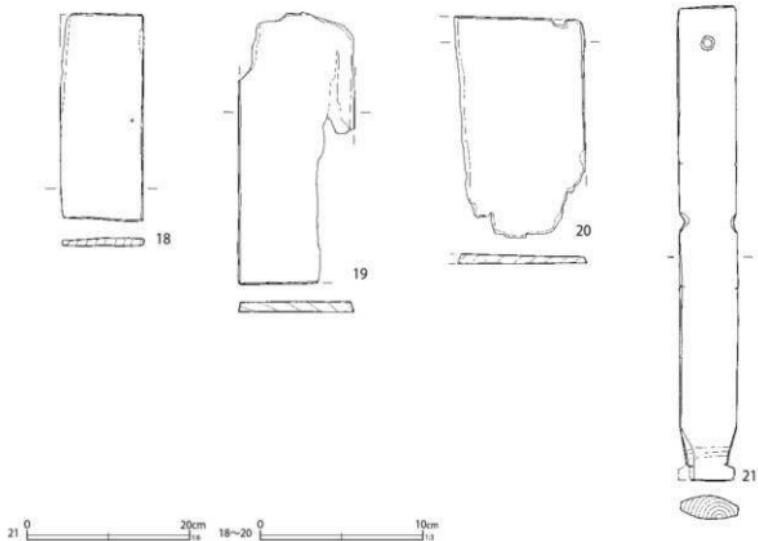
35は瓦質土器の平底焰燭である。底部は無調整のシワ状痕がみられ、外面はナデ調整である。器高が低く、口縁端部は丸みを帯びる。19世紀以降の所産であろう。胎土に角閃石が一定量含まれ、在地産と推定される。



第379図 遺構外出土遺物（6）



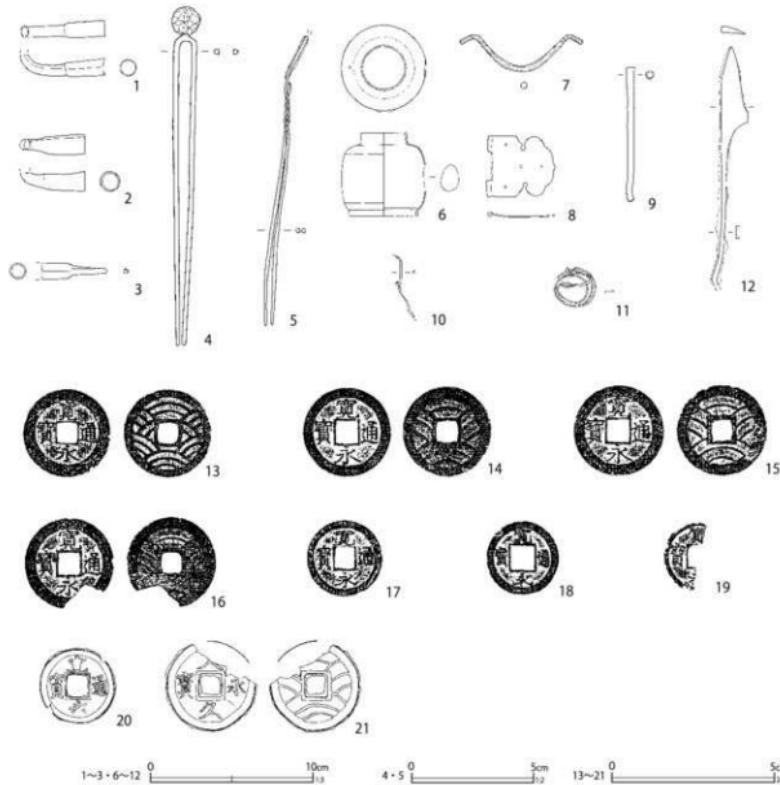
第380図 遺構外出土遺物（7）



第381図 遺構外出土遺物(8)

第101表 遺構外出土遺物観察表(5)(第380・381図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径/径	高さ	底径	木取り	遺構	備考	図版
1	木製品	漆椀	—	—	—	11.2	2.9	7.3	横木取り	—	内面赤漆 外面黒漆	
2	木製品	漆椀	—	—	—	11.0	[5.0]	—	横木取り	F7-O6	外面黒漆 内面赤漆	
3	木製品	筭	12.7	1.1	0.7	—	—	—	不明	团扇と蝶の文様		
4	木製品	取手カ	5.2	1.2	1.2	—	—	—	極目	F7-O6	孔あり 赤漆	
5	木製品	浮子	[2.6]	1.0	1.0	—	—	—	極目	F7-G8	1Tr 赤漆・黒漆 下部金属	
6	木製品	箸	19.9	0.8	0.7	—	—	—	削出し	F7-O6	焼印「御神木」7と同一	
7	木製品	箸	20.0	0.8	0.7	—	—	—	削出し	F7-O6	焼印「御神」6と同一	
8	木製品	箸	19.9	0.8	0.7	—	—	—	分割鋸状	杭列5	刻印 署「八坂神社」裏「□□□」F7-E8	
9	木製品	曲物	—	—	0.2	6.2	—	—	極目	表採	○中央に孔 プリント	148-6
10	木製品	刷毛	14.3	8.9	1.0	—	—	—	板目	F7-O6	表スタンプ 孔1 木釘孔1 内木釘残1	148-13
11	木製品	木札	6.7	3.6	0.3	—	—	—	板目	F7-C5	表面墨書き 釘穴	148-10
12	木製品	投薬札	6.3	3.6	0.3	—	—	—	板目	F7-C5	孔1 表スタンプ 右側面踏付着	148-11
13	木製品	経木	[3.7]	3.5	0.03	—	—	—	極目	F7-O6	スタンプ「商標」「八尺口島」の餘柄	
14	木製品	木札	17.3	6.4	1.0	—	—	—	板目	F7-G8	1Tr 表面墨書き	148-16
15	木製品	木札	[16.3]	5.4	1.5	—	—	—	板目	F7-O6	表面墨書き	148-12
16	木製品	木札	12.1	12.3	0.6	—	—	—	板目	—	表面墨書き	147-18
17	木製品	木札	10.8	5.5	1.0	—	—	—	板目	表採	表面墨書き	148-7
18	木製品	木札	12.6	5.0	0.5	—	—	—	板目	杭列5	表面墨書き	148-5
19	木製品	木札	[16.6]	7.1	0.6	—	—	—	板目	表採	表面墨書き	148-8
20	木製品	木札	[13.5]	[8.0]	0.6	—	—	—	板目	表採	表面墨書き	148-9
21	木製品	不明品	58.9	7.3	2.9	—	—	—	板目	孔1 側面に切り込み6		



第382図 遺構外出土遺物（9）

第377図1は瀬戸美濃系磁器の極小紅坯である。型成形で、外面に縦縞の文様が施される。

2は京都系「つぼつぼ」に類似する土師質土器の小壺である。底部に糸切痕が遺存し、胎土は粉質である。器形は胴部が張るように丸い。

3は瀬戸美濃系陶器で、徳利のミニチュアである。灰釉が施され、底部は離し糸切痕がみられる。栗橋宿での出土は稀である。

4は焼き締め陶器で、焜炉のミニチュアである。胎土は磁質で、外面に火捺がみられる。高台は4

箇所抉りがあり、中心部に墨書「井」がみえる。

7は小判を模した土製ミニチュアである。一枚型成形で、下面是開口する。栗橋宿では一定量の出土がみられる。第378図1～9は土製の芥子面、10・11は泥面である。

第379図1・3～5は同文の軒棧瓦である。瓦当文様は、第8地点で多くみられるが栗橋宿では稀な形態である。三巴文は極めて大きく、3・4は1・5と同様の瓦当文様であると考えられる。2は江戸式の軒棧瓦で、巴文の部分は右側につく。

第102表 遺構外出土遺物観察表(6)(第382図)

番号	種別	器種	法量	遺構名	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ[5.2] 小口径1.0 重さ4.9	杭列1	No.34 離首 火皿欠失	
2	銅製品	煙管	長さ[4.0] 小口径1.2 重さ6.9	杭列5	F7-E7-4 火皿欠失	
3	銅製品	煙管	長さ[4.0] 小口径1.0 口付径0.3 重さ3.6	F7-G8	吸口	
4	銅製品	管	長さ[13.9] 幅1.0 厚さ0.2 重さ7.1	F7-C6	玉管 玉は硝子製	
5	銅製品	管	長さ[11.9] 幅0.4 厚さ0.2 重さ2.3	F7-C7		
6	銅製品	不明	口径2.8 高さ5.1 底径4.2 厚さ0.1 重さ45.7	表探	脚部に1.6×1.1cmの卯形の窓あり	
7	銅製品	把手	径2.2 横7.6 厚さ0.4 重さ5.9	杭列3	F7-C6-4	
8	銅製品	蝶番	長さ3.8 幅4.3 厚さ0.05 重さ4.4	表探		
9	銅製品	不明	長さ8.2 厚さ0.5 重さ4.4	表探	中空	
10	銅製品	不明	長さ[3.8] 幅0.1 厚さ0.2 重さ0.4	表探		
11	銅製品	針金	幅2.5 横2.6 厚さ0.1 重さ1.7	杭列3	F7-C6	
12	鉄製品	鋸鉋	長さ[14.8] 刃幅1.5 齒幅0.4 重さ19.2	杭列5	F7-E7	
13	銅製品	錢貨	径27.5 厚さ1.3 重さ3.7	杭列3	F7-E7 寛永通寶(新) 21波	
14	銅製品	錢貨	径27.7 厚さ1.0 重さ3.4	F7-C3	寛永通寶(新) 11波	
15	銅製品	錢貨	径28.2 厚さ1.4 重さ4.9	F7-E7	寛永通寶(新) 11波	
16	銅製品	錢貨	径28.2 厚さ1.3 重さ[4.4]	F7-C5	寛永通寶(新) 11波一部欠	
17	銅製品	錢貨	径23.6 厚さ1.5 重さ3.3	杭列6	F7-F8-4 寛永通寶(新)	
18	銅製品	錢貨	径22.8 厚さ1.0 重さ2.1	F7-B7	寛永通寶(新)	
19	銅製品	錢貨	径21.7 厚さ1.1 重さ[0.8]	杭列3	F7-E7 寛永通寶(新) 半欠	
20	鉄製品	錢貨	径22.8 厚さ1.1 重さ1.7	F7-B6	寛永通寶(新)	
21	銅製品	錢貨	径27.0 厚さ1.2 重さ[3.2]	杭列6	F7-F8-4 文久通寶 1/4欠	

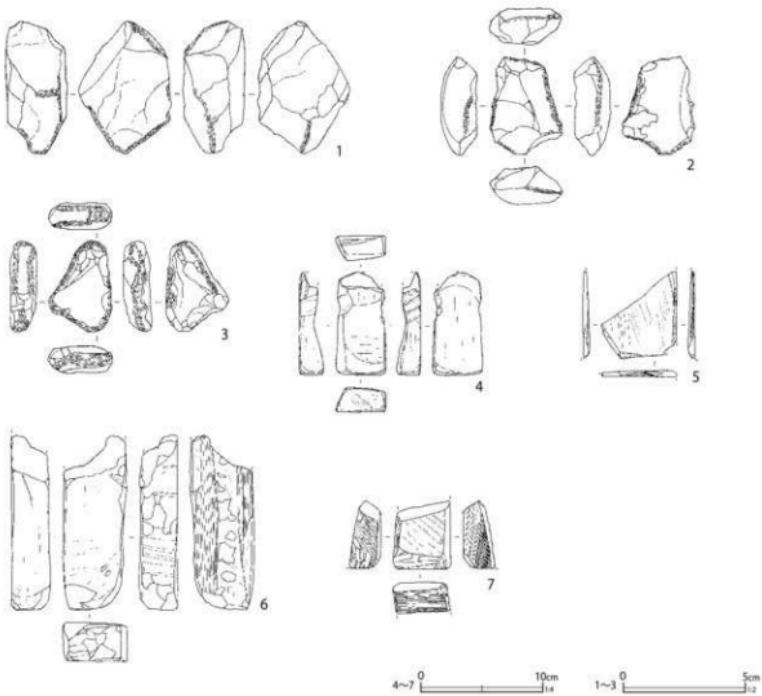
栗橋宿での出土は極めて稀である。胎土は粗雑である。

第380図1は漆塗で、内面赤漆、外面黒漆塗りである。やや浅いことから、蓋の可能性も考えられる。2は漆塗で内面赤漆、外面黒漆塗りである。外面の腰の位置は低く、丸みを持つ。3は笄である。中央部がわざかに括れ、断面は梢円形である。両端には文様が描かれ、金に黒漆で团扇と蝶が描かれる。4は把手と考えられる。下端は尖り、漆がないことから、他材とつないだ部分と考えられる。5は浮子である。下部に金具が残存する。6～8は箸である。6には「御神木」、7には「御神」の文字が刻まれ、6・7で一組と考えられる。8の表面には「八坂神社」の文字が刻まれる。9は曲物の底板である。10は刷毛である。一枚の板で作られる。下部に毛先を挟む切込みを入れている。表裏面下部に毛を固定するための穴が二列あけられている。上部には紐を通すか、壁にかけるためか、円形の穴があけられている。「@」利の文字が残る。11は木札である。

上部は欠損しているが、丸い穴があけられていたと考えられる。12は投薬札で、「内用」の文字などが残る。上部に丸い穴があけられ、右側面には錆が付着する。13は経木でごく薄い。14～20は木札である。14には「栗橋〔仲〕町／酒友屋／東京深川／万年町式〔 〕／大石吉〔 〕」の文字が見られる。16は、左右片が斜めに削られており、容器の蓋の可能性がある。「大和屋／口口」の墨書が見られる。17には「灯籠」「瀧太郎」の文字が残る。

第381図18の表面には「信〔州〕上伊那郡」「日製糸場」、裏面には「武州栗橋町／吉田屋作口口口／白鳥〔印〕治殿行」の墨書が見られる。21は不明品だが、長さ58.9cmであり、部材と考えられる。上部には丸い穴があり、中央部は他材と合わせるための括れがある。下部の両側面には切込みが入る。

第382図4・5は銅製の簪である。5の上部は捩じって成形している。4は硝子製の飾り玉がみられる。



第383図 遺構外出土遺物(10)

第103表 遺構外出土遺物観察表(7)(第383図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	火打石	5.5	3.8	2.5	56.9	石英	—	使用痕あり	
2	石製品	火打石	4.0	3.0	1.5	18.8	玉髓	—	棱の潰れ著しい	
3	石製品	火打石	3.7	2.6	1.1	13.2	玉髓	—	棱の潰れ著しい	
4	石製品	砥石	8.5	4.1	2.0	94.7	流紋岩	—	砥面6 側面溝状使用痕あり	
5	石製品	砥石	[7.2]	[6.2]	0.5	23.4	粘板岩(灰色)	—	側面ノコギリ痕 表面端部削痕	裏面1
6	石製品	砥石	[14.4]	5.3	3.2	384.2	流紋岩	杭列1	裏面ノコギリ痕 側面幅広工具痕 砥面2 刀物痕 あり	
7	石製品	砥石	[5.8]	4.5	[2.5]	97.7	ホルンフェルス	F7-C7	表面幅広工具痕 側面ノコギリ痕・刀ならし痕多数	

第383図1は石英、2・3は玉髓製の火打石である。3は特に使い込まれており、稜の潰れと丸みが強い。6は白色の流紋岩製砥石である。裏面には中央に段の付くノコギリ状工具痕がみられる。側面には刀幅の広い工具痕がみられる。7は

ホルンフェルス製の砥石である。側面に密なノコギリ状工具痕、左側面に多数の刃ならし痕がみられる。表面には刀幅の広い工具痕がみられる。裏面は全面欠損しているが、砥面だった可能性が推定される。

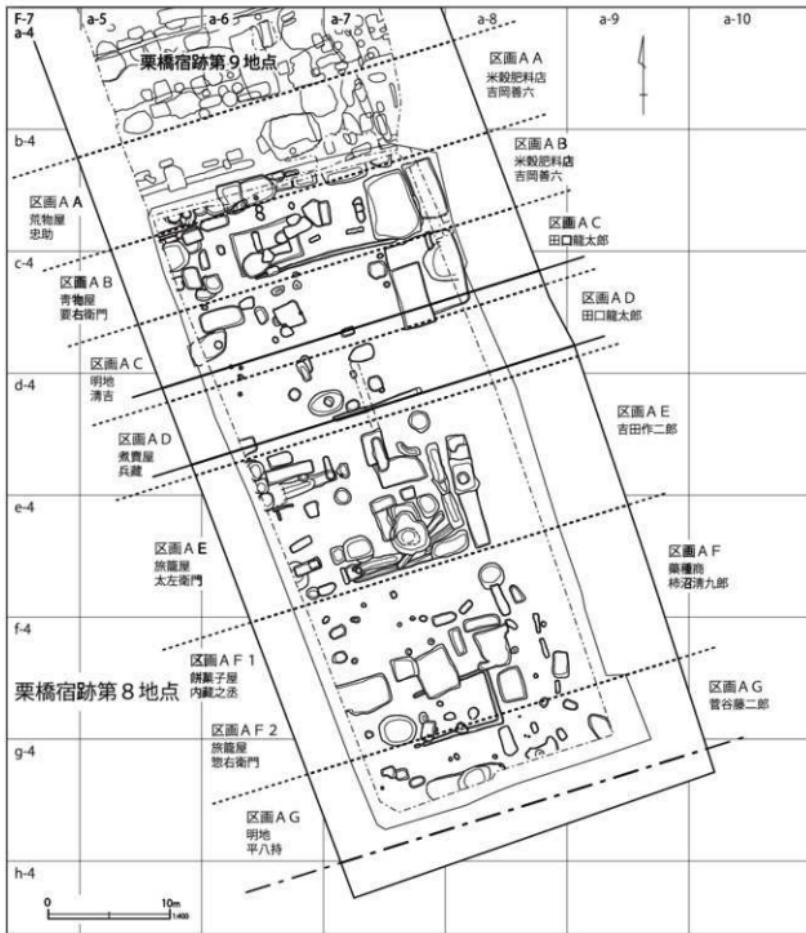
## 2. 第二面の遺構と遺物

第二面から検出された遺構は、建物跡 1 棟、埋設桶 6 基、井戸跡 8 基、溝跡 6 条、性格不明遺構 2 基、土壌 154 基、ピット 26 基である。

第二面では、第一面のように明確な区画施設が検出されていない。そのため、『絵図』との対比

が非常に困難である。また、第二面の遺構群は、18世紀後半から19世紀前半を中心とすることから『絵図』の年代以前であり、対比可能な史料がない。

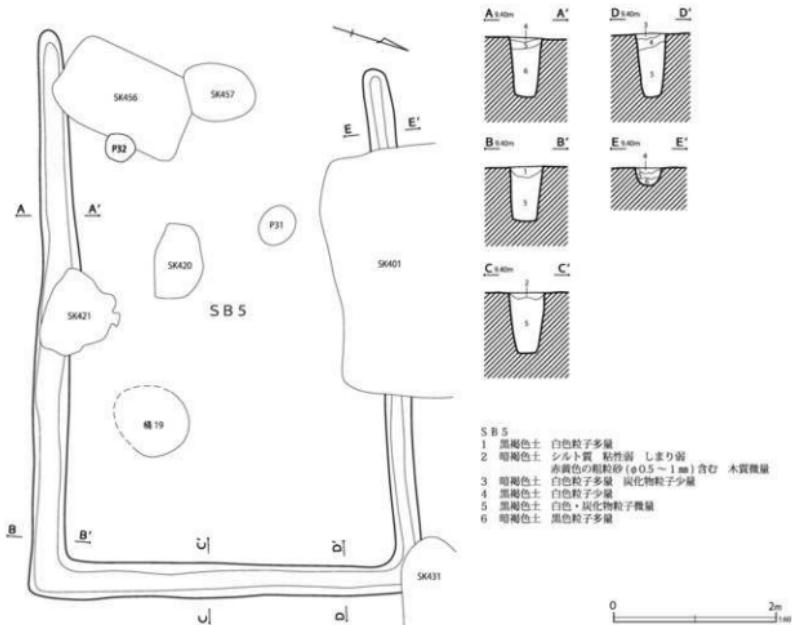
そこで、第二面では敷地範囲の変動がない区画



第 384 図 第二面区画参考図

第104表 第二面建物跡一覧表

番号	区画	グリッド	桁行(長軸)	梁行(短軸)	桁行推定	梁間推定	深さ	方位	備考
5	AF/AG	F7-F・G7・F8	7.05	4.85	6.65	4.40	0.76	N-72°-E	SK401・421・431・456より古桶19と重複



第385図 第5号建物跡

の存在を想定したうえで、出土文字資料等の対比を行なうことができるよう、第一面と同様に区画に即して資料の提示を行う。

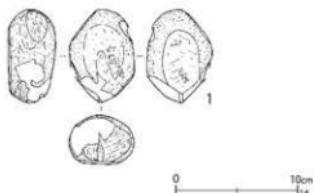
各構造が属する区画については、第8地点区画案(第18図)を用いて、第一面の区画施設直下に位置する場所に敷地境を示した(第384図)。第384図は19世紀中葉に比定される第一面の区画を基に作成した区画参考図である。そのため、検出されている遺構が必ずしも実態に即しているわけではないことを留意したい。

### (1) 建物跡(第385・386図)

F7-F・G7・F8グリッドに位置し、区画AF・AGにまたがる。第401・421・431・456より古く、第19号埋設桶と重複する。現地調査では第15号溝跡として調査されたが、建物跡の布掘基礎状に溝がクランクしていることから第5号建物跡として扱った。西辺は検出されていない。

検出された長軸は7.05 m、短軸4.85 m、深さ0.76 mを測る。セクションE-E'付近は浅く、深さ0.21 mを測る。下層は極めて厚い堆積

SB5



第386図 第5号建物跡出土遺物

第105表 第5号建物跡出土遺物観察表（第386図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	磨石	長さ7.6	幅5.4	厚さ4.0	重さ73.3				角閃石安山 多孔質 自然面遺存 使用面4 線条痕あり	141-1

層で、上層は薄い。溝の幅は、第一面で検出された建物跡より狭い。

出土遺物は極めて少なく、陶磁器類は常陸系土師質土器の焰と在地産かわらけの破片のみである。重複構造の出土陶磁器も少ないが、新旧関係から遺構の時期は18世紀前半以前と推定される。

出土遺物は第386図に石製品を示した。

#### (2) 埋設桶（第387～392図）

埋設桶は6基検出された。位置・規模等の基本的な情報は第106表に示した。

埋設桶の分布は区画AA・AEに集中し、複数基が隣接して直線状に並ぶ傾向にある。第一面とは異なる分布状況を示す。第19号埋設桶は、第5号建物跡内に重複し、関連性が示唆される。

#### 第16号埋設桶（第387・390図）

F7-D・E 6グリッドの区画AEに位置し、第17号埋設桶より新しい。

桶底板・側板共に良好に遺存するが、埋設桶上半部は削平されている。側板には縦が4本巻きつき、底板は3本一組の合釘で留めている。内底面では陶磁器類や木材、瓦等が出土している。掘り方は桶より一回り以上大きな円形で、重複する第17号埋設桶より深い位置で設置されている。

陶磁器類の出土は少量だが、瓦が3350.0g出土している。非掲載遺物の瀬戸美濃系陶器柄軸灯明皿が最新期の陶磁器である。推定廃絶期は18世紀後半である。

第390図1～7に出土遺物を図示した。6・7は銅製の新寛永通寶で、7は掘り方出土である。  
第17号埋設桶（第387・390図）

F7-D 6グリッドの区画AEに位置し、第16号埋設桶より古い。

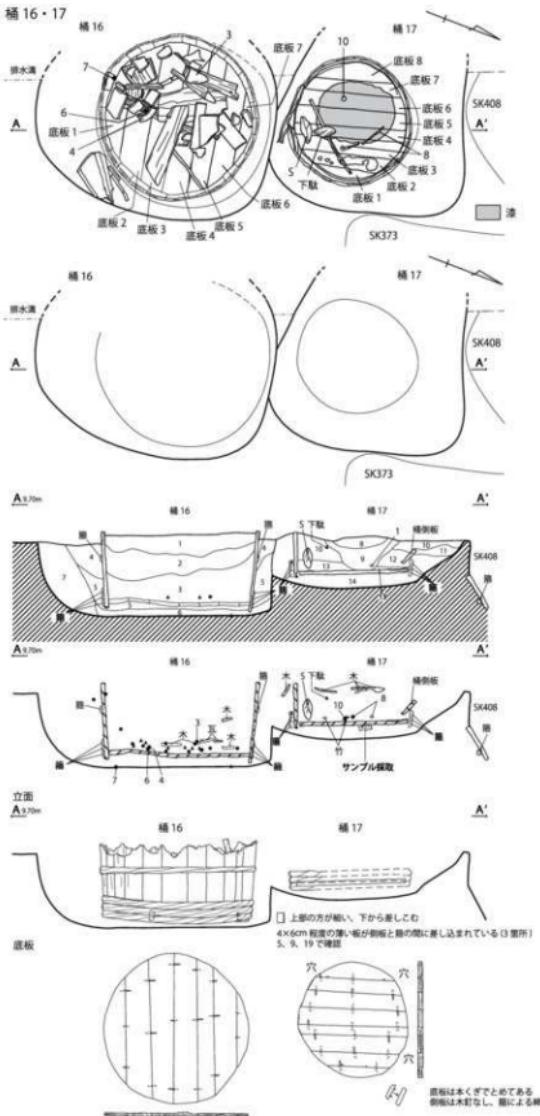
側板・縦の遺存状態は悪く、縦は最下部で三重に巻かれている。底板は良好に遺存しており、3

第106表 第二面埋設桶一覧表

単位:m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内法		掘り方縦	深さ	備考
					内径	深さ			
16	AE	F7-D・E6	0.96	0.48	0.90	0.40	1.46	0.50	桶17より新
17	AE	F7-D6	0.74	0.26	0.68	0.24	1.24	0.30	桶16より古
19	AF	F7-F8	0.60	0.14	0.58	0.11	0.84	0.14	SB5と重複
20	AA	F7-B5・6	0.82	0.65	0.76	0.40	1.10	0.40	SK487・506より新
21	AA	F7-B5	—	—	—	—	1.10	0.40	SK491・492・511より新
22	AA	F7-B5	—	—	—	—	0.74	0.16	SK491・492・506・511より新

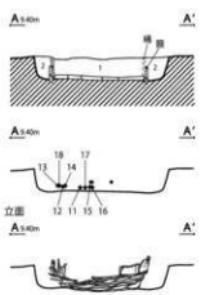
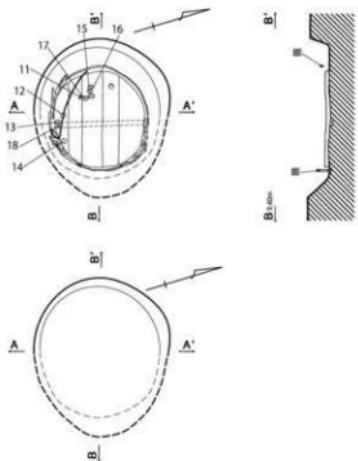
桶 16・17



第387図 埋設桶（1）

- 埋植 16
- 灰褐色土 シルト質 粘性強 しまりやや強  
炭化物粒子若干
  - 褐色土 砂質 粘性なし 固形含む
  - 褐色土 砂質 木片含む しまり弱
  - 灰褐色土 シルト質 粘性強 しまり強
  - 灰褐色土 シルト質 粘性強 しまり強  
シルトの漏込
  - 灰色土 砂質 灰褐色粘土ブロック(中)
  - 暗褐色土 砂質 粘性強 しまり強  
少量 埋没土
- 埋植 17
- 褐色土 砂質 粘性なし しまり弱 木片  
多量
  - 灰褐色土 シルト質 粘性強 しまり弱  
炭化物粒子微量
  - 黒褐色土 シルト質 粘性強 しまりやや強  
炭化物粒子 大木片・焼土多量
  - 黄色土 シルト質 粘性強 しまりやや弱  
炭化物粒子 大木片
  - 灰褐色土 シルト質 粘性強 しまり弱  
炭化物粒子含む
  - 灰色土 砂質 有刺植物含む しまり弱
  - 灰色土 砂質 粘性なし しまり弱
  - 灰色土 シルト質 粘性強 しまり強  
炭化物粒子微量

橋 19



埋設 19  
1 灰褐色土 粘土質 黏性強 しまり弱 木質・木片多量  
2 黄褐色 シルト質 黏性強 しまりやや弱  
木質若干 挖り方

- 土層・陶磁器
- 陶製品・瓦
- 木製品
- 石・瓦

0 1m

第 388 図 埋設桶 (2)

本一組の合釘で接合してある。内底面には漆が塗布してあり、水漏れを防ぐ役割があると推定される。掘り方は、桶より一回り以上大きな不整形で、第 16 号埋設桶より底面の位置が高い。

陶磁器類の出土は極めて少なく、土器類片が僅かに出土しているのみである。推定廃絶期は、遺構の重複関係から 18 世紀後半以降である。

第 390 図 8 ~ 10 に出土遺物を図示した。9 は古寛永、10 は新寛永通寶である。

#### 第 19 号埋設桶 (第 388・391 図)

F 7 - F 8 グリッドの区画 AF に位置し、第 5 号建物跡と重複する。

側板・蓋の遺存状態は悪く、下端部が僅かに検出されている。蓋は三重に巻かれている。底板は、各板材に直交するように、下面中央に角材状の細い木材で留めてある。掘り方は、桶より一回り以上大きい円形である。

陶磁器や瓦などの出土はなく、底面に銭貨が集中して出土している。他の埋設桶と比べると特異な出土状況である。推定廃絶期は不明である。

第 390 図 11 ~ 18 に出土遺物を図示した。12 は古寛永、13 ~ 17 は新寛永通寶である。13 は背文である。18 は銅製の雁首錢である。

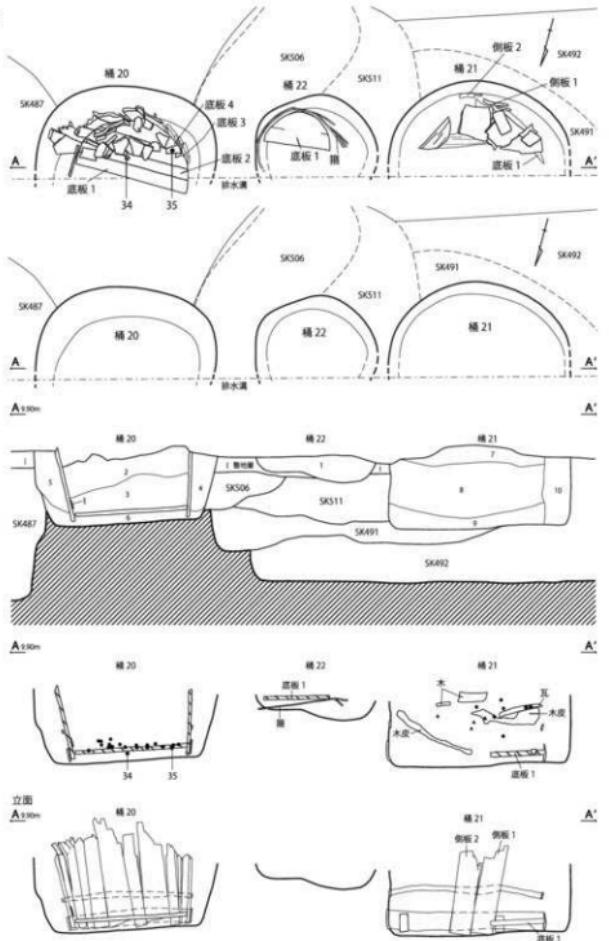
#### 第 20 号埋設桶 (第 389・391 図)

F 7 - B 5・6 グリッドの区画 AA に位置し、第 487・506 号土壙より新しい。第 9 地点 (『栗橋宿跡 VII』) との境に位置し、北半部は検出されていない。第 21・22 号埋設桶とは東西方向に一定間隔で直線状に並ぶ。第 21 号埋設桶とは、底面の深さがほぼ同じであり、それほど時期がない可能性が高い。また、第 22 号埋設桶とは底面の比高差が 0.25 m 以上あり、第 22 号埋設桶より先行するものと考えられる。

側板・底板の遺存状態は比較的良好だが、蓋は著しく剥落している。

陶磁器の出土量は少ないが、桶内から 4921.8 g もの瓦が出土している。桶内出土陶磁器の最新期は、肥前系磁器の端反形碗の蓋 (第 391 図 20) で、19 世紀前半以前の所産である。一方、桶掘り方出土陶磁器の最新期は、产地不詳陶器の蓋物

桶 20・21・22



埋設桶 20(2.3.4.5.6)・21(7.8.9.10)・22(1)

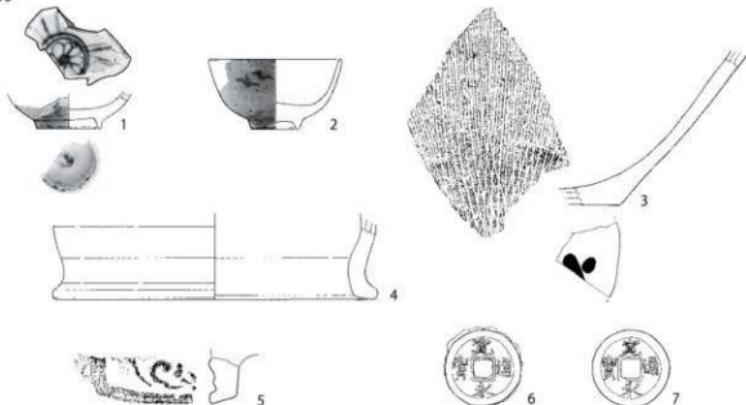
- 1 塗灰褐色土  
粘土質、褐色粒子多量、炭化物粒子少量、しまりあり、粘性弱  
2 灰色土  
粘土質、褐色、白色粒子少量、しまりあり、粘性弱  
3 塗褐色土  
粘土質、褐色、白色粒子少量、しまりあり、粘性弱  
4 塗褐色土  
粘土質、褐色粒子多量、炭化物粒子少量、しまりあり  
5 塗褐色土  
粘土質、褐色粒子多量、炭化物粒子少量、しまり強、粘性弱  
(細り方)

- 6 塗褐色土  
砂質、褐色、白色粒子多量、粘土ブロック多量、しまりあり  
粘性強 (細り方)  
7 塗褐色土  
粘土質、褐色、白色粒子少量、しまりあり、粘性弱  
8 黒褐色土  
粘土質、褐色、白色粒子少量、しまり弱、粘性弱  
瓦、木材(木皮)等の有機物多量  
9 黒褐色土  
砂質、褐色、白色粒子多量、しまりあり、粘性なし  
粘土質、褐色、白色粒子、炭化物粒子多量、しまり強  
粘性あり (細り方)

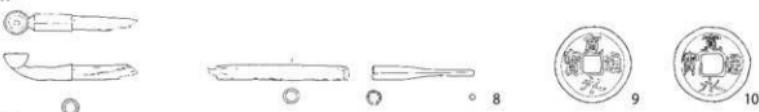


第389図 埋設桶(3)

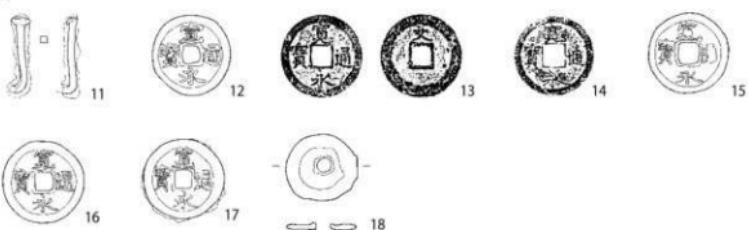
桶16



桶17



桶19



5 0 10cm 1~4・8・11 0 10cm 6・7・9・10・12~18 0 5cm

第390図 埋設桶出土遺物(1)

(第391図22)、急須(同24)等、19世紀後半の所産が多い。埋設桶内と掘り方の出土遺物の年代が逆転しているため、掘り方出土陶磁器は後世の混入の可能性が考えられる。したがって、設置時期は不明であるが、推定廃絶期は18世紀末～19世紀前半と考えられる。

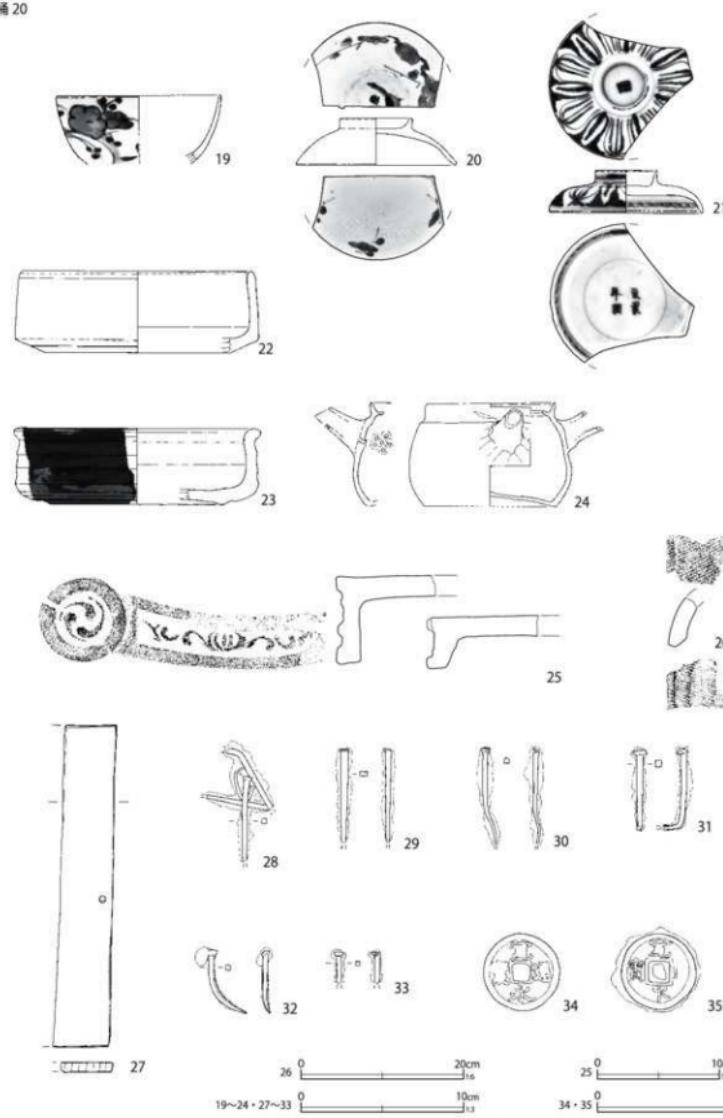
第391図19～35に出土遺物を図示した。20は桶内出土の肥前系磁器端反形碗の蓋である。

27は木製品の木札である。「武州栗橋 / 板屋忠七様 / 収出」の墨書きが書かれている。第476号土壌出土の木札に同様の人名が書かれている。

34は古寛永通寶、35は新寛永通寶である。底板直上から出土している。

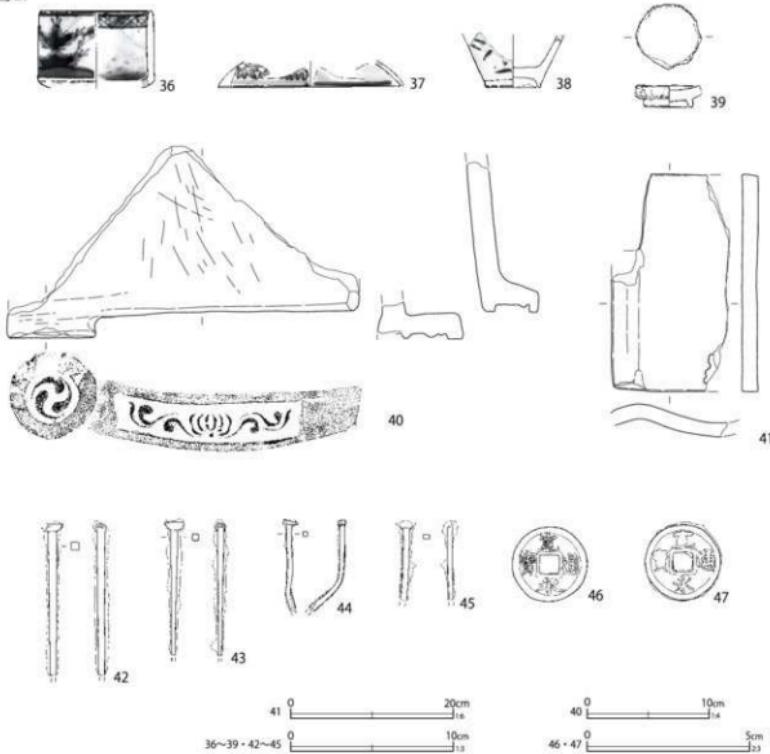
#### 第21号埋設桶(第389・392図)

F7-B5グリッドの区画AAに位置し、第491・492・511号土壌より新しい。第9地点との



第 391 図 埋設桶出土遺物 (2)

桶 21



第392図 埋設桶出土遺物（3）

境に位置し、北半部は検出されていない。先に述べたように、第20号埋設桶とは同時期の可能性が高い。底板・側版・檐の遺存状態は極めて悪く、部分的にしか残っていない。

陶磁器類の出土は少ないが、桶内から7860.0gの瓦が出土している。陶磁器類の最新期は、肥前系磁器廣東碗の蓋である。推定廃絶期は18世紀後葉である。

第392図36～47に出土遺物を図示した。36は肥前系磁器の筒形碗である。37は肥前系磁器廣東碗の蓋である。最新期の陶磁器である。

46は銅製、47は鉄製の新寛永通寶である。

#### 第22号埋設桶（第389図）

F7-B5グリッドの区画AAに位置し、第491・492・506・511号土壌より新しい。第9地点との境に位置し、北半部は検出されていない。側版は遺存しておらず、底板の一部と檐が遺存する。出土位置は円形の掘り方内のやや東側にずれている。

出土遺物は極めて少なく、瓦が僅かに出土している程度である。推定廃絶期は遺構の重複関係から18世紀後半以降である。

第107表 埋設桶出土遺物観察表（第390～392図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	—	[2.2]	(3.8)	—	5	良好	白	桶16	肥前系 内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	(8.0)	4.3	2.8	K	70	普通	灰白	桶16	肥前系 内外面施釉 外面染付	
3	陶器	擂鉢	—	[9.6]	—	DEIKM	5	良好	赤橙	桶16	嘲明石系 内面播目9条 / 単位 底部墨痕 No.2	86-6
4	瓦質土器	火鉢	—	[5.3]	(19.4)	CHIK	5	普通	浅黄	桶16	脚部 やや簡化焼成 被熱・煤付着 No.1	
5	瓦	軒桟瓦	長さ [2.5] 幅 [10.2] 高さ [4.0]			IK	—	普通	灰白	桶16	縫寸 No.3	124-19
6	銅製品	錢貨	径23.3 厚さ 1.3 重さ 3.6 径23.7 厚さ 1.3 重さ 2.9							桶16	No.12 寛永通寶（新）	
7	銅製品	錢貨	徑23.7 厚さ 1.3 重さ 2.9							桶16	No.13 横方 寛永通寶（新）	
8	銅製品	錠管	鍵首 長さ [4.2] 幅 [1.2] 重さ 1.5 小口徑 1.0 重さ 8.5 吸口 長さ [1.1] 小口徑 0.9 口付径 0.4 重さ 5.9							桶17	No.1 羅字残存 全長約 29 cm	133-1
9	銅製品	錢貨	徑23.3 厚さ 1.3 重さ 3.6							桶17	寛永通寶（古）	
10	銅製品	錢貨	徑23.3 厚さ 1.3 重さ 2.5							桶17	No.2 寛永通寶（新）	
11	鐵製品	釘	長さ [4.7] 幅 (0.4) 厚さ (0.4) 重さ 7.7							桶19	No.8	
12	銅製品	錢貨	徑24.5 厚さ 1.1 重さ 3.4							桶19	No.1 寛永通寶（古）	
13	銅製品	錢貨	徑25.7 厚さ 1.5 重さ 3.8							桶19	No.2 寛永通寶（新）背文	
14	銅製品	錢貨	徑24.7 厚さ 1.1 重さ 2.5							桶19	No.4 寛永通寶（新）	
15	銅製品	錢貨	徑24.7 厚さ 1.0 重さ 2.5							桶19	No.5 寛永通寶（新）	
16	銅製品	錢貨	徑25.0 厚さ 1.2 重さ 3.4							桶19	No.6 寛永通寶（新）	
17	銅製品	錢貨	徑24.8 厚さ 1.3 重さ 3.8							桶19	No.7 寛永通寶（新）	
18	銅製品	雁首錢	徑22.2 × 20.4 厚さ 1.8 重さ 4.0							桶19	No.3	
19	磁器	碗	(10.0) [4.2] — — 20 良好 白							桶20	肥前系 内外面施釉 外面染付 横方	
20	磁器	蓋	4.3 2.9 (9.7) — 35 良好 白							桶20	肥前系 内外面施釉・染付 横方	
21	磁器	蓋	3.6 2.6 9.4 — 60 良好 白							桶20	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 横方	81-1
22	陶器	蓋物	(14.0) 5.0 (11.2) IK 15 良好 灰白							桶20	内外面灰釉 外面下位重ね燒底 摺方	
23	陶器	香炉	(14.4) 4.7 (10.6) EIK 10 良好 灰白							桶20	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
24	陶器	急須	7.8 6.4 8.0 — 95 良好 黒灰 灰白							桶20	体部中位・把手附近 被熱・煤付着 粘土緻密・極硬質 横方	81-2
25	瓦	軒桟瓦	長さ [11.7] 幅 [24.2] 厚さ 1.8 横 7.2			IK	—	普通	灰白	桶20	江戸式 縫寸 左右三巴文	125-1
26	瓦	丸瓦	長さ [6.2] 幅 [3.5] 厚さ 2.0 高さ [5.6]			K	—	普通	灰白	桶20	縫寸	
27	木製品	木札	長さ 19.7 幅 [3.5] 厚さ 0.6			—	—	—	—	桶20	表面墨書き 孔 1 No.1	152-1
28	鐵製品	釘	鍼 [7.0] 横 [4.1] 幅 (0.3) 厚さ (0.3) 重さ 17.6							桶20	釘 4本付着	
29	鐵製品	釘	長さ [5.7] 幅 0.5 厚さ 0.3 重さ 5.3							桶20		
30	鐵製品	釘	長さ [5.9] 幅 (0.3) 厚さ (0.3) 重さ 5.1							桶20		
31	鐵製品	釘	長さ [5.0] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.3							桶20		
32	鐵製品	釘	長さ 3.9 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 4.0							桶20	石付着	
33	鐵製品	釘	長さ [2.0] 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 1.1							桶20		
34	銅製品	錢貨	徑23.4 厚さ 1.0 重さ 2.7							桶20	No.2 寛永通寶（古）	
35	鐵製品	錢貨	徑23.2 厚さ 1.5 重さ 4.1							桶20	No.6 寛永通寶（新）	
36	磁器	碗	(6.7) [4.7] — — 15 良好 白							桶21	肥前系 内外面施釉・染付	
37	磁器	蓋	— [1.6] (11.3) — 5 良好 白							桶21	肥前系 内外面施釉・染付	
38	磁器	碗	— [3.2] (3.3) — 10 良好 白							桶21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
39	陶器	碗	— [1.3] 2.9 K — 良好 灰白							桶21	京都信楽系 内外面施釉 円盤状製品転用	
40	瓦	軒桟瓦	長さ [15.5] 幅 28.9 厚さ [1.8] 高さ 7.1			ACIK	—	普通	灰白	桶21	右巻三巴文 縫寸 上面二次利用（線条底）被熱（剥落）粘土中心灰白	152-2
41	瓦	棟瓦	長さ 26.7 幅 [14.4] 厚さ 1.9 高さ 4.1			K	—	普通	灰白	桶21	縫寸 被熱（黒化）	
42	鐵製品	釘	長さ [9.4] 幅 (0.5) 厚さ (0.5) 重さ 16.9							桶21		
43	鐵製品	釘	長さ [8.2] 幅 (0.4) 厚さ (0.4) 重さ 9.3							桶21		
44	鐵製品	釘	長さ [5.6] 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 4.7							桶21		
45	鐵製品	釘	長さ [4.9] 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 4.8							桶21		
46	銅製品	錢貨	徑22.7 厚さ 1.1 重さ 2.7							桶21	寛永通寶（新）	
47	鐵製品	錢貨	徑23.3 厚さ 1.3 重さ 3.7							桶21	寛永通寶（新）	

### (3) 井戸跡 (第 393 ~ 411 図)

井戸跡は 8 基検出された。区画 AE・AF に集中しており、半数以上は区画 AE で検出されている。また、区画 AB で 1 基検出されている。

掘り方は円形に近い形を呈するものが多く、第 2 号井戸跡のように不整形を呈するものもみられる。また、断面形はラッパ状を呈するものが多く、第 2・7 号井戸跡は漏斗状である。掘り方の底面の多くは、壁面が崩落する危険性により、検出できていない。

井筒は複数段入れ子状に重ねた単純な構造が主体だが、第 8 号井戸跡は杭や板材、竹等組み合わせて井筒を囲う頑丈な作りである。第 108 表に位置・規模等の基本的な情報を示した。

#### 第 1 号井戸跡 (第 393・406 図)

F 7-D 7 グリッドの区画 AE に位置する。井筒 1 段目は上部構造の大部分が削平されており、箆と側板下部が遺存している。2 段目は側板が完全に遺存しており、長さ 0.75 m 程度の井筒を使用している。3 段目は上端部を僅かに検出している。掘り方の平面形はおむね円形で、断面はラッパ状を呈する。

出土遺物は少量で、瀬戸美濃系陶器の石皿、柿釉灯明皿が最新期の陶磁器である。被熱した陶磁器が一定量含まれており、そのうち 1 点は第 497 号土壌出土破片と接合関係にある。第三面第 497 号土壌を覆う火災層の一部を壊して構築されていて、被熱陶磁器は火災層からの混入である。

第 108 表 第二面井戸跡一覧表

単位: m

番号	区画	グリッド	井筒			掘り方		備考
			外径	内径	深さ	径	深さ	
1	AE	F7-D7	0.62	0.61	0.98	1.77	0.98	2 段目径 0.62 × 0.60 3 段目径 0.64 × 0.61
2	AE	F7-E6	0.75	0.70	0.95	3.60	1.50	SK428・429 SD16・17 より新
3	AE	F7-E7	0.65	0.60	0.90	2.00	0.90	SK391 より古 SK471 と重複
4	AE	F7-D8	—	—	—	0.95	0.72	SK437・438 と重複
5	AF	F7-E8	0.59	0.56	0.92	2.02	1.52	SK430 より古
6	AB	F7-C6	0.58	—	—	1.5	0.92	SD13, SK351・355 と重複 SK365 より古 SK458 より新
7	AE	F7-E6	0.76	0.72	0.94	2.3	1.68	SK387 より古
8	AF	F7-F・G7	0.34	0.45	1.37	3.02	1.74	2 段目径 0.67 × 0.64

推定廃絶期は 18 世紀後葉である。

第 406 図 1 ~ 11 に出土遺物を図示した。1 は内面に箆文がみられる。肥前系磁器の皿である。強く被熱している。2 は肥前系磁器のそり皿である。被熱しており、同文の被熱した製品が第 497 号土壌火災層等でみられる。3 は肥前系磁器の猪口である。被熱はみられないが、同文製品が第 497 号火災層等で出土している。4 は瀬戸美濃系陶器の丸碗形片口鉢である。灰釉が施釉され、外面上に重ね焼き痕がみられる。強く被熱している。

6 は漆塗蓋である。内面赤漆、外面上黒漆塗りである。つまみ径は 5.4 cm とやや大きく、つまみがやや外に開く。

#### 第 2 号井戸跡 (第 394・395・406・407 図)

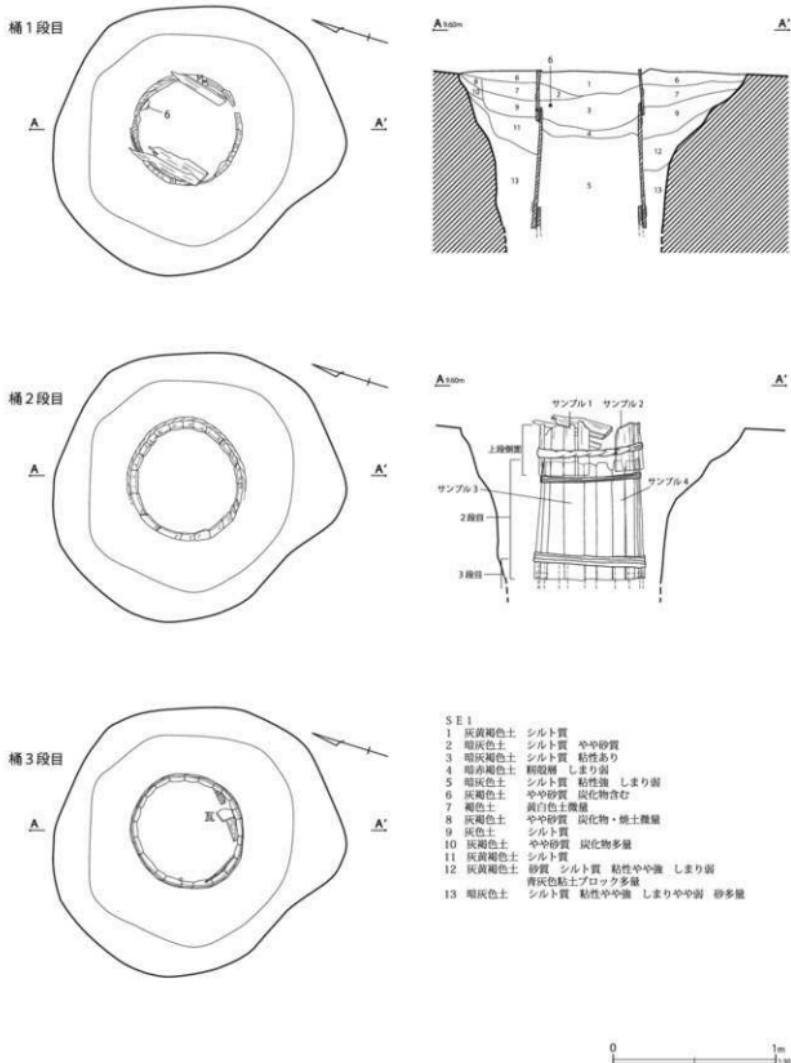
F 7-E 6 グリッドの区画 AE に位置する。第 16・17 号溝跡、第 428・429 号土壌より新しい。

井筒は 1 個体分のみ検出されており、上段部は抜き取られていると考えられる。掘り方がすばまる位置で井筒が検出されていることから、最下段の可能性が高い。井筒上部には箆が巻きついていた痕跡が 2箇所みられる。

平面形は不整形で、断面は漏斗状を呈する。底面は検出されていない。

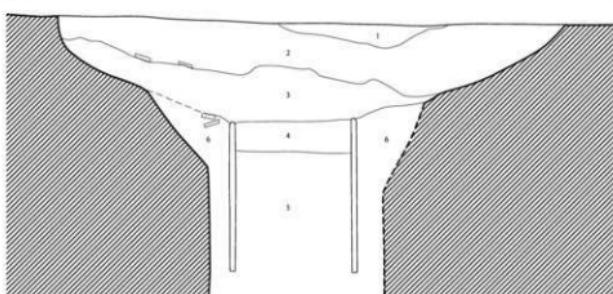
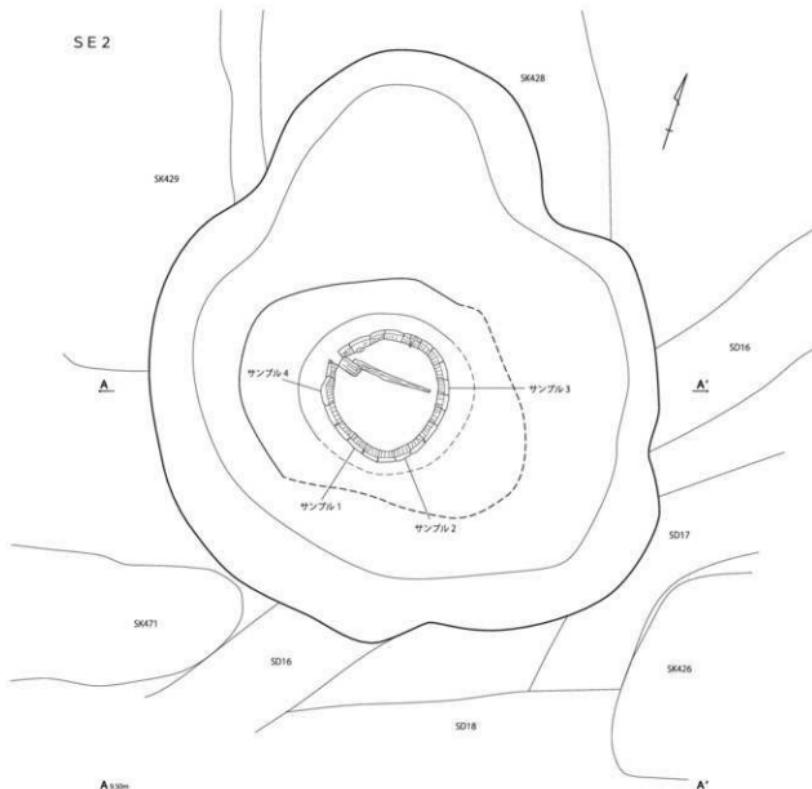
出土遺物は一定量出土しており、瀬戸美濃系磁器の端反形碗 2 個体が最新期である。推定廃絶期は 19 世紀前葉である。

第 406 図 12 ~ 19、第 407 図 20 ~ 31 に出土遺物を図示した。第 406 図 14・15 は瀬戸美濃系



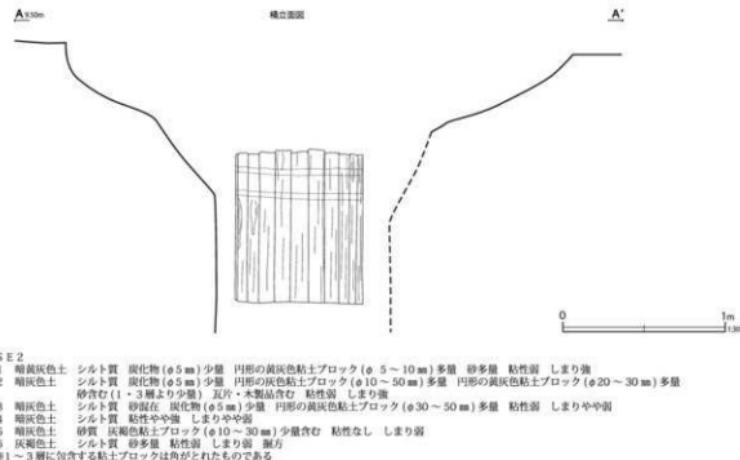
第393図 井戸跡（1）

SE 2



0 1m 1:50

第394図 井戸跡(2)



第395図 井戸跡（3）

磁器の端反形碗で、最新期の陶磁器である。20は産地不詳陶器の鉄釉土瓶である。胎土は硬質で、注口部は「S」字状である。

#### 第3号井戸跡（第396・407図）

F 7-E 7 グリッドの区画 AE に位置し、第391号土壌より古く、第471号土壌と重複する。

井筒は1個体分のみ検出されており、上段部は抜き取られていると考えられる。井筒の遺存状態は良好で、上部に2箇所、下部に1箇所の箍がみられる。

掘り方は不整形を呈し、断面はラッパ状である。底面は検出できていない。

遺物は少量出土しており、京都信楽系陶器小杉碗が最新期である。第3号井戸跡より新しい第391号土壌は、小丸碗を最新の遺物とする18世紀後葉頃の遺構である。そのため、小杉碗は混入の可能性も疑われる。推定廃絶期は18世紀中葉である。第407図32・33に出土遺物を図示した。

#### 第4号井戸跡（第397・407図）

F 7-D 8 グリッドの区画 AE に位置し、第

437・438号土壌と重複する。井筒は完全に抜き取られており、円形の掘り方のみ遺存している。掘り方の径は他より小さく、断面はラッパ状を呈する。底面は検出できていない。

出土遺物は少ない。非掲載遺物に京都信楽系陶器の小杉碗がみられることから、推定廃絶期は18世紀後半と推定される。

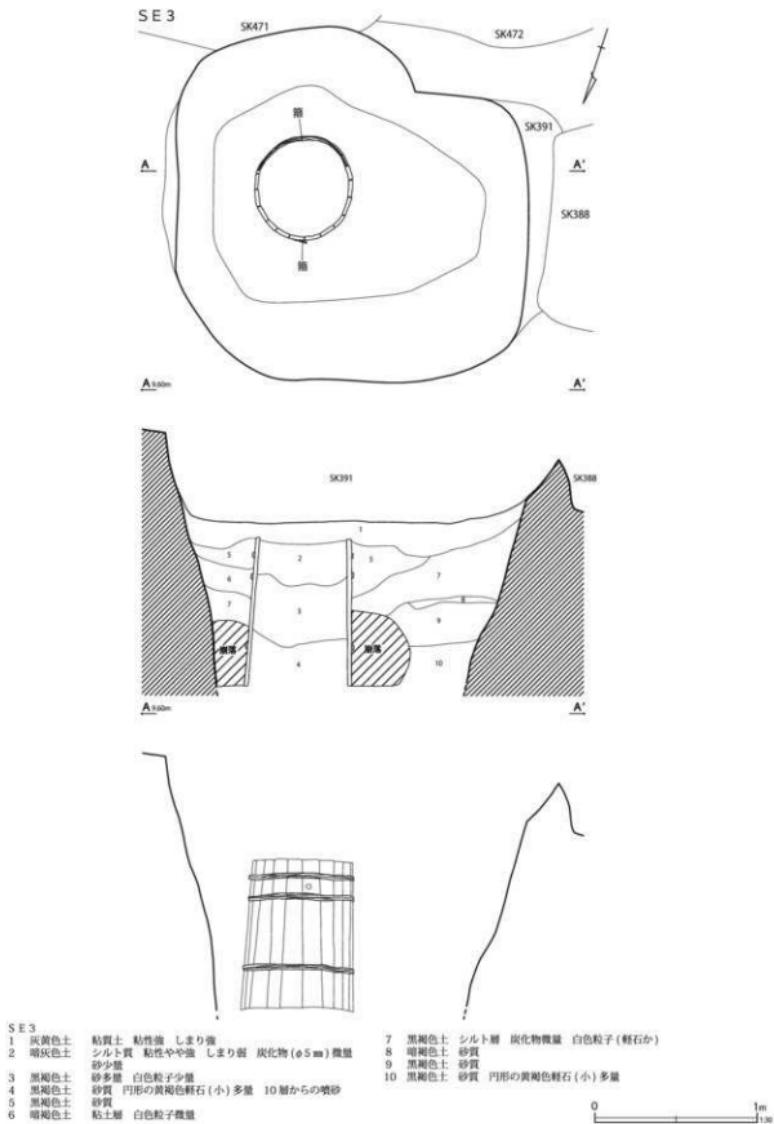
第407図34～37に出土遺物を図示した。34は瀬戸美濃系陶器の水甕である。35は漆桶蓋である。内外面黒漆塗りである。外面の口縁部近くに棟を持つ。

#### 第5号井戸跡（第398・408～410図）

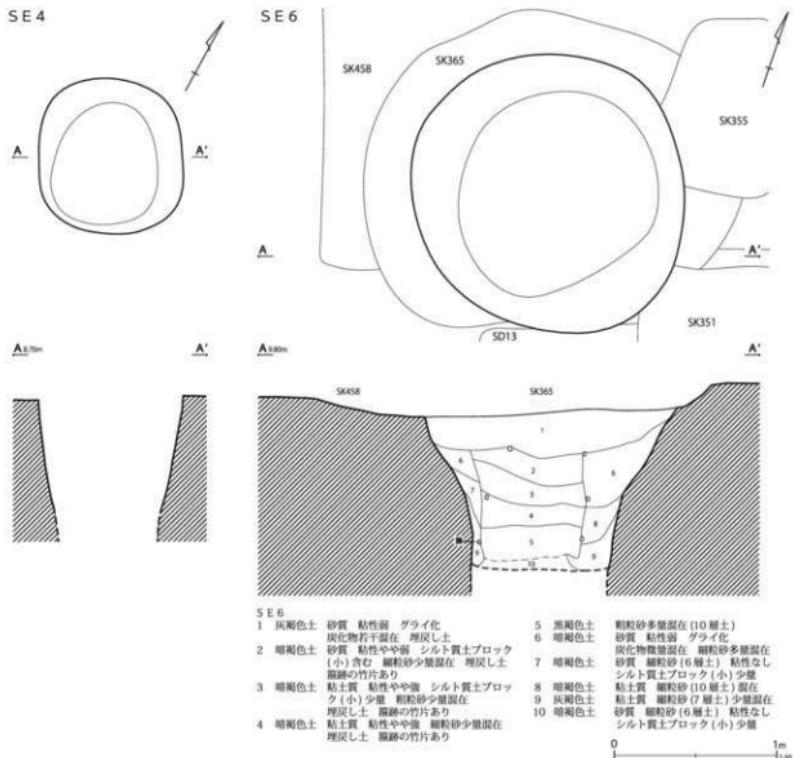
F 7-E 8 グリッドの区画 AF に位置し、第430号土壌より古い。

井筒は1個体分のみ遺存しており、上段は抜き取られていると考えられる。箍は井筒上位に2箇所、下位に1箇所遺存している。掘り方は円形で、断面は漏斗状を呈する。掘り方の底面は検出できていない。

出土遺物は一定量出土しており、陶磁器は第一



第396図 井戸跡(4)



#### 第397図

面で検出された第1号建物跡の基礎北辺出土遺物と接合関係にある。最新期の陶磁器は、瀬戸美濃系磁器の端反形碗（第408図39）である。推定廃絶期は19世紀前葉である。

第408図42は瀬戸美濃系磁器の皿である。赤・金・緑で上絵付を施す色絵金襴手である。内面は型押で菊花文が施され、輪花に整形される。

第409図50は木製の不明品で、これまでの栗橋宿跡の報告でも数点出土している製品である。右半分が欠損している。51は桶の側板である。焼印で「△」の文字が押されている。

第410図56～71は錢貨である。17枚出土し

#### 井戸跡（5）

ており、井戸廃絶時に投げ込まれた可能性がある。

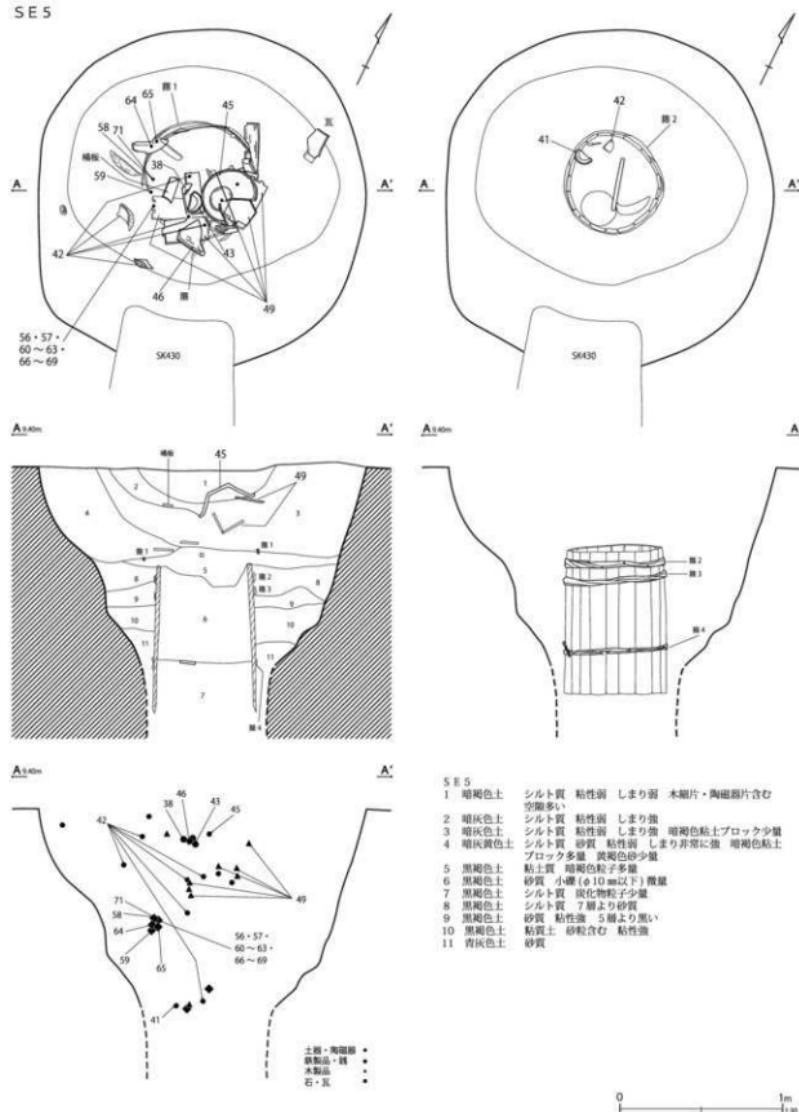
#### 第6号井戸跡（第397・410図）

F 7-C 6グリッドの区画ABに位置する。第365号土壤より古く、第458号土壤より新しい。さらに、第13号溝跡、第351・355土壤と重複する。

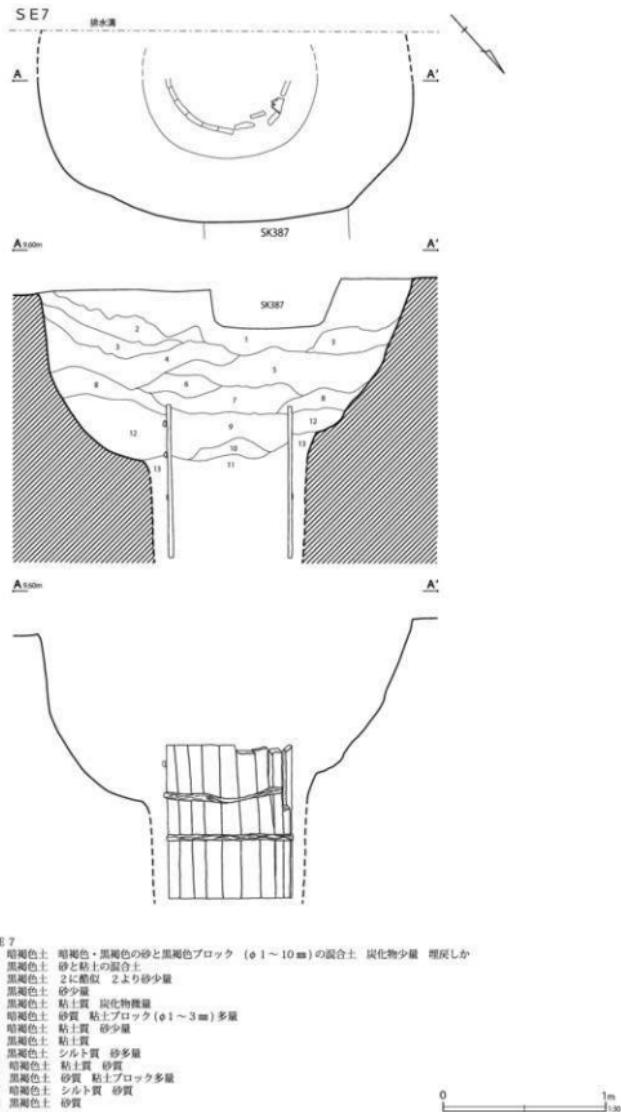
井筒は検出されていないが、瓶のみが遺存している。第2～5層は井筒を抜き取った痕跡である。掘り方は円形で、断面はラッパ状を呈する。底面は検出できていない。

出土遺物は極めて少なく、18世紀の陶磁器が出土している。遺構の重複関係から推定廃絶期は

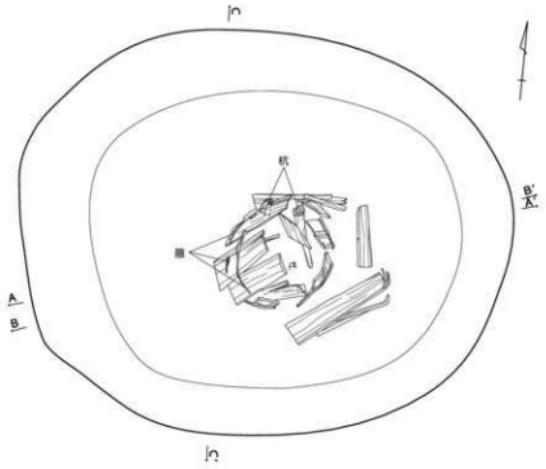
SE 5



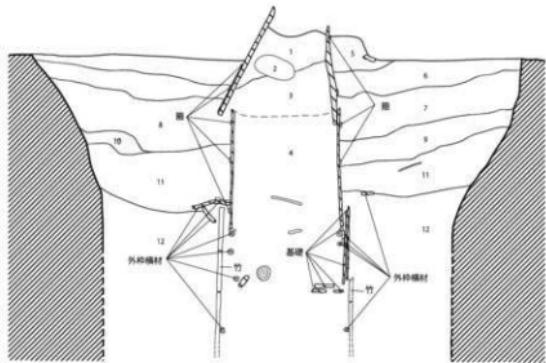
第398図 井戸跡 (6)



第399図 井戸跡 (7)



A axis A' axis

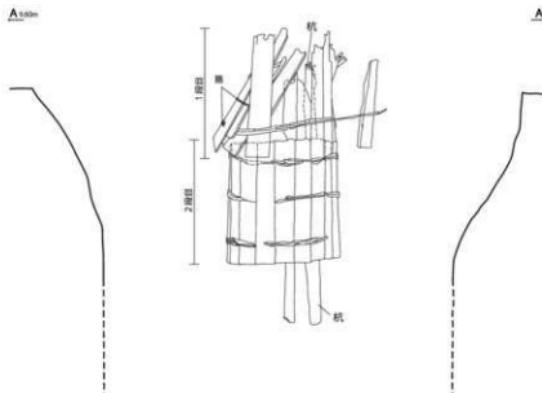


SE 8

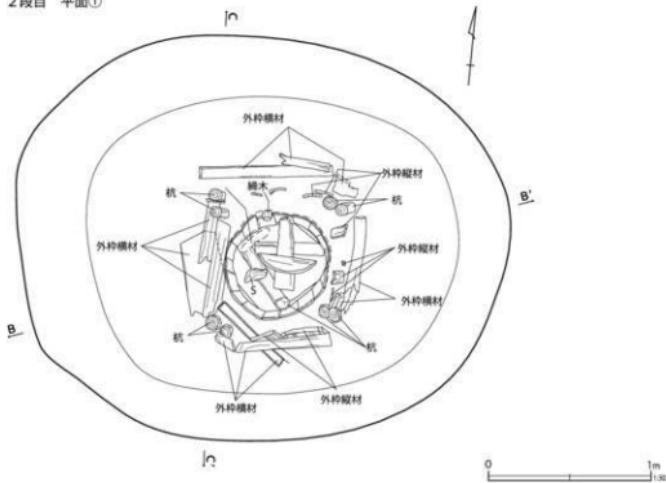
- 1 粘土質色土 細粒砂少量混在
- 2 黒褐色土 硫化物少量 ブロック状の細粒砂微量
- 3 黒褐色土 シルト質土 硫化物含む 黏性強
- 4 灰褐色土 黏土質 ベースに細粒大量混在 水分非常に多量
- 5 灰褐色土 地山ブロック(小) 硫化物含む 壊土難崩
- 6 灰褐色土 地山ブロック(小) 硫化物含む 白色粒子微量 黏性やや強
- 7 灰褐色土 地山ブロック(小) 少量 硫化物含む 白色粒子微量 黏性あり
- 8 粘土質 黃褐色土 シルト質 硫化物微量 黏性強
- 9 黒褐色土 シルト質 細粒砂微量
- 10 黑褐色土 白色粒子微量 黏性強
- 11 黑褐色土 黏土質 硫化物微量 色調やや明るい
- 12 黑褐色土 黏土質 細粒砂微量 角礫少量

0 1m

第400図 井戸跡(8)

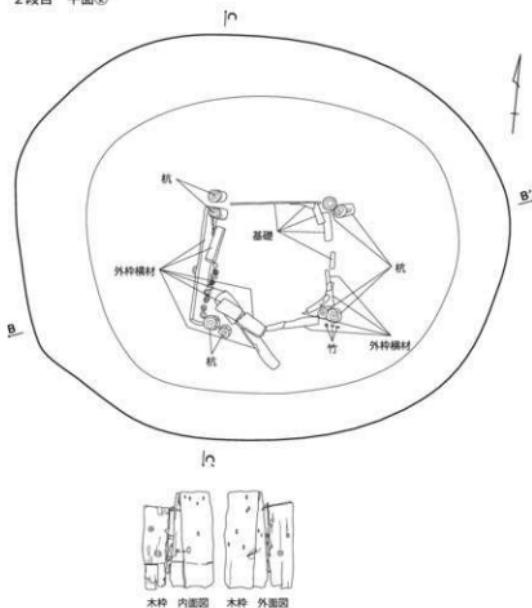


2段目 平面①

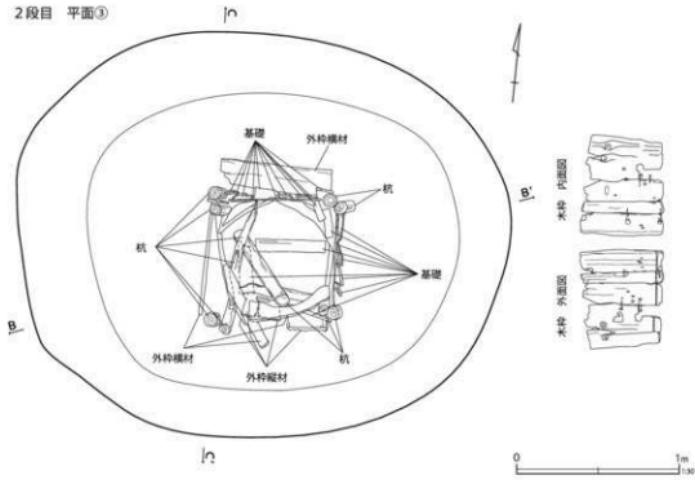


第401図 井戸跡 (9)

2段目 平面②



2段目 平面③

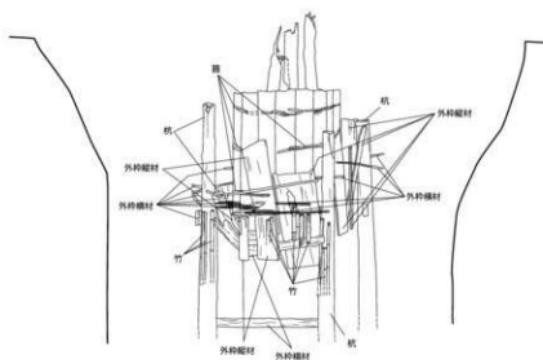


第402図 井戸跡 (10)

2段目 立面図①

B 1.60m

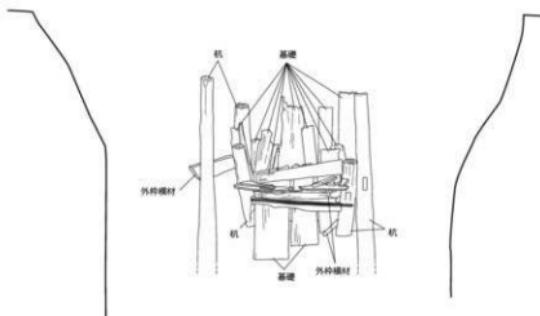
B'



木棟 北側内面図

B 1.60m

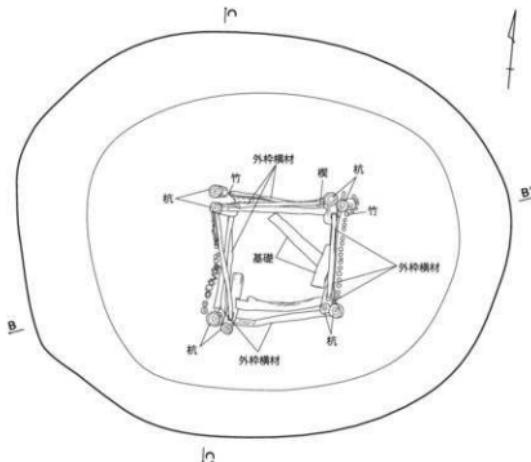
B'



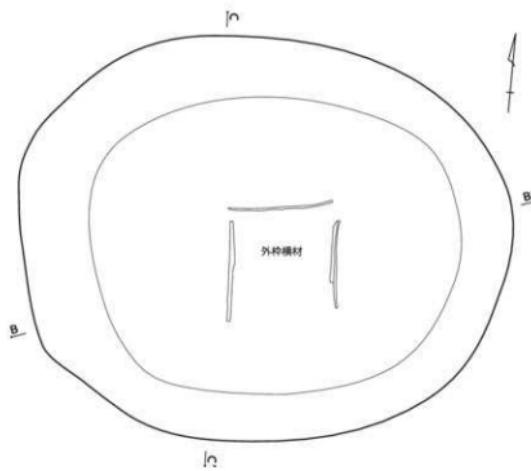
第403図 井戸跡 (11)

0 1m 1.60

平面④ 木枠

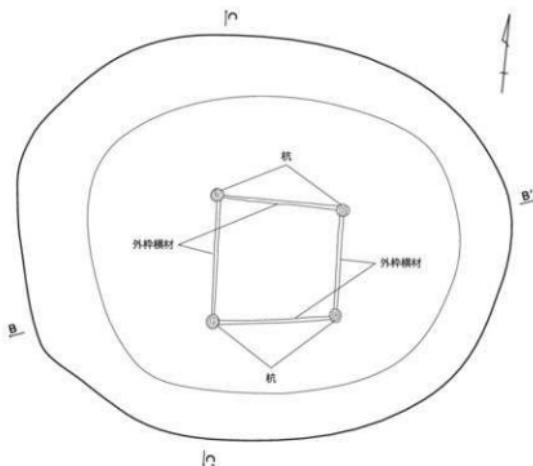


平面④ 木枠-2

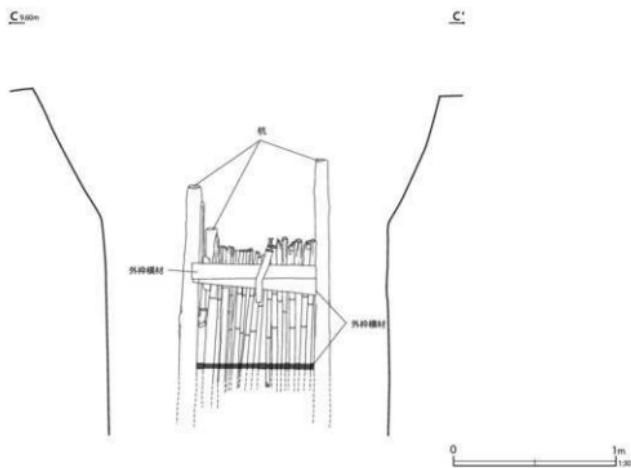


第404図 井戸跡 (12)

木枠最下面

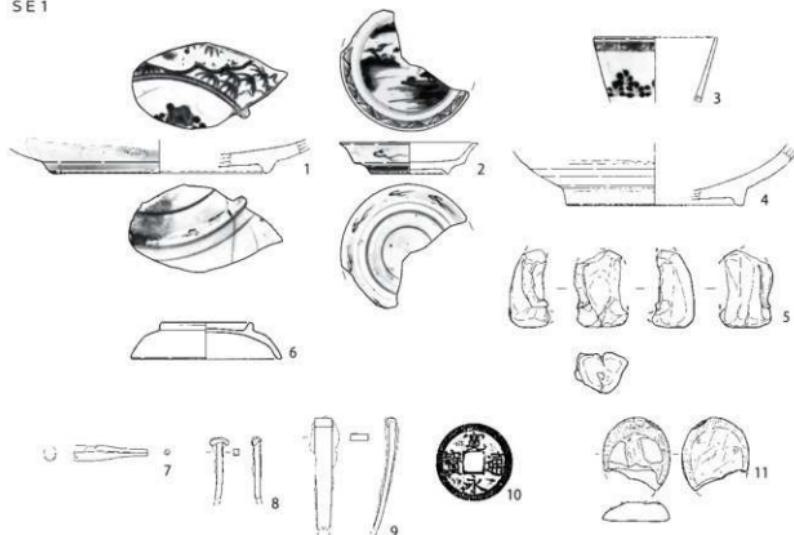


西侧立面図

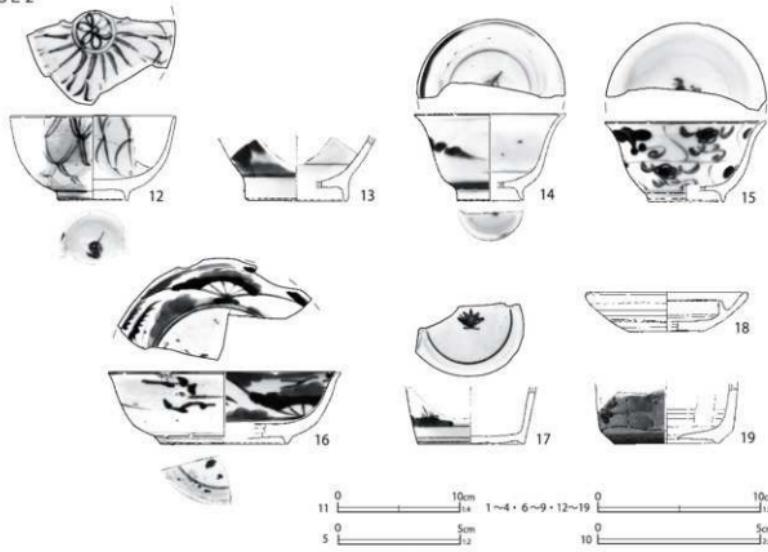


第405図 井戸跡 (13)

## SE 1

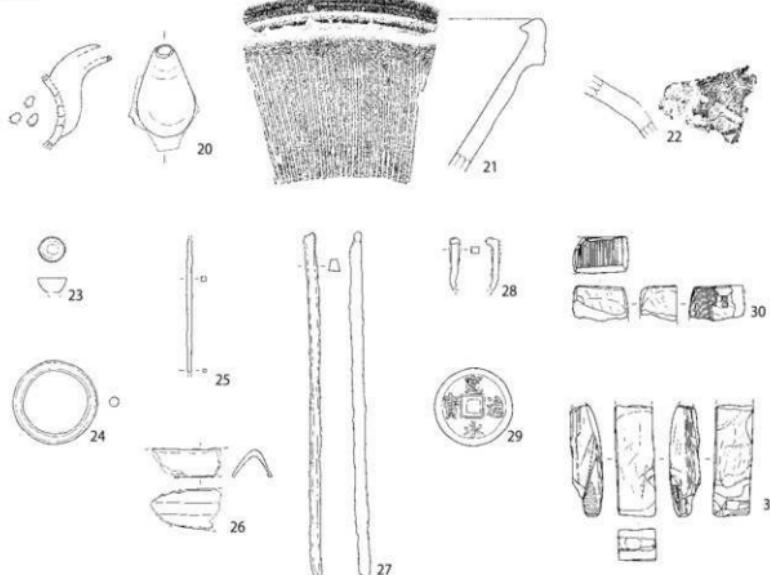


## SE 2



第406図 井戸跡出土遺物（1）

## SE 2



## SE 3



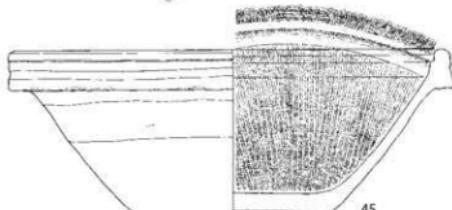
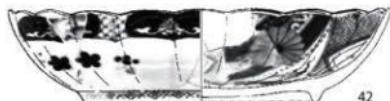
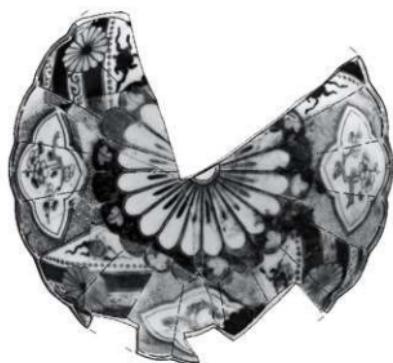
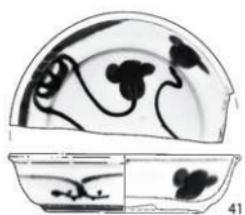
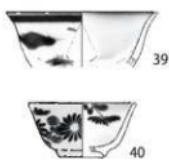
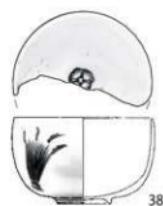
## SE 4



30・31・33・34 0 10cm 35・36・37 0 10cm 29 0 5cm

第 407 図 井戸跡出土遺物 (2)

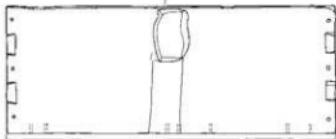
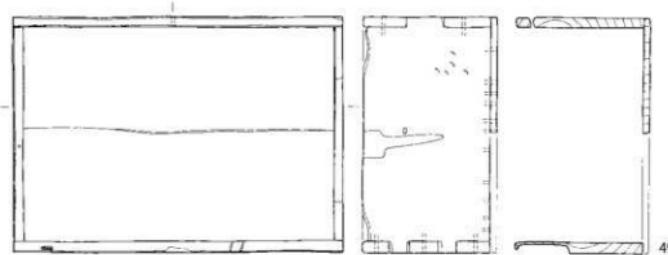
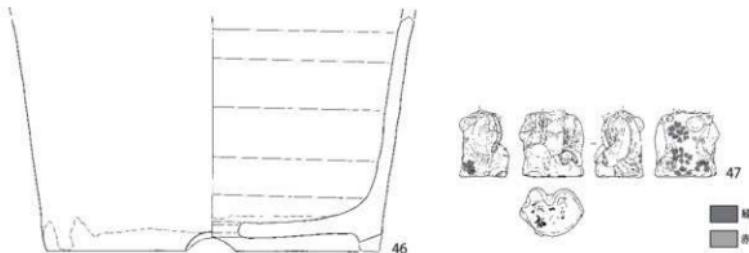
SES



42・45 0 10cm 38~41・43・44 0 10cm

第408図 井戸跡出土遺物（3）

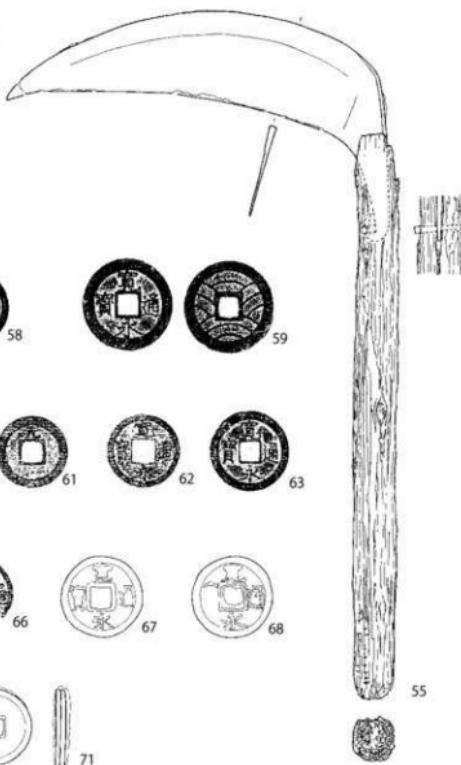
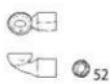
S E 5



49 0 20cm 46 0 10cm 47・48・50・51 0 10cm

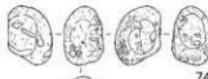
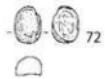
第409図 井戸跡出土遺物 (4)

## SE 5



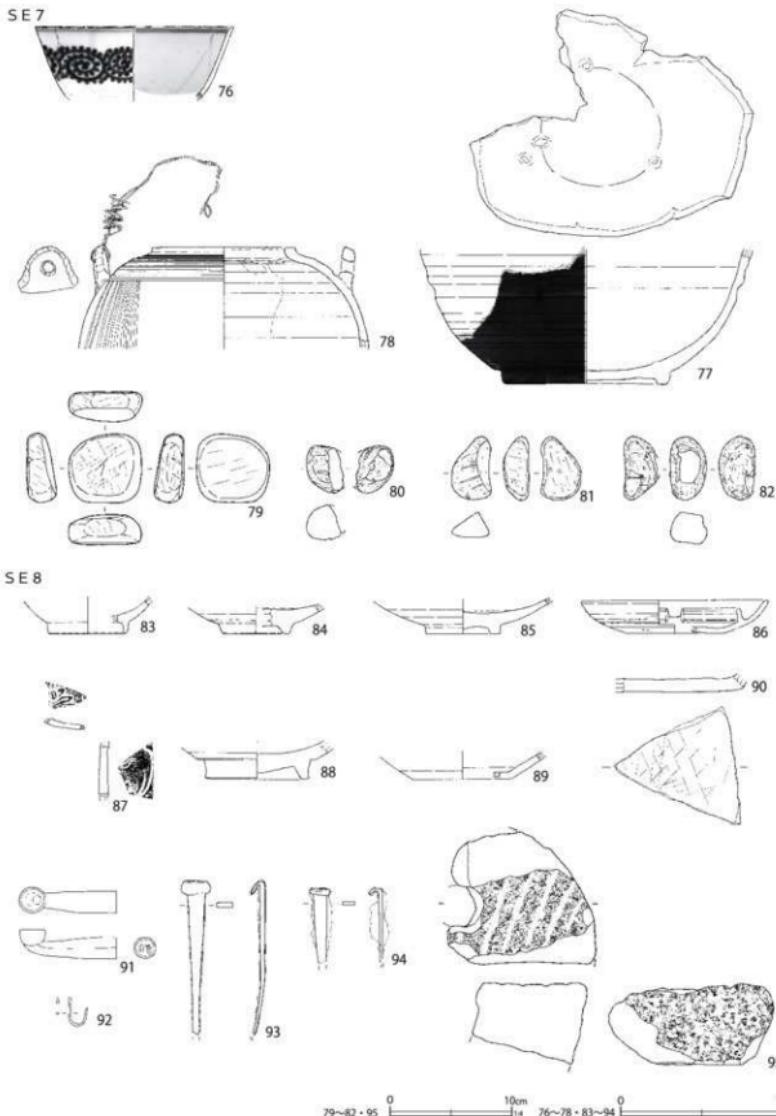
55

## SE 6



56~71 0 5cm 72~74 0 10cm 52~55 + 75 0 10cm

第410図 井戸跡出土遺物（5）



第411図 井戸跡出土遺物 (6)

第109表 井戸跡出土遺物観察表（第406～411図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	団版
1	磁器	皿	—	[2.0]	(13.0)	—	5	良好	白	SE1	肥前系 内外面施釉・染付 被熱(強)	
2	磁器	皿	(8.3)	1.9	4.7	—	50	良好	白	SE1	肥前系 内外面施釉・染付 被熱	81-3
3	磁器	猪口	(7.4)	[4.0]	—	—	20	良好	白	SE1	肥前系 内外面施釉 外面染付	
4	陶器	片口鉢	—	[3.8]	(10.8)	IK	10	普通	灰白	SE1	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面重燒痕 被熱(強)	
5	土製品	人形	礎 1.7 横 [2.2] 高さ [3.2] 重量 8.4	—	AH	—	良好	にぶい緑	SE1	手捻り成形 中窓		
6	木製品	漆桶蓋	つまみ縁 5.4 口径 9.0 高さ 2.2	—	—	—	—	—	SE1	横木取り 内面赤漆 外面黒漆 №1		
7	銅製品	煙管	長さ [4.5]	小口径 (0.7) × (0.5)	口径付径 0.3	重さ 2.4	—	—	SE1	吸口 小口欠損		
8	鉄製品	釘	長さ [3.8]	幅 0.35	厚さ 0.35	重さ 3.8	—	—	SE1			
9	鉄製品	釘	長さ [6.9]	幅 1.1	厚さ 0.4	重さ 14.2	—	—	SE1			
10	銅製品	錢背	径 23.9	厚さ 1.1	重さ 2.9	—	—	—	SE1	寛永通寶(古)		
11	石製品	磨石	長さ [6.0]	幅 5.5	厚さ 1.5	重さ 25.9	—	—	SE1	角閃石安山岩 多孔質 自然遺存 使用面 2 線条痕あり 被熱(剥落)	141-1	
12	磁器	碗	(10.0)	5.2	4.2	K	20	良好	白	SE2	肥前系 内外面施釉・染付	
13	磁器	碗	—	[4.0]	(6.0)	—	5	良好	白	SE2	肥前系 内外面施釉・染付	
14	磁器	碗	(9.2)	5.3	(4.0)	—	45	良好	白	SE2	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
15	磁器	碗	(9.8)	4.9	(4.6)	—	40	良好	白	SE2	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	81-4
16	磁器	皿	(14.1)	4.5	(7.7)	K	25	良好	白	SE2	肥前系 内外面施釉・染付	
17	磁器	猪口	—	[3.8]	6.4	—	20	良好	白	SE2	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目圓高台	
18	陶器	灯明皿	(9.8)	2.4	(4.6)	IK	40	良好	褐灰	SE2	瀬戸美濃系 内外面補糊 外面・底部輪拭き取り 輪状重燒痕	
19	陶器	香炉	—	[3.7]	(6.4)	EHK	20	普通	にじ・黄	SE2	瀬戸美濃系 外面施釉・上給付(熱変)	
20	陶器	土瓶	—	[6.5]	—	E	5	良好	にじ・黄	SE2	内外面鉄輪 脱土硬質	
21	陶器	擂鉢	—	[9.4]	—	EHK	5	良好	明赤褐	SE2	昭明石系 内面擂目 9 条 / 単位 外面ケズリ	81-5
22	陶器	甕	—	[3.9]	—	DEHKM	5	普通	灰黄褐	SE2	常滑の型式 14～15 c. 脊部外面スタンプ文	
23	銅製品	煙管	径 1.6 × 1.5 重さ 1.6	—	—	—	—	—	SE2	雁首 火皿		
24	鉄製品	環金具	径 5.2 × 5.1 重さ 0.6 重さ 28.8	—	—	—	—	—	SE2		134-1	
25	鉄製品	錐先カ	長さ [8.2]	幅 0.3	厚さ 0.3	重さ 4.0	—	—	SE2			
26	鉄製品	不明	縦 1.8 横 [4.2]	厚さ 0.4	重さ 11.0	—	—	—	SE2			
27	鉄製品	不明	長さ 21.7 幅 0.7	厚さ 0.7	重さ 44.3	—	—	—	SE2		134-1	
28	鉄製品	釘	長さ [3.2]	幅 0.5	厚さ 0.4	重さ 2.5	—	—	SE2			
29	鉄製品	錢背	径 24.0 厚さ 1.7	重さ 3.4	—	—	—	—	SE2	寛永通寶(新)		
30	石製品	砥石	長さ [2.9]	幅 [4.6]	厚さ [3.0]	重さ 63.3	—	—	SE2	流紋岩 側・裏面ノコギリ痕 砥面 2		
31	石製品	砥石	長さ 9.1 幅 3.1	厚さ 2.4	重さ 66.2	—	—	—	SE2	流紋岩 側面ノコギリ痕 裏面幅広工具痕(破損後再加工) 削痕あり 砥面 4		
32	鉄製品	釘	長さ [5.6]	幅 0.4	厚さ 0.4	重さ 5.0	—	—	SE3			
33	石製品	砥石	長さ [9.4]	幅 3.2	厚さ [1.4]	重さ 61.1	—	—	SE3	ホルンフェルス 側面ノコギリ痕 砥面 3		
34	陶器	水甕	—	[4.3]	(16.8)	EHK	10	良好	灰白	SE4	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面緑釉 流し掛け 内面目跡 2 遺存	
35	木製品	漆桶蓋	つまみ縁 6.3 口径 13.9 高さ 2.6	—	—	—	—	—	SE4	横木取り 内外面黒漆 横木取り		
36	銅製品	煙管	長さ [1.7]	小口径 1.0 × 1.1	重さ 5.4	—	—	—	SE4	吸口 口付欠損 置羅存		
37	銅製品	煙管	長さ [8.1]	小口径 1.1 × 1.2	口径付径 0.5	重さ 9.4	—	—	SE4	吸口 口付欠損 置羅存		
38	磁器	碗	(8.4)	5.3	(3.3)	—	50	良好	白	SE5	肥前系 内外面施釉・染付	81-6
39	磁器	碗	(9.3)	[3.4]	—	—	5	良好	白	SE5	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
40	磁器	壺	(6.5)	3.4	(2.8)	—	40	良好	白	SE5	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 蛇ノ目圓高台	
41	磁器	皿	(13.9)	3.6	9.5	—	50	良好	白	SE5	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目圓高台 高台 内輪状に砂粒付着 №30	
42	磁器	皿	23.5	5.8	14.2	—	60	良好	白	SE5	瀬戸美濃系 内外面施釉・色繪(赤・金・緑) 部 分的に赤ら黒ら 高台内ハリ支脚 3 遺存	81-7
43	磁器	皿	(14.0)	3.8	(8.8)	—	40	良好	白	SE5	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目圓高台 高台 内輪状に砂粒付着 №3	
44	陶器	碗	(9.6)	[4.7]	—	DEHKM	15	良好	灰白	SE5	瀬戸美濃系 内面・外面上位鉄輪 外面下位施釉・ トビガシナ状押形文 №5・8・11・12・22・29	
45	陶器	擂鉢	34.9	13.5	15.6	DEHKM	75	良好	赤	SE5	昭明石系 内面擂目 9 条 / 単位 №9	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
46	陶器	楕木鉢	—	[14.5]	20.3	EI	20	良好	灰白	SE5	瀬戸美濃系 外面鉄輪 内面漆繪・釉拭き取り 高台抉り 3遺存 高台内墨書き №1 SK433と接合	86-7
47	陶器	水滴	縦4.5 横5.9 高[6.1]			K	90	良好	灰白	SE5	京都信楽系 前後合二枚型成形 外面施釉・上繪付(赤・緑) 下面露胎	
48	木製品	容器	長さ [3.0] 幅 [22.1] 厚さ 0.2					—	SE5	桜目 外黒漆 地下赤漆 金で文様		
49	木製品	箱	長さ 29.3 幅 41.3 高さ 16.7					—	SE5	板目 表面溝縫の跡が表から底板・反対の側板に2本孔 52一部炭化 №14~17・19		
50	木製品	不明品	長さ 8.2 幅 [4.3] 厚さ 0.5					—	SE5	板目 孔4		
51	木製品	桶	長さ [14.8] 幅 [6.2] 厚さ 1.1					—	SE5	板目 側板 表面焼印「△」		
52	銅製品	煙管	径3.0 大口径1.5×1.4 小口径1.1 重さ 4.6						SE5	第9層 輝賞 内部羅字残存	133-1	
53	銅製品	煙管	長さ 7.8 小口径 1.0 口付径 0.5 重さ 10.3						SE5	№3 吸口	133-1	
54	銅製品	紙	長さ 1.6 幅 0.8 重さ 0.2						SE5			
55	鉄製品	鍤	長さ 41.8 刃長 [22.0] 刃幅 5.6 背幅 0.4 重さ 168.7						SE5	№28 木柄付	134-1	
56	銅製品	錢貨	径24.8 厚さ 1.0 重さ 3.0						SE5	№23 寛永通寶 (古)		
57	銅製品	錢貨	径23.4 厚さ 1.2 重さ 3.1						SE5	№23 寛永通寶 (古)		
58	銅製品	錢貨	径22.6 厚さ 1.2 重さ 2.4						SE5	№25 寛永通寶 (古)	136-5	
59	銅製品	錢貨	径28.2 厚さ 1.3 重さ 5.0						SE5	№24 寛永通寶 (新) 11波	136-3	
60	銅製品	錢貨	径25.2 厚さ 1.3 重さ 3.8						SE5	№23 寛永通寶 (新) 背文		
61	銅製品	錢貨	径22.5 厚さ 0.8 重さ 1.8						SE5	№23 寛永通寶 (新) 背元		
62	銅製品	錢貨	径23.1 厚さ 1.2 重さ 2.8						SE5	№23 寛永通寶 (新)		
63	銅製品	錢貨	径24.6 厚さ 1.5 重さ 3.7						SE5	№23 寛永通寶 (新)		
64	銅製品	錢貨	径23.2 厚さ 1.1 重さ 2.4						SE5	№26 寛永通寶 (新)	136-6	
65	銅製品	錢貨	径24.5 厚さ 1.0 重さ 2.6						SE5	№27 寛永通寶 (新)	136-7	
66	銅製品	錢貨	径23.2 厚さ 1.1 重さ 2.0						SE5	№23 寛永通寶 (新)		
67	鉄製品	錢貨	径24.7 厚さ 1.3 重さ 1.8						SE5	№23 寛永通寶 (新)		
68	鉄製品	錢貨	径24.7 厚さ 1.5 重さ 2.5						SE5	№23 寛永通寶 (新)		
69	鉄製品	錢貨	径23.5 厚さ 1.3 重さ 2.5						SE5	№23 寛永通寶 (新)		
70	鉄製品	錢貨	径24.6 厚さ 1.1 重さ 0.9						SE5	寛永通寶 (新)		
71	鉄製品	錢貨	径23.7 厚さ 2.8 重さ 4.3						SE5	№25 不明 2枚付着		
72	石製品	磨石	長さ 3.0 幅 2.1 厚さ 1.7 重さ 5.9						SE5	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面1		
73	石製品	磨石	長さ [6.7] 幅 [4.1] 厚さ [2.2] 重さ 15.8						SE5	輕石 使用面1被熱(剥落)		
74	石製品	磨石	長さ 4.8 幅 3.2 厚さ 3.7 重さ 25.2						SE5	角閃石安山岩 多孔質 複数面にわたる使用痕 全面磨耗一部に線条痕 摩り方		
75	鉄製品	錢貨	径24.7 25.1 厚さ 14.6 重さ 26.2						SE5	不明 11枚付着	136-4	
76	磁器	碗	(12.0) [4.5]	—	—		20	良好	白	SE7	肥前系 内外面施釉・染付	
77	陶器	鉢	—	[8.2]	9.8	K	15	良好	灰白	SE7	瀬戸美濃系 外面上位灰釉・下部灰釉掛け分け 内面灰釉 目痕4遺存 高台内輪拭き取り 1周 SK410と接合	
78	陶器	土瓶	{7.6} [6.3]	—	HIK	15	普通	赤褐色		SE7	外面沈線・鉄輪 銅線付	
79	石製品	砥石	長さ 5.6 幅 6.0 厚さ 2.5 重さ 122.3						SE7	流紋岩 砥石6 被熱(一部黒化)		
80	石製品	磨石	長さ 3.9 幅 3.1 厚さ 2.8 重さ 14.6						SE7	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面2		
81	石製品	磨石	長さ 5.2 幅 3.3 厚さ 2.1 重さ 12.7						SE7	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面2		
82	石製品	磨石	長さ 5.2 幅 3.0 厚さ [2.7] 重さ 23.4						SE7	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面3		
83	磁器	碗	—	[2.3]	(4.8)	—	10	良好	白	SE8	肥前系 内外面施釉	
84	磁器	皿	—	[1.8]	(4.0)	—	10	良好	白	SE8	肥前系 内外面施釉 見込み蛇ノ目輪剥ぎ	
85	陶器	皿	—	[2.3]	(4.5)	IK	5	良好	灰白	SE8	肥前系 内外面青緑釉 見込み蛇ノ目輪剥ぎ	
86	陶器	灯明皿	(11.4)	2.0	(6.0)	DIK	40	良好	灰白	SE8	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面下位・底部輪拭き取り 外面下位灰釉痕遺存	
87	陶器	徳利	—	[5.1]	—	IK	5	良好	にい漆繡	SE8	肥前系 型成形 脱土柘器質 外面陰刻文 脚部・脚部片	
88	陶器	鉢か	—	[2.4]	(5.6)	EIK	10	普通	黄灰	SE8	瀬戸美濃系 内面灰釉	
89	かわらけ	小皿	—	[1.7]	(6.0)	I	5	普通	黄灰	SE8	底部余切痕遺存 被熱(黒化) 内面タール状物質付着	
90	瓦質土器	火鉢	長辺 7.5 短辺 6.8 厚さ 0.8		CHIK	5	普通	にい漆繡		SE8	やや酸化炎焼成 内面煤付着 底部二次利用	
91	銅製品	煙管	長さ 6.0 大口径 1.6 小口径 1.3 重さ 17.3							SE8	棒中 鶴首 内部羅字残存	133-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
92	銅製品	銅金具	長さ [2.3]	厚さ 0.1	重さ 0.2					SE8	棒中	
93	鉄製品	釘	長さ [9.5]	幅 1.0	厚さ 0.3	重さ 12.2				SE8		
94	鉄製品	釘	長さ [4.6]	幅 0.8	厚さ 0.2	重さ 7.3				SE8		
95	石製品	石臼	長さ [10.9]	幅 [12.2]	厚さ [6.6]	重さ 995.8				SE8	砂岩 上臼 下面擱目 側面ビシャン仕上げ状凹凸	138-15

18世紀代であろう。第410図75に出土した鉄製銭貨11枚を示した。

#### 第7号井戸跡（第399・411図）

F7-E6グリッドの区画AEに位置し、第387号土壤より古い。西半分は調査区外である。

井筒は1個体分のみ遺存しており、上段は抜き取られていると考えられる。井筒中位に箇が2箇所みられる。掘り方は円形と推定され、断面は漏斗状を呈する。掘り方がすぼまる部分から井筒が検出されていることから最下段と推定される。

出土遺物は少なく、肥前系磁器の広東碗、陶器の鉄釉鍋土瓶が最新期の陶磁器である。推定廃絶期は18世紀後葉である。

第411図76～82に出土遺物を図示した。76は肥前系磁器の広東碗で、外面は蛸唐草文染付である。78は産地不詳陶器の鉄釉鍋土瓶である。把手には釣り手状に銅線が巻きつく。

#### 第8号井戸跡（第400～405・411図）

F7-F7・G7グリッドの区画AFに位置する。井筒は3段検出されており、2段目は遺存状態が良好である。1段目は遺構確認面から突き出ており、側板の並びは崩れています。井筒の外側には、四方に杭が打たれており、杭同士をつなぐように、横板が渡され、枠形に四方を開いている。また、外枠の東西面には細い竹材を縦に差し込み、壁面を補強している。類似する構造は、第6地点第3号井戸跡〔『栗橋宿跡III』〕にみられる。

第110表 第二面溝跡一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	幅	深さ	方位	備考
13	AB	F7-B7・C6・7	(1.10)	0.25～0.40	0.10	N-74°-E	SK351より古 SE6・SK343と重複
14	AB	F7-B5	(1.50)	0.25	0.10	N-0°-E	SK512と重複
16	AE	F7-E7	5.90	0.55～0.70	0.65	N-40°-E	SE2より古 SD18と重複 SK471と隣接
17	AE	F7-E7・8	(3.40)	0.45～0.65	0.35	N-55°-E	SE2より古 SD18・SK434と重複 SK426と隣接
18	AE	F7-E7	(6.70)	0.50	0.25	N-72°-E	SK426より古 SD16・17・SK472と重複
21	AB/AE	F7-D7	7.60	0.30～0.50	0.10	N-72°-E	SK362より古

出土遺物は少なく、陶磁器は細片が多い。最新期の陶磁器は瀬戸美濃系陶器の柿袖灯明皿である。推定廃絶期は18世紀後半である。

第411図83～95に出土遺物を図示した。87は備前系陶器の角徳利である。19世紀の所産であり、混入と考えられる。

#### （4）溝跡（第412・413図）

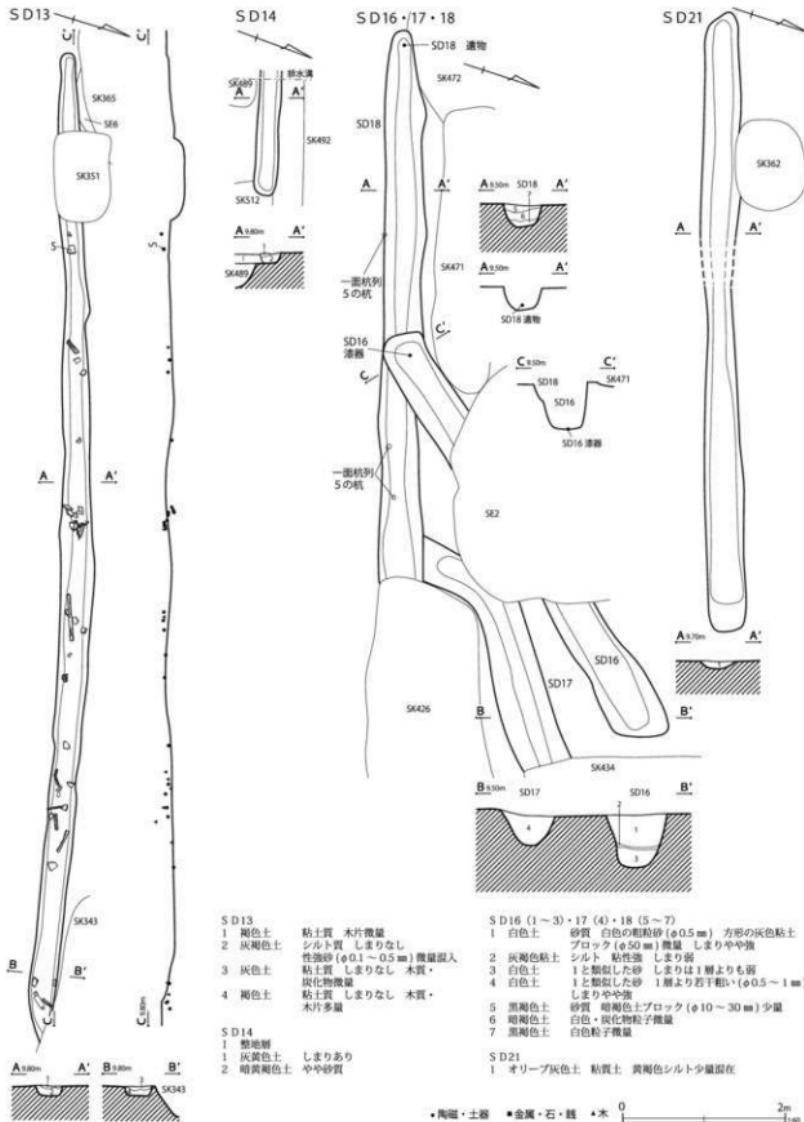
溝跡は6条検出された。第13・14・21号溝跡は日光道中に直交するように延びており、第一面で検出された区画施設に極めて近い位置に掘り込まれている。第一面より古い区画施設の一部を検出した可能性がある。第110表に位置・規模等の基本的な情報を示した。

#### 第13号溝跡（第412・413図）

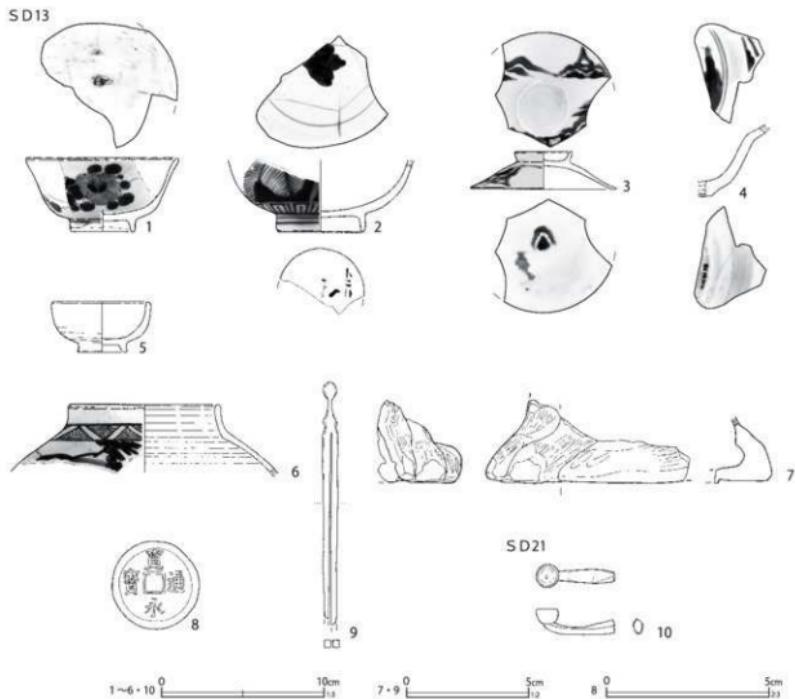
F7-B7・C6・7グリッドの区画ABに位置する。第351号土壤より古く、第6号井戸跡、第343号土壤と重複する。検出長は12.1m、幅0.25～0.4m、深さ0.1mを測る。両端が調査区外へ延びる前に途切れる浅い溝で、第一面の区画施設に平行・隣接することから、より古い時期の区画施設である可能性が高い。出土遺物は一定量あり、瀬戸美濃系陶器の端反形碗、陶器の青土瓶がみられることから推定廃絶期は19世紀中葉である。第413図1～9に出土遺物を示した。

#### 第14号溝跡（第412図）

F7-B5グリッドの区画ABに位置し、第512号土壤と重複する。検出長1.5m、幅0.25m、



第412図 構跡



第413図 溝跡出土遺物

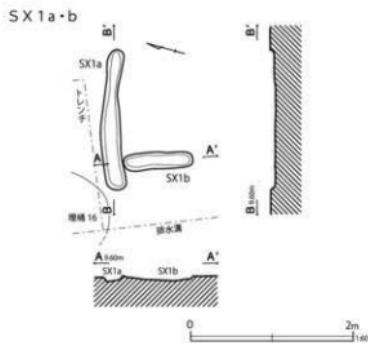
第111表 溝跡出土遺物観察表(第413図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	(9.2)	4.5	3.8	—	20	普通	白	SD13	瀬戸美濃系 内外面施釉、色絵(赤・黒・緑・黄)	86-8
2	磁器	碗	—	[4.4]	(5.2)	—	10	良好	白	SD13	肥前系 内外面施釉、染付 織継底 高台内施縫印(赤)	
3	磁器	蓋	3.4	2.3	(8.9)	—	50	良好	白	SD13	肥前系 内外面施釉、染付	
4	磁器	鉢	—	[4.4]	—	—	5	普通	白	SD13	肥前系 外面青磁釉 内面施釉、染付 蛇の目回形高台	
5	陶器	壺	5.8	3.1	2.8	EIK	60	良好	灰白	SD13	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面ピン底3箇所あり	
6	陶器	土瓶	(9.0)	[4.4]	—	K	5	良好	にぶ・黄褐	SD13	外面白土染付、鉄絵・施釉	
7	土製品	人形	縦 [8.4] 横 [3.4] 高さ [3.4]	重さ 33.3		AIK	—	良好	にぶ・橙	SD13	江戸在地系 左右合二枚型成形 中空	
8	鉄製品	錢貨	径 26.8 厚さ 1.5 重さ 3.9							SD13	寛永通寶(新)	
9	骨製品	管	長さ [10.0] 幅 0.6 厚さ 0.3 重さ 2.5							SD13	表面黒色塗付物付着	142-14
10	銅製品	煙管	長さ 4.9 火皿径 1.4 小口径 0.9 × 0.6 重さ 4.3							SD21	雁首 つぶれて変形	133-1

第112表 第二面性格不明遺構一覧表

単位:m

番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
SX1a	AE	F7-E6	長楕円形	1.20	0.25	0.05	N75°-E	
SX1b	AE	F7-E6	長楕円形	0.85	0.20	0.05	N15°-W	



第414図 性格不明遺構

深さ0.1mを測る。浅く短い溝である。第一面の区画施設に平行・隣接することから、古い時期の区画施設である可能性が高い。遺構が浅いため、東側は検出されなかつた可能性が考えられる。出土遺物は極めて少なく、年代を絞り込める陶器器はみられなかつた。推定廃絶期は不明である。

#### 第16号溝跡（第412図）

F7-E7グリッドの区画AEに位置する。第2号井戸跡より古く、第18号溝跡と重複する。検出長は5.9m、幅0.55～0.7m、深さ0.65mを測る。第18号溝跡の中央部から北東方向に延びている。遺構の性格は不明である。出土遺物は極めて少なく、非掲載遺物に京都信楽系陶器の半球碗がみられる。推定廃絶期は18世紀後半である。

#### 第17号溝跡（第412図）

F7-E7・8グリッドの区画AEに位置する。第2号井戸跡より古く、第18号溝跡、第434号土壌と重複する。検出長は3.4m、幅0.45～0.65m、深さ0.35mを測る。第18号溝跡東端

を起点に、クランクしながら北東方向へ延びている。遺構の性格は不明である。出土遺物はない。遺構の重複関係から、推定廃絶期は19世紀前葉以前である。

#### 第18号溝跡（第412図）

F7-E7グリッドの区画AEに位置する。第426号土壌より古く、第16・17号溝跡、第472号土壌と重複する。検出長は6.7m、幅0.5m、深さ0.25を測る。第一面で検出された区画施設と平行・隣接するが、遺構が深いため、区画施設であるか判断し得ない。遺構の性格は不明だが、第16・17号溝跡と接続していることから一連の遺構の可能性が疑われる。出土遺物は極めて少ない。推定廃絶期は18世紀前半以下である。

#### 第21号溝跡（第412・413図）

F7-D7グリッドの区画AD・AEにまたがって位置し、第362号土壌より古く。検出長は7.6m、幅0.3～0.5m、深さ0.1mを測る。浅い溝跡であるため、掘り込みは途中で途切れている。第一面の区画施設に重なる位置に掘り込まれていることから、古い時期の区画施設であると考えられる。出土遺物は極めて少なく、非掲載遺物に波佐見系磁器のくわんか手碗、瀬戸美濃系陶器の腰錆碗がみられる。推定廃絶期は18世紀前半である。第413図10に出土遺物の銅製煙管を図示した。

#### （5）性格不明遺構（第414図）

性格不明遺構は2基検出された。第112表に位置・規模等の基本的な情報を示した。

溝状の掘り込みが「L」字状に配される。遺構は極めて浅く、覆土は確認することができなかつた。一連の遺構である可能性を想定し、東西方向に延びる溝をa、南北方向に延びる溝をbとした。出土遺物はないため、遺構の時期は不詳である。

## 報告書抄録

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第473集

## 栗橋宿跡VI

首都圏氾濫区域堤防強化対策における

埋蔵文化財発掘調査報告

(第2分冊)

令和4年3月15日 発刷

令和4年3月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493（39）3955

<http://www.saimabun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社